

# ナルシシズムと作品の読本

## 魂を呼び込めないのは（ ）だからだ

一〇一五年 九月

九折空也

とてもきわどい話になつてしまふ。

まず、おれは、魂を呼びこむ當為ができてしまふ。

このことは、一般の知識においては、どうしてもわからない。

現象についても、やり方についても、さっぱりわからない。

たとえば、プラスチックの風呂桶は、螢光イエロー、街角のお菓子屋さんが作るプリンは、カラメルが苦くて甘い。

宇宙ロケットは銀河を夢見て、地球の上空をぐーるぐる。

こんな文章をぶちこんで、文脈がどう成り立つかなんて、一般の人にはどうしてもぜつたいにわからない。

おれには、それがわかつてしまう。

おれの恐ろしいところは、それが、自分としてわかるというだけではなく、なぜそれがわかるのか、原理さえも解き明かしてしまつていてるところだ。

ここに示している文体・文脈は、なかなかエグいので、一般の人がこれを解き明かそうとすると、たぶんガチで体調が悪くなる。

内臓に直接来る感じだ。

フツーに読んでいるぶんにはそれでいいが、なまじ、文学等に興味があり、「この文体は……」みたいな解析的読み取りをしようとする、本当に体調が悪くなる。

さらには体調だけでは済まず、心身が、ひょっとするとしばらくのあいだ、具合悪くなるかもしれない。

そして、さらに、不調のみならず、その先につづく方向づけにも悪影響があり、あなたは誤った方向へ進んでしまうかもしれない。

魂を呼び込めないのは（ ）だからだ  
あなたは、強烈にわかることに啓けているのではなく、  
( ) いるのだ  
ナルシシズムは世界への( )・( )を本意にする  
「キューン」というのは、( )が  
充足するときに鳴る音だ  
ナルシシストは、ずっとずっと「( )」を重ねてきている  
ナルシシズムは( )にはあまり露出しない  
道理が( )わかつていらない  
ナルシシズムの克服は「( )」なので、ナルシシストは  
そちらの方向には進まない  
( )の発見  
感情に振り回されている自分こそが、やつぱり「( )」人

なのだと、ナルシシストは確信する  
自分が( )だなんて、許せない  
ナルシシズム、( )！  
理解はできるけれども( )が勝つ  
創作において、意識を( )させない、( )もさせない  
あなたにとって「本気」とは、ナルシシズムの( )のことだ

8 9 8 3 7 6 7 0 6 3 5 6 3 9 3 6 3 2 2 8 2 2 1 7 1 2 7 1

それぐらい、一般には危険な事象を取り扱っているのだ。

風呂桶がどうこうとか、プリンがどうこうとか、宇宙ロケットがどうこうとか、どうでもいいようなことがだ。

ピカソの絵だって、「ふーん」と観ているぶんには何でもないが、なまじ芸術にあこがれて、本気で読み取ろうとしたりすると、精神がアレな感じになる可能性があるじゃないか。

それと同じだ。

ヤベー文体、ヤベー文脈、ヤバい芸術、ヤバい声というのは、存在するのだ。

多くの人がそれを知らないのは、心身へのリスクとして、しゃれにならぬ危ないからだ。

多くの人は、過去の詩人や文豪と呼ばれる人たちが、早死したり自死したりする、その理由がけつときよくよくわからないだろう。

わからなくていいのだ。

わかるようになつたらあなたまで早死してしまう。

もつと、稽古とか師匠とか、学門とか鍛錬とか、そういうことをがつちり蓄えてから、そうした次元のことがわかるようにならないと、本当に危ない。

健全な人の多くは、

「そんな、芸術で精神がどうこうとか、ぜつたいならないっスよ」

と余裕をもつて笑っているだろうが、念のために知つておくとよいのは、わたしが言つてゐるリスクというのは初め、精神的ではない「体調的」なものとしてやつてくるということだ。体調的なものだから対抗できないし、体調的なものだから無視できない。

何とはわからないが、内臓がでんぐり返つていて、苦しい。

横になつても休まらない、視界が歪んで吐きそう。

わけのわからない不安が湧き、わけのわからない怒りが湧いてくる。

われながら意味不明だ。

けれども直後には、わけのわからない悲嘆と絶望が湧いてくる。

取り立てて、具体的に何かがあるわけじゃない。そんなことは言われなくともわかっている。

何が「気になつて」、眠れない。

何が気になつているのかはわからない。

気になつているものが何なのか、気になるけれど、何かそれを直接視たら、もう何かもが終わつてしまつという氣もする。

そうして、最悪の体調が半日もつづき、二日間もまつたく眠れないといふことがつづいたら、それだけで多くの人はそのとき、「いつそ、もう楽になりたい」

と思いはじめる。

だつて、もう元には戻らないもの、と（そのときは）思う。

それぐらい、本当に危ないことなのだ。

おれが書いてゐる文章は、でたらめに見えるが、じつは子供の落書きではない。

でたらめに見える文章まで、組み入れて、包含して、魂を呼びこむといふことが出来てしまうのだ。

しかも文章に限つたことではない。

おれがあなたの食べるピザに、タバスコを振つたとする。あなたがそれを食べると、そのピザは旨かつたとする。

それであなたは涙を流し始める。

「どうしたの、何に泣いているの」

「わからないです」

こんなの危ないに決まつてゐるだろう。

ピザがおいしくて、うれしくて、タバスコを振つてもらえて、あなたはよろこんで、泣いてゐるのだ。

けれども、それで「泣く」ということは一般の文脈にはありえない。

じゃあ、いつたいどういう文脈でそうなつてはいるんだ、ということになるのだが、そのことはやはり一般の人は解き明かそうとしないほうが多い。

危険だ。

本職の外科医が、患者に執刀するならば、それは崇高な医療行為になるだろうが、そうではない一般の人が、人の腹部にメスを入れるならば、そこに現れるのはただのグロテスクなもので、ただの無意味な流血と解剖だ。

そりや、「吐きそう」にもなるだろうし、その後「眠れない」にもなるだろう。

本当に何かが出来るといふのは、魂を呼びこめる、ということなのだ。そしてそれは、大人の出来ることであつて、幼児の出来ることではない。

何かを主張する文章といふのは、誰にだつて書ける。何であれば、人工知能でも書ける。

自分の主張を、文章化するとして、A Iに代筆を頼むということがあるのだと、ちょうど人類は思い知つた今日このごろだ。

人工知能にそれが出来るといふことは、幼児にもそれは出来るということだ。

一般には、幼児は知能が未発達なので、「性能不足」ということが多いが、知能のバックアップさえ足りれば、幼児でも何かしらの主張の文章は書ける。

幼稚園の赤組のうちに、ツイッター(X)で何かを主張する、それについて白組の子がレスバトルを仕掛けてくるといふことは、すでにこんなに絵空事ではない。

A Iにバックアップさせれば、赤組の子と白組の子が「レスバ」をや

ることは可能だ。

そしてこのことは、こんにち、実年齢としての大人が「レスバ」をやっていることと、本質において差がない。

実年齢が大人であつても、心理的成長の度合いとしては幼児のまま、「レスバ」をしているのだ。

レスバだけではなく、多くのことがそうだ。

だから困っているんじやないか。

どれだけA Iにバックアップさせても、おれの書いている文章を、一般の人が書くことは不可能だ。

おれの書いている文章は、何かを主張しているのではなく、魂を呼びこんでいるのだから。

そして、何度も言うが、魂を呼びこめるといふことが、本当に何かが出来るといふことであつて、そのことは、大人だけが出来ることだ。幼児に出来ることではない。

ここでおれは、何を言つてゐるかといふと、つまり、すでに現在「一般の人」で想起される人々は、実年齢は大人だけど、心理的成長の度合いとしては幼児の人だ、と言つていいことになる。

おれはそれを「一般の人」と呼んでいるのだ。

もうそのようにしか文章を組み立てられないのでしようがない。

あなたの苦悩を、おれはわかっているし、人々の苦悩についてだつて、おれはわかっている。

あなたの苦悩をわかっていないのはあなた自身のほうだ。  
おれはあたらしい方策に、打つて出ることにした。

ここ数年、いやここすでに十年近くか、おれはこの状況に対し、融和策を探つてきたけれど、それにもどうやら限界が来たらしい。

あなたの苦悩の解決のために、あたらしい時代のあたらしいやり方が必要だ。

それで苦悩が解決するとも限らないが、少なくとも整理はされるので、苦悩が暴走するということはなくなるだろう。

あなたの苦悩は何なのか、あなたは何に苦悩していて、なぜ苦悩しているのか。その仕組みのすべては本当はシンプルなのだが、あなたの側からは、そのシンプルな仕組みを読み解くことはできない。

あなたの苦悩は、たとえば、あなたが文章を書いたとしても、そこに魂を呼びこめない、ということにある。

あなたが唄つても踊つても、ピザにタバスコを振つても、そこに魂を呼びこめない。

あなたの苦悩は、ただそれだけが原因だ。

誰かとデートしても、セックスしても、結婚しても、なぜかそこに魂を呼びこめない。

職場で上司が、それっぽいカタカナ語を言い、それっぽいリーダーシップを演じ、それっぽいファシリテーターを務めてみるが、まったくそこに魂は呼びこまれない。

これがいま、ぎやあああ、阿鼻叫喚、となつてているのだ。

なぜいま、一般の人々がやることのすべては、魂を呼びこめないのだろうか。

理由は簡単だ。

それは一般の人々が幼児だからだ。

魂を呼びこむというのが、本当に何かを出来るということだが、それは大人が出来ることであつて、幼児の出来ることではない。

現代人は、一般が幼児なので、魂を呼びこむということは、一般に出来ない。

そのことを知らされないまま、それっぽいことをやらされているので、いま人々はぎやあああ、阿鼻叫喚の中にいるのだ。

いま、多くの人が示す文章なんて、読めたものじやないし、多くの人

が語る何かなんて、聞けたものじやない。

読めたものじやないマンガが流行し、聴けたものじやない歌曲が流行し、観れたものじやないドラマが放映され、見るに堪えないツイートとコメント欄が横行している。

人々は、バカではないが、幼児なのだ。

人々は、バカではないので、ここで魂に求められているものが、おれの言つてのことへの反論ではないということが、うつすらわかつてはいる。

人々は、バカではないので、ここで魂に求められているものは、武装した反論ではなく、おれが唱えているところをくつがえす実作だ、ということがうつすらわかつてはいる。

ただ、その「実作」というやつが、どうしても不可能だ。

幼児には、魂を呼びこむ當為が出来ない。  
だから、幼児は、とりあえず反論はするのだが、その反論を証する実作を提示することは出来ないのだ。

人々は、バカではないので、この悲惨な状況を、なんとかできるものならなんとかしたい、と真剣に思つてはいる。

人々は、バカではないので、この悲惨な状況のまま進むと、全体のこより自分のこととして、たぶん悲惨なことに行き着くということを予見していて、さすがにそれはマズい、と予感している。

自分限りであつても、なんとかなるならなんとかしたいし、それで率直なところ、自分と自分の大切な人だけは救われたい、と思つてはいる。

それでいいじやないか。

全体のことなんて、われわれ小さな個人がなんとかできるようなことではない。

おれがここに書いている文章は、何であれ、おれの「こここのまま」だ

歯に衣を着せていないし、冗長にもなっていない。

言いたい放題に言つてはいるだけで、隠蔽されている作為があるとも思えないだろう。

語り口は、まさか慇懃ではないし、一般に晒す文章としては、むしろ砕けすぎている。

そして、おれの書き話しを愛好する人にとっては、いつもどおり「この人らしい」声が聞こえているだろう。

そのあたり、一言でいうなら、「自由に、のびのび、自分らしく、あるがまま」に、おれは書き話しているわけだ。

ただ、それによつて、なぜかはわからないが、やはり文学の・文章作品の、魂は呼びこまれている。

書き手の魂と、読み手の魂は、縊い交ぜになつてここに呼びこまれている。

だから、内容が気に入ろうが気に入らなかろうが、少なくとも「読めて」しまう。

少なくとも、言つてはいることが「聞こえて」しまう。

書き手の「声」が聞こえてしまう。

それが、魂が呼び込まれているという現象だ。

あなたも「自由に、のびのび、自分らしく、あるがまま」に、書き話してみたらい。

あなたがそれをやると、あなたの書き話しに、魂は呼びこまれない。

あなたがやつても魂は呼び込まれないので。

それがあなたの苦悩だ。

あなたの苦悩なんてその一点にしかない。

どうして、同じように、自由にのびのび、自分らしくあるがままに、やつているのに、自分の場合は魂が呼び込まれないので。

「まだ慣れていないし、練習もしていないから」

誰だつてそう考える。

そこから数年間、そのことへの練習と研究を積んだとしよう。

あなたがその練習と研究で知ることは、あなたのその営為には、やはり魂が呼び込まれないということだ。

あなたが真剣に研究するなら、あなたはその研究で、自分のする営為のすべてには、魂が呼び込まれないということを、強固かつ実証的に知るのだ。

なんという研究結果だろうか。

そうして研究結果として得られた知見は「正しい」だけに困つてしまふ。

正しい知見を得させてくれる研究レポートには、値打ちがあるに決まつているので、困つてしまふ。

これではまるで、自分に生きる値打ちがないというような説を、自ら提唱してレポートしているようではないか。

だからこのことは危険なのだ。

過去の、文豪と呼ばれた人たちなども、けつときよくこの単純なことで早死・自死等に至つてはいる。

一般に、音楽指揮者は長生きするということが知られているが、あなたが立場上その音楽指揮者だったとして、自分がコンダクトするその演奏に、

「まったく魂が呼び込まれない」

ということが確認されるばかりなら、あなたは何年間、そのことに耐えられるだろうか。

魂が呼び込まれない演奏は、たとえ五分間のことであつたとしても、指揮者の膝をうつすら折る力がある。

音楽指揮者は、魂を呼びこむことが出来るという場合には長生きするのであって、そうでない場合はものすごい勢いで早死するだろう。

おれはいまこのように、よくわからない文章作品を書き話しているが、ここに魂を呼びこむことができるからこそ、おれは書きながら満たされているのだ。

多くの人は、魂が呼び込まれない文章を、原稿用紙の五枚も書いたら、それだけで膝を折られ、ずいぶん厭（いや）な思いをさせられるだろう。

そんなことが、三日も四日も連続でつづいたりしたら。

われわれの精神はそんなに頑健ではないしタフでもない。

だから、つづけてはいけないし、つづけていくべきでもない。

かといって、辞めたからといって、別の道が拓けるわけでもないが…

⋮

単純に言つて、けつこうな挫折を味わう。

挫折、英語で言えばフラストレーションだ。

挫折がレコードされ、精神にフラストレーションの痛苦を味わう。

あなたが五年も十年も、フラストレーションの痛苦の中、練習して研究して、仮に文章を書きつづけたとしても、おれがいまここに書き話して

いるテキトーな文体のやつのようには、魂を呼びこむことは出来ない。あなたの苦悩は、どこまでもこの一点にのみ発生している。

バリエーションなんか表面的なものだ。

表面的にはさまざまであつても、一点、「魂が呼び込めない」という、

その挫折とフラストレーションの痛み、みじめさに苦しんでいる。

なぜ魂が呼び込めないのか。

その理由もきわめて単純だ。

幼児だからだ。

魂を呼びこむというのは、大人が出来ることであつて、幼児の出来ることではない。

実年齢は大人でも、心理的成長の度合いとしては幼児のままということがいくらもある。

何をどうやつても、幼稚園の赤組・白組からは、おれの文章は出て来ないのだ。

おれはここ十年近く、人々が幼児なのはさておき、魂を呼びこむという実作・実物・実演ばかりを示してきた。

そのことがなければ話の始まりようがないと思ったからだ。

町中には、幼稚園があるが、幼稚園の役割は、「幼児たちに幼児性を指摘すること」ではあるまい。

幼児たちは、幼稚園でも保育園でも、「大人」というものがいて、魂が呼び込まれるものがあるということを、直接の体験として得ていくしかないはずだ。

原則としていまでも、何よりも先に魂の呼び込まれる実作・実体験のようなものが必要だとは思うが、そのことのボーナス期間はもう過ぎたのだと思う。

おれはやり方を変える。

おれの目論見には、

「魂が呼び込まれる、その実作、実物、実体験が与えられれば、人はおのずと幼児性を脱却していくはずだ」

という期待が多く含まれていた。

そしてその期待は、十年前には、きっと妥当で正しかったのだと思う。

けれども時代は変わり、その期待に懸ける手法は、もう現代では正しくない。

そして人々は、この時代の変化というものに対し、ほぼ百パーセントというほどに従順だ。

時代的に、カラスが白くなつたら、きのうまでのことはすべて忘れて、カラスは白い、ということに、人々はなつてしまふ。

そのようにして、思想に連續性がないというのもまた、幼児性のひとつ現れだ。

おれはやり方を変える。

おれのする當為は、魂を呼びこむが、あなたのする當為は、魂を呼びこまない。

あなたの苦悩なんてその一点に尽きてている。

そしておれが満たされているのもその一点に尽きてている。

なぜおれの當為は魂を呼びこみ、あなたの當為は魂を呼びこまないのか。

それはおれが大人で、あなたが幼児だからだ。

実年齢ではなく、心理的成長の度合いとして。

魂を呼びこむということは、大人のすることで、大人の取り扱う魂魄、靈魂と氣魄の當為だ。

あなたがする當為は、大人のするそれではなく、幼児のする當為だ。

大人のする當為を魂魄のそれと呼んだとして、幼児のする當為は何のそれと呼べばいいのだろうか。

幼児のする當為は「ナルシシズム」のそれだ。

おれのする當為は魂魄のそれだから、魂を呼びこむ。

あなたのする當為はナルシシズムのそれだから、魂を呼びこまない。

あなたが苦悩する理由はこの一点にある。

あなたは実年齢としては幼児ではないので、自分のする當為が魂魄のそれではなくナルシシズムのそれだということに、恥と罪を覚えている。

(日本人はそれを恥と感じ、西洋人はそれを罪「sin, guilt」と感じることが多い)

あなたは、強烈にわかることに啓けているのではなく、（ ）いるのだ

魂を呼びこめりや何でもいいし、魂を呼びこむしかない。

おれがかつて、地べたを這つていたのはこれが理由だ。

おれは何も、自己卑下していたわけではなくて、魂を呼びこむその受け皿は、大地なのだ。

だから地べたを這つていただけだ。

受け皿が逆さまになつていたら、何も受けられないし、何も呼び込めない。

受け皿は地べたでいいのだ。

別にテーブルの上でもかまわないが、そのときはテーブルの天板が「地べた」だ。

ナルシシストはここがあべこべになつてているのかもしれない。

おれとあなたはあべこべなのだ。

おれは、おれの氣魄が、地べたに受け皿を為すということを、高貴で高潔なことだと思っている。

馬鹿げているが、それは高貴なことなのだ。

地べたにまで、高いところの魂が注がれてくるということなのだから。

ナルシシストはこの観念があべこべだ。

ナルシシストは、ひっくり返った皿だ。

おれの氣魄は、地べたに受け皿を為し、そこに高い魂が注がれて、万事が統合の向きにはたらく。

ナルシシストは、その受け皿がひっくり返つていて、そこにかつて注

がっていたはずの魂は捨てられ、万事は解体の向きにはたらくだらう。

そして解体というのは常にグロテスクだ。

こじれた結ばれが解決するという場合にはよいが、そうでない場合、解体すべきでない統合物を解体し、グロくなつてグロを吐く、という愚かなことになる。

それはナルシシストがふざけているということではない。

ナルシシストは真剣なのだ。

真剣で必死だ。その必死さでいうなら、必死さの度合いはおれなどよりはるかに上かもしない。

だがそれでも、じつさいにやつてることとは、あべこべなので、ふざけているし、両者を並べると、やはりナルシシストのほうが「ふざけている」のだ。

ふざけているわけではないのに、どうしても、根性としてはふざけているということになつてしまふ。

それがナルシズムだ。

おれはやり方を変えると言つた。

それでじつさい、やはりこのときも、おれは自分の文体・文面を、地べたに這う受け皿と為し、そこに魂を呼びこんでいる。

だから、読めるのだ。

解析しなくとも読める。

ナルシシストはこれを解体することしかできない。

ナルシシストの側は実作を示せない。

ナルシシストにできることは、ヨソの実作を正義風に解体することだけだ。

悪口を言つてゐるのではない。

本当に、それが「出て来る」ということだ。その「出て来る」を「出来る」と呼んでいるだけだ。

おれからは気魄の受け皿と呼びこまれる魂の実作が「出て来る」ということ。

ナルシシストからはそうではない逆向きのものが「出て来る」ということ、それを述べているだけだ。

当人としてはふざけてそうしているつもりではないということはよくよくわかつている。

当人は、六歳ぐらいから、心理的に成長していないので、おのずとそういうならざるを得ないというだけであつて、ふざけていたり悪意があつたりしてそうなつてゐるのではないということは、よくよくわかつている。これも悪口ではない。

ただの悪口であればどれだけマシか。

そうではない、本当のガチガチの事実だから困るのだ。

医者が患者に、メタボを通告するとき、医者は「このメタボ野郎」という悪口を言つてゐるのではなく、ガチのメタボを通告してゐるだけだ。

そして、それがただの悪口ではない、ガチガチの事実だけに、こちらは本当に困るということ。

現代人は六歳あるいは六歳未満なのだ。

加齢すると、生理的・社会的・知能的には発達するが、心理的には成長しない。

加齢すると、乳歯は永久歯に生え変わり、第二次性徴が起つてきては、声変わりしたり月経が来たりするが、そうしたことは自動的に起る一方、心理的成長というのは勝手には起こらない。

心理的成長はあくまで、当人が向き合い、当人が乗り越えてきたぶんしか得られてこない。

だから、還暦を超えて六歳のままとか、年齢的には後期高齢者になつたのに心理的には六歳未満とか、そうしたことはいくらでもある。

それはまったくめずらしくない、この世に日常的にありふれているこ

とだ。

とつぜんだが、あなたには何が「わかる」だろうか。

人は、自分にとつてわからないものは攝取しない。

たとえば、幼い男児は「コロコロコミック」を読むし、幼い女児は「ちやお」を読むだろう。

これは基本的に入れ替わらないし、この差分はわざとらしい性差などではない。

單に、男児には「ちやお」がわからないし、女児には「コロコロコミック」がわからないだけだ。

人はわからないものを攝取はしない。

幼い男児に、「善の研究」（西田幾多郎）を読ませたつて、わからないし、幼い女児に、「留魂録」（吉田松陰）を読ませたつて、わからない。

幼い男児は、やがて加齢してゆき、二十歳にもなるが、二十歳になつて「善の研究」を読むかというと、ほとんどの場合は読まない。

わからぬものを攝取はできないのだ。

二十歳になつて、善の研究は読まない男性と、二十歳になつて、留魂録は読まない女性が、それぞれ同じ大学に入り、同じサークルに入り、同じ「陽キャ」をやつたとする。

彼らはそのとき、本当に何かを「わかっている」のだろうか。

本当に、二十歳のその場所で、何かを攝取しているのだろうか。

十五歳の時点で、男は「進撃の巨人」をわかっていた。女は、再放送された「セーラームーン」をわかっていた。

二十歳になつて、ふたりは大学生になつており、同じサークル活動をしており、男女交際をして、デートをしてセックスをした。

本当に何かを攝取できているのだろうか。

ふたりで映画鑑賞会をし、「ローマの休日」のような古い映画を観るこ

とも可能だろう。

けれども、冷静になつて考えてみてほしい。

二十歳の彼は、「善の研究」との心理的距離をまったく詰め寄らせてはいない。

二十歳の彼女も、「留魂録」との心理的距離はまったく詰め寄らせていないだろう。

彼らは本当に心理的成长を得てきているのだろうか。

加齢して、知能は大学受験に対応でき、立場は大学生になり、成人して飲酒もセックスもするようになつたとして、そのことに心理的成长は自動的にくつついではこない。

「ローマの休日」を観れば、いちおうそれっぽいムードにはなるだろう。けれども、

「全日本、ヘン顔、選手権！」

というテレビ番組を観たときの彼のすなおな大笑い。

「恋愛リアルバトル・彼女が泣くとき」

という海外ドラマを見たときの彼女のストレートな熱中ぶり。

たぶん彼らが本当に「わかっている」のは、そういうものなのだ。

単純な、勢いのあるヘン顔、その面白さが「わかる」ので、彼は大笑いしている。

単純な、ドレスと美貌に演出されて、金持ちの男にむらがり、「負けたくない」と戦つて傷つく女心、それの悲痛さが「わかる」ので、彼女は肩入れして熱中している。

「ローマの休日」は、本当によくわかっていない。

それっぽいムードになるだけで、へへふたりの体の真ん中には、在りし日のローマの晴れがましい友情の光景など宿っていないvv。

あなたが本当に「わかる」ことって何だ。  
子猫がかわいい、ということか。

オリンピックの試合が燃える、ということか。

この服とネイルがかわいくて、あとこの人は本当に脚がキレイ、といふことか。

根暗な画像がよく映えるワードセンス、か。

誰がどの仕事でどうチヨンボしがちか、ということか。

ホルモン焼きの食感とあぶらっこさがどう旨いか、ということか。

生まれつきの財産がどれだけ有利で、いじめられっ子がどれだけ不利か、ということか。

どういうアピールをしたら、男が性的にコロツと引っかかりやすいか、ということか。

人が一般にどういう人間関係に従属しやすいかという、人情味のことか。

悪趣味な拷問や、SM、その他の残虐性か。

目上の人に対するしきたりや、親族に対する風習か。

ポケモンの種類とひっさつわざか。

会社、権力の中での立ち回りか。

中には「電車」だけ異様にわかるという人たちもいるらしい。

おれはあなたに必要な、本当のことを教えよう。

あなたは根こそぎ、誤解をしたまま生きているのだ。

あなたにとつて「わかる」ということ、それは、「わかつていいない」ということなのだ。

おれがいまから教えることは、必ずあなたに体得可能なことだ。

六歳未満の幼児が、コロコロコロコミックに熱中していたとする。

それは、彼にとつて、コロコロコロコミックが「わかる」ということだが、同時にそれは、幼児だから「何もわかつていしない」ということでもあるはずだ。

幼女が「ちゃお」を読み耽っていたとして、それは彼女にとつてちや

おが「わかる」ということだが、やはりそれは、幼女だから何もわかつてしないというこの表れでもあるだろう。

この、「Aがわかる」ということが、逆に何もわかつてしないということを証している」という状態のことを、幼児性ナルシシズムと言う。

もちろん実年齢として幼児のあいだはそれでいいのだ。

だが、このことは、実年齢がいくつになつても引きずられる。

二十歳にならうが、中年にならうが初老にならうが、還暦にならうが、後期高齢者にならうが、引きずられている。

何歳にならうが、ずっと現役の幼児性のまま生きているのだ。

進撃の巨人が「わかる」ということは、「何もわかつてしない」ということだ。

セーラームーンや新世纪エヴァンゲリヲンが「わかる」ということは、「何もわかつてしない」ということだ。

このことはむしろ、あなたが長年抱えている不安や恐怖、いたたまれなさなどに、うまく当てはまる説明なのではないだろうか。

あなたには、あなたの内部で、強烈に「わかつてている」ことがある。

だからあなたは、自分ひとりが単独でいる場合には、どことなく無敵感を覚えている。

けれども他の誰かと絡むとダメだ。

なぜなら、あなたが強烈に「わかつてている」ことが、他の誰かには通じないからだ。

二十歳の彼が観ている「ヘン顔・選手権」の面白さは、付き合っている彼女には通じない。

二十歳の彼女が観ている「恋愛リアルバトル・彼女が泣くとき」の切なさは、付き合っている彼には通じない。

ふたりで「ローマの休日」を観ても、「ローマの休日」はふたりともよくわかつてしない。

「ローマの休日」を観て、彼は「あのときの顔がすごく面白かった、名演技だと思う」と思つており、彼女は「あのときの恋愛感情つて、すごくわかる気がする、だから脚本がすごい」と思つている。

それはどちらとも「ローマの休日」ではない。

二十歳の彼は、ヘン顔がわかるというより、じつは「ヘン顔の面白さしかわからない」のだ。

二十歳の彼女は、恋愛リアリティがわかるというより、じつは「恋愛感情しかわからない」のだ。

だから善の研究や留魂録は攝取のしようがない。

あなたには、あなたの内部で、強烈に「わかつている」ことがある。

それは、じつはわかつていることへ啓けているということではないのだ。

それは、閉塞している中に、そのことだけが満ちてているという状態だ。

たとえば、閉塞している中に「かわいい」だけが満ちていたら、わかっているもののすべては、子猫と、おしゃれと、アイドルと、キャラクターと、母性本能だけになる。

閉塞している中に、「面白い」だけが満ちていたら、わかつているもののすべては、ヘン顔と、ドジと、人のぶざまさ、奇抜な恰好と、奇抜な举动だけになる。

それは啓けているのではなく閉じてているのだ。

この根底にある誤解が、ナルシシズムの実態、あるいは実物だ。

あなたは、強烈にわかることへ啓けているのではなく、閉じ込められているところのことが強烈にわかる、だけだ。

センスがあるとか才能があるとかいうことでは残念ながらない。

だからあなたは、「わかっている自分」として話すとき、ますます、人に話が通じないという憂き目にあう。

あなたはずつと誤解をしているのだ。

もう長いあいだ、数十年にわたって、誤解したまま生きている。  
六歳児が、「ヘン顔・選手権」を観て、大笑いしたとして、六歳児はその感想を母親に言い、母親に同調を求めるだろう。

「ママ、これすっごく面白いね！」

それについて母親は、そうね、とうなずいて微笑んでくれただろうが、それは母親が我が子のナルシシズムを、甘えの時期として受け止めただけにすぎない。

同じやり方が、実年齢として大人になって、知人や同僚に通じるわけがない。

ただ生きているだけで心理的成长が得られるわけではないから。

知人や同僚は、いわゆる「空気を読む」ということをして、まるでかつての母親みたいに「そうだね」と微笑んでくれるかもしれないが、やはり母親ではないので、そのことが積み重なつてくると、内心では「付き合いきれない」と感じはじめる。

当たり前だ。

彼氏がずっとヘン顔選手権の話をしてくるのには、彼女は付き合いきれないし、彼女がずっと恋愛リアルバトルの話をしてくるのにも、彼は付き合いきれない。

限界まで空気を読むということをつづけるだろうが、そのことはとても消耗するし、つづけたところで根本的に不毛が勝る。

あなたには何が「わかる」だろうか。

あなたには、あなたの内部で強烈に「わかる」ことがある。

あなたにとつて、それは強烈にわかる得意分野のため、あなたはそのことについては自信がある。

子猫がかわいいとか、オリンピックの試合が燃えるとか、ネイルがか

わいいとか、このワードセンスが光っているとか、あの人はこういう仕事をミスをしやすいとか。

強烈にわかり、強烈な自信があるので、あなたは自分の力をぐわっと急上昇させる。

それで、受け皿の配置があべこべになる。

受け皿は持ち上げられ、ひっくり返され、注がれていたはずの魂も捨てられ、失われる。

氣魄の使い方があべこべで、これは、平たく言つてバカだ。

魂を呼びこむなんてこと、これでは出来るわけがない。

多くの人の、実作・実演・実態は、このあべこべで示される。

実作、実演、実態、実行ということになれば、スイッチが入るのだ。

ナルシシズムのスイッチが入る。

そのことにこそ自信があるから。

ふだんは秘めている、「強烈にわかる」がそこにはあるから。

強烈にわかるそれが、最強の自信で、しかもそこには自信ゆえの、快感まで伴うから。

こうして人々のナルシシズムは、強烈な自信に、甘美な味わいさえ見えながら、結果的にはグロテスクな、すべての解体ということに行き着く。

少々でも頭がよければ、じやあこの受け皿を正位置に置けばよいのだということ、地べたに置けばよいのだということに気づくか、過去の失敗した文豪たちは、みずからの幼稚さを認める氣魄を持つことができず、けつときよく六歳児未満のまま死んだ。

## ナルシシズムは世界への（ ）・

（ ）を本意にする

人にはさまざまな「気持ち」がある。

「気持ち」は、幼児にだってある。

幼児にだって、「あの子が食べているソフトクリームを、僕だって食べたい」という絶対の気持ちがある。

だから、デパートの床にのたうち回つても、食べる、買つてもらう、と泣き叫ぶということをする。

大人でも、そういう「気持ち」は持つている。

たとえば、いわゆる婚活で苦戦している中年女性は、それでも「ハイスペックな相手と、なんとでもして結婚して、知り合いのすべてを見返してやりたい」という気持ちを、絶対のものとして持つている。

なんとかして自分も勝ち組になりたいという気持ちや、自分のことを馬鹿にした人のだけは絶対に許さないという気持ち、あるいは逆に、「もう何をどうしたって無理、無駄」という逆の気持ちも、人によつては強く持つているだろう。

あなたのご両親は、「お盆と正月には必ず帰ってきてほしい、それが子というものですよ」という気持ちを、あなたに向けているかもしれないし、あなたの彼氏は、「女は絶対、男を立てるべきなんだよね。結婚してからは絶対そうしてもらおう」という気持ちを、あなたに向けているかもしれない。

気持ち、といちいち言つていると語が長くなるので、「気」という短い語に変えよう。

たとえばわたしに、あなたを笑わせたいという気持ちがあったとする。

その場合、わたしの「気」、あなたを笑わせたいという「気」は、どう

作用するだろうか。

その「気」になれば、すべてがうまくいくだろうか。

なかなかそんなことはない。

その気になればすべてうまくいく、ということなら、われわれはなに

ひとつ苦労せず生きてゆけるだろう。

あなたを笑わせる、というわたしの行為を、短縮のために「A」としよう。

わたしは「A気」を持つているということになる。

そのとき、わたしがあなたを笑わせられるかどうかは、そこに「A魂」を呼び込めるかどうかにかかっている。

おれがその気になつたからといって、あなたがその気になつてくれるわけじゃない。

おれが笑わせる気でも、あなたが笑つてくれるとはかぎらないだろう。あなたはあくまで、おれに屈託がなく、おれの声や話が聞き取りやすく面白かったというとき、その面白さとリラックスのゆえに笑う、というだけのはずだ。

おれの気なんか関係ない。

おれのA気が、A魂を呼びこんだとき、あなたは笑うというだけだ。

笑いの魂が呼び込まれたので、あなたは笑つてしまふという、ただそれだけだ。

そうして、魂を呼びこめるということが、本当に何かが出来るということ。

もしおれが、そうした本当のことを出来ないならば、あなたはおれに對して氣を使い、空氣を読んで、おれのジョークが面白くて笑つたといふ=ふりをしてくれるだろう。

そのことは疲れるので、あなたはおれとの時間をよろこばなくなる。

すべて当たり前のことだ。

あなたを笑わせるだけでなく、あなたにやる氣を出させたり、あるいは何かを教えたり、何かを食わせたり、おれからあなたへの行為というのは無数にあるに違いない。

それらのすべては、A気と呼んでよいはずだ。

そしてAが成るか否かは、すべてA魂を呼び込めるかどうかにかかっている。

たとえば、あなたに旨いメシを食わせようとすると、すべてはそこに「食事の魂」を呼び込めるかどうかにかかっている。

高い金を払つて高級なレストランに頼つたからといって、そこで食うメシが必ずしも素敵な食事になるとは限らない。

高級なレストランじたいに興奮するのは、単に自分の低級ぶりにコンプレックスがある人だけだ。

おれの知る限り、おれがメシを食わせて、「生まれて初めて食事というものをしました」と泣き出した人はとても多い。

誰だって、そこまで生きてきているということは、メシを食つてきてはいるはずなのだ。

が、食事の魂がないまま、物理的にだけメシを食うという行為は、まるで呪(のろ)いだ。

まるで、というより、そのまんま呪いだ。

その説明はいまは置いておこう。

Aがまともに成るかどうかは、Aの魂を呼び込めるかどうか、その一点にかかっている。

そのとき、おれの「気」はどのようにはたらいているのだろう。

それについては、おれは専門家として答えよう。

答、おれの「気」は、何もしていない。

気魄というのは「何もしない」というのが正しい使い方なのだ。

ものすごいエネルギーを放出していたとしても、何もしない。

まんべんなく行きわたるだけで、何もしないということ。その「ノー」のはたらきが、気魄の正しいはたらきだ。

気魄に「イエス」のはたらきはない。

気魄はただ、受け皿を形成する。

受け皿が何かをするわけではない、ただの受け皿だ。

何も降つてこないなら、じつさい本当に何もない。

けれども、本当にその正しい受け皿が形成されるなら、そこには祈つたとおりの魂が呼び込まれてくる。

「メシ食うか」

その一言に、気魄が発され、気魄は受け皿を形成する。

気魄は、地をゆきわたり、人にまんべんなく「何もしない」を与え、ただすべてを受け皿にする。

そこに食事の魂が呼び込まれる。

魂に「イエス」のはたらきがある。

おれはそのとき、あなたをその気にさせる、というようなはたらきかけはしない。

あなたはたいてい、その気になつてしまふけれども、それはおれがその「気」のはたらきかけをしたということではないのだ。

あなたは、何もされておらず、ゆえに、あなた自身で、その気になるのだ。

気魄の受け皿に食事の魂が呼びこまれた。

あなたにはそのとき、輝かしいほどの「食事」につながる道に立つている。

じつにウマそうじゃないか。

そんなメシを拒絶する人はいない。

人にはいろんな気持ちがある。

おれはいまここに、面白い文章作品を書こうという気持ちがある。

それをあなたに読ませようという気持ちもあるし、あなたの足しになればいいなど願う気持ちもある。

読みやすくなればいけないし、かといって陳腐では話にならないし、合理的な内容に加え、それ以上の文学の力を具えていなくてはならない、

という、おれなりに真剣な気持ちがある。

その気になつて取り掛かれば実現されるだろうか。

あなたは多くのことについて、この、「その気になつて取り掛かる」ということをやってみたはずだ。

そのやり方は、あなたにほんと成功体験を与えないが、それでもあなたは、死ぬまでそのやり方をつづけるだろう。

なぜそんな不毛なやり方をつづけるのだろうか。

ためしにちょっと、考えてみてほしい。

これだけ露骨に警告していても、あなたは多くの場合、本当に死ぬまでその不毛なやり方を選びつづけるから。

仮にここに、Xさんを呼んだとする。

わたしはXさんに、何か冗談を言うか、漫談でもして、Xさんを笑わせることにしよう。

それを引きついで、あなたもXさんを笑わせればよい。

でもきっと、あなたはXさんを笑わせることができない。

センスがないのか、慣れていないのか、それともそのときになつてきゆうに、「向いていない」のか。

そのときになつて、きゅうに「向いていない」と言い出す人は、世の中とてもありふれていて、むしろ多くの人にとってスタンダードとさえ言える。

気の利いたウイットの文脈や、小嘲（こばなし）のようなものを、おれ

がメモにしてあなたに書き与え、あなたにカンニングさせることにしようと。

あなたはその虎の巻にしたがい、ウイットの文脈や小噺を示す。

そのようにしても、やはりXさんは、お追従（ついしょう）ていどにしか笑つてくれないだろう。

どうすればいいかといつて、あなたは初めから、けつこうな圧力で、Xさんに「空気を読ませる」ということをする。

それがわれわれの日常だろう。

笑わせようとしているのだから、笑つてあげないと氣の毒でショ！

ねつ！ という、圧力をかけて、人を支配・コントロールするだけだ。

その点、おれはむしろ、前もって「笑わなくていいですよ」とXさんに向け、慎重に言うことにしよう。

そうしたつて、けつきよくXさんは笑つてしまふから。

おれは笑いの魂を呼びこむから、Xさんは、精神運動抑制（うつ病）にでもなつていなかぎり、当たり前に笑う。

さて、さきほどの問いかけに対する答えは出ただろうか。  
なぜあなたは、不毛なやり方をえんえんつづけ、そのやり方から引き下がらないのか。

答、あなたは自分の「気持ち」を実現したいからだ。

「気持ち」が直接作用してほしい。

なぜそうして、「気持ち」が直接実現されてほしいのか。

それは、その「気持ち」こそが、「わたし」なのだと、あなた自身に自己負されているからだ。

あなたは、本当にはXさんを笑わせたいのではなくて、自分のそうした気持ちが、世界に対して支配的にはたらく、ということを望んでいるのだ。

このことは、しっかりと考えて、みずからで看破しておく必要がある。

たとえば、世界平和を願う気持ちをもつことは、誰にとつても簡単な

ことだ。その気持ちを、自己主張・自己表現として打ち出していく人も少なくはない。

けれどもそうした人たちにとつて、世界がきゅうに平和になることは、じつのところさしたるよろこびをもたらしはしない。

なぜか？

彼らが望んでいるのは、本当に世<sup>レ</sup>界平和ではなく、世界平和を願う

自分の「気持ち」が、世界に作用し、世界に對して支配的・コントロール的にはたらく、ということだからだ。

「あたしの気持ちが通じて、世界が平和になつたの」

ということを望んでいる。

あたしの気持ちなど関係なしに、勝手に世界が平和になつたとしたら、そのことをその人はよろこばない。

それがナルシシズムなのだ。

ナルシシストは、世界に對し、自分の気持ち（自我）が、支配的・コントロール的に作用することを望んでいる。

当人にそんなりはないが、そんなりがないのは、そんなりまで考えたことがないからにすぎない。

あなたは、あなたなりにXさんを笑わせようとする「気持ち」を持つていて。

あなたは、そうした自分の「気持ち」に無上の価値を置いており、その価値の膝下に、Xさんは支配・コントロールされるべきだと思つてているのだ。

だからあなたからはそういう圧力が出る。

「あなたを笑わせようという、あたしの気持ち。これを受けて、あなたは支配されるべきよ」

その気圧を受けて、Xさんは波風を立てないよう、空気を読む、といふことをする。

ナルシシズムはこうして、他者への支配・コントロールを、本意とし、また重大な快感にもしている。

おれの場合は、そうしたことはいつさい混入しない。

もし脳波計で測れるものなら、測つてみてほしいものだ。本当にこいつ、数値がゼロだ、という衝撃の測定結果をあなたは目撃するだろう。

おれのやることは、笑いの魂を呼びこむことだけ。

おれの気魄は、百パーセントそのことにのみ向けられる。

受け皿の形成にのみ向けられる。

そこに笑いの魂が呼びこまるのだが、それでXさんが笑つたとして、

それはもう、誰が誰を笑わせているのかよくわからない。

呼び込まれた魂による事象だ。

少なくとも、おれの「気持ち」が、Xさんを笑わせているのでは決してない。

おれにとつては、この「魂が呼び込まれる」というナゾの現象、これのほうが、命を帶びていて、ふしきで崇高だ。

おれが仕手かもしれないが、それにしてもおれのよろこびは、人がそうして不明のまま、呼びこまれた魂に出会う、そこから命を得る、といふことじたいにある。

おれの気持ちが通じてうれしいよズキューンみたいなことがいまさらおれにあるわけがない。

おれはもう幼児ではないのだから。

このように説明してみれば、ずばり、あなたは気魄の使い方なんてわかつていないのである。

気魄ということの存在も、それを使う方向も、さっぱりわかつていな

いだろう。

そしてほとんどの場合、あなたはいまこうして、おれの圧倒的な解説にひれ伏しながらも、内心の根っこで、鳴りやまない反発がずっとあるというのを感じ取るはず。

その反発は何なのか。

「……いや、やっぱり、オレの気持ちだよ」

「……ううん、違う。それってやっぱり、あたしの気持ちなの」

という声だ。

ナルシシズムの声だ。

その声が消えないことを、おれは知っている。

あなたは知らないかもしれないが、おれは知っている。

おれが示すところの、気魄の使い方は、徹頭徹尾「受け皿」の形成であつて、それじたいが何かを実現するということはない。

おれは、呼びこまれたA魂のみが、A事象を実現する、と言つており、A実現の功績はいつさいおれの「気」にはないと述べている。

あなたはそうではないのだ。

あなたは自分の「気持ち」、自分のその「気」を、最上位に置いている。

あなたはへへ世界が自分の気持ちの受け皿になるvvと思つてているのだ。

おれの取り組んでいることとは逆だ。

おれは自分の気魄が、受け皿を形成し、そこに魂が呼び込まれると唱えている。

あなたは、世界を受け皿とみなし、その受け皿に自分の「気持ち」を注ぎ込み、それによつて何かが実現されると思つていて。

だからどこまで行つても、ここでおれの話していふことは、あなたにとつてけつきよくは「よくわからない」というものになる。

説明されているうちには、その気になれるかもしれないけれども、いざ

自分で何か小さなことでも取り掛かろうとしたら、あなたはコロツと本性に戻る。

あるいは、何かストレスが掛かつたり、あるいは、あなたと同じ性質の誰かに触れたら、コロツと本性に戻る。

あなたには、れっきとした「あなたのやり方」があるのだ。

「世界を受け皿にして、自分の気持ちを注ぎ込み、何かが実現される」

それがナルシシズムだ。

おれはここ十年近く、このことと融和策を探ってきたが、時代と共に、融和策は破綻した。

おれのやり方は違う。いまではもうはつきりと違うのだということを、明らかに述べることになった。

おれのやり方は、あなたとまったく異なるもので、それはむしろ、あなたにとつて最も必要ないと感じられるやり方で、あなたにとつていちばん認められないというやり方なのだ。

勉強・研究したので、仕組みはずっと昔から、もつと細かに知っているのだ。

ただ、それをただ理屈通りに説明しても、あなたにはけつきよく伝わらない。

けつきよく伝わらないし、仮に伝わったとして、それではけつきよく解決はしないのだという、その実例さえ、おれは十代のころに目撃している。

もちろん、けつきよく解決するかどうかなんて、その人次第でしかないのだが、おれは少なくとも、ナルシシズムがどういう仕組みかということの理屈以前に、それを超克してきた当事者としての、実物を示さねばならない。

だからおれは、ここに、大人になつた者が、こうして魂を呼びこむということができるのだという、実作をこそ示し続けている。

そのことはナルシシズムの理論説明よりはるかに優先されることだ。

おれがここに呼び込んでいるのは、ナルシシズムの呪いではない。

おれがここに呼び込んでいるのは、文学の魂で、さらに加えて言うと、ロツクの魂だ。

おれ自身、そのようにしてナルシシズムを超克してきた——文学とロツクだった——のだから、この題材において、呼び込まれる魂はそのようなものにならざるを得ない。

おれの書き話す文章は、たいていいつも、そういう魂を呼びこみ、読み手はその文章から、そういうサウンドを聞き取ることができるはずだ。

おれはこのように、文学とロツクの魂を呼びこむが、ナルシシストはここで魂を呼びこむということはできず、代わりに自分の「気持ち」をぶつ込む。

なぜ魂を呼びこまず、勝手に自分の「気持ち」をぶつ込むのか。  
幼児なのだからしようがない。

充足するときに鳴る音だ

「ヰ」—— といふのは、（ ） が

おれはいま、ナルシシズムについての話をしている。

そしてじつは、おれはナルシシズムについて話すのに、ものすごく遠回りな話し方をしている。

おれは本当は、十代のころに、このナルシシズムというものについて

幼児が魂を呼びこむなんてことはできない。

魂を呼びこむということができるのは、心理的成長を経てきて大人になつた者だけだ。

魂が呼び込まれるということ。

おれがこうして書き話している文面、その文体について……ふつうは、それじたいが読み取りの内容で、それじたいが読書体験の内容だと思われているだろう。

じつはそうではないのだ。

何度も言うように、おれが書き話して現しているこの文章という形・形式は、あくまで受け皿でしかない。

おれの気魄が、この文章という形式になり、それが受け皿になつて、その受け皿じたいはあなたに対してもしていない。

だからあなたは、この文章に対し、「レスしよう」というツイッター的発想を起こさない。

おれがあなたに、何かを「する」なら、あなたはそれに対して反応してしまうが、おれはあなたに何もしないので、あなたには反応するということじたいが起こらないのだ。

だから、流行という側面で考えれば、おれの書き話しは、バズるということがあるわけねえよ。

もちろん、バズるなどというのは、誰もが知つているとおりただの随時代的痙攣反応でしかないので、本当にはよろこべるものではないのだから、おれはそのようなことには与しなくていいのだ。

大江健三郎からの影響づけで文学を構築している奴が、「バズる」なんてことあるわけねえよ。

それで言うと、ニーチェとかサルトルとか、ドストエフスキイ、マルクスなどは、かつてバズつたのだった。

一方、トルストイはバズらないし、アダム・スミスもバズらない。

ウイリアムブレイクやタゴールなどもバズるわけがない。

太宰治や、三島由紀夫、芥川龍之介などは、バズつた。夏目漱石や、川端康成などもいちおうバズつただろう。

彼らはもともとインフルエンサーだつたからだ。

中野重治などは、インフルエンサーではなく、文学者なので、バズらない。

太宰治や、三島由紀夫、芥川龍之介などが、ナルシシストで「ない」などと言つたら、逆にファンの人たちからさえ怒られるだろう。

彼らは、ナルシシズムが持ち味で、その持ち味が共感を呼びやすかつたからこそバズつた。いまでも彼らのほうがファンが多い。

「恥の多い人生を送つて来ました」とか、「殺されるために走るのだ」とか、そんなことは、よほどのナルシシストでなければ発想するわけがなく、これは完全に、自分の気持ちにしか関心がない者の文脈だ。

そうしたものを、当時は私小説と呼んだようだが、その本質はただの暴露趣味のナルシシズム・トーキングにすぎない。

善し悪しは抜きにして、ナルシシズムというのは幼児性に発生しており、だからこそ、幼児性を脱却しない人から見て、言つていることがすごく

「わかる」ので、人気が出やすいのだ。

三島由紀夫の映像などを、いまでは Youtube で観ることができるが、発言といい振る舞いといい、わかりやすい上に巧妙に演出が効いていて、じつに現代ならインフルエンサーの筆頭という感じだ。

それに比べて、大江健三郎の、「何を言つているかさっぱりわからない」度合いときたら。

(三島由紀夫と大江健三郎は、十年差ぐらいで割と同世代のはずなのだ

が)

夜明けまえの暗闇に眼さめながら、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする。内臓を燃えあがらせて嘔下されるウイスキーの存在感のように、熱い「期待」の感覚が確実に躰の内奥に回復してきているのを、おちつかぬ気持で望んでいる手さぐりは、いつまでもむなしいままだ。

### 〔万延元年のフットボール〕

このように、冒頭から何を言つてているのかさっぱりわからない。

こんなものがバズるわけがない。

どんな「気持ち」をぶつ込んだとしても、そんなことでは、こんな文体がえんえん何百ページもつづくわけがない。いくつか、バズりようがないものを例示しておこう。

### 朝早く囁き声がした――

私たち 小舟で出かけよう あなたと私だけで。

そして世界中の 誰一人も知るまい。

めあての国もなく 終わりもない  
この私達の巡礼を。

あの岸辺のない 大洋で

あなたが 黙つて耳傾けて 微笑まれると、  
わたしの歌は 浪のよう 自由な

言葉の束縛から 全く自由な

美しい旋律に 盛り上がるでしよう。

その時は まだ来ないのか。

まだ しなければならない 仕事があるのか。

(以下略)

### 〔R. タゴール〕

曰く、森羅万象にとつて地はその精（ラサ）である。地にとつては水はその精である。水にとつて草木はその精である。草木にとつて人間はその精である。人間にとつて語はその精である。語にとつて讃歌はその精である。讃歌にとつて讃唱はその精である。讃唱にとつては高唱がすなわちその精である。

かくの如く、高唱なるものは精中の精なるもの、至高、至尊なる第八の精である。

(中略)

すべて、人が何事かを応諾する時には「応！（おう）」と答えるものである。そして、応諾は成功にほかならない。以上の如くに知つてこの一音を高唱として崇信するものは必ずや百般の願望を成就することができるのである。

### 〔ウパニシャッド〕

### 〔中野重治「蝶」〕

廻（かわや）のなかにはものうい秋の陽がたまつていて

女はどこにいるのか消息もなかつた

黒い一匹の蝶がいてうろうろして いたが

最後におれの下腹のあたりに取りついた

おれは手をあげてそれを払つたが

おれは腹が立つて悲しかつた

### 〔中野重治「蝶」〕

何を言つているのかわからないのだ。

どういう人の、どういう気持ちなのか、さっぱりわからない。

何がどう「キューン」と来るのか、さっぱりわからない。

それに比べて、「恥の多い人生を送つて来ました」なら、その気持ちは

わかるし、「キューン」も出来る。

「山路を登りながら、こう考えた」も、エモい。エモくて「キューン」が出来る。

有名な、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」も、エモくて「キューン」が出来る。

「雪国」の冒頭、「国境の」から「駅長さん」までの一連の文章は、エモいにもほどがあり、その描写は単純に上手すぎると、わたしでさえ正直、感嘆まじりに認めざるをえない。

それに比べて、

「ブレイクの自然に流露した発想の、グロテスクな奇態さと、それに矛盾せぬ懐かしさ。それを僕はしばしば感じとつてきた。しかも自分と息子との生活の細部と、ことのありようとして照しあうものはいくつもあるが、そのひとつは予言詩『ミルトン』の、すでに天上に昇った詩人ミルトンが、墜ちた世界としての地上にくだり、遍歴する苦行をつうじ妻と娘たちはじめ人間すべてへの救済を実現しようとする、大事業の出発点に見られる。」「大江健三郎 魂が星のように降つて足骨のところへ」これははどうエモいのか。

どう「キューン」とすればいいのか。

こんなものバズりようがない。

何を言つているのかわからないのだ。

人はわからないものを摂取できない。

これが中原中也なら、言つてることはまだわかる。

「汚れつちまつた悲しみに 今日も小雪の降りかかる 汚れつちまつた悲しみに 今日も風さへ吹きすぎる」

これはわかりやすいし、エモくて、キューンと出来る。

それに比べて、中野重治の「蠅」は何を言つてはいるのかわからないのだ。

じつは、ボブディランだって、あるいはサイモン&ガーファンクルだつて、詩文としては何を言つてはいるのかさっぱりわからないのだ。

（聞き取れないという意味ではなく、詩文じたいが意味不明だ）

それで言うと、むかしは桑田佳祐も、何を言つてはいるのかわからないと言わされたそうだ。

（誘い涙の日が落ちる、というような日本語は存在しない）

おれが何を言つてはいるかわかるだろうか。

それこそ、おれだって、けつぎよくは何を言つてはいるのかよくわからぬのだが。

おれが言つてはいるのは、エモくてキューンというのが、それじたいナルシシズムの産物だということだ。

そのことはちゃんと論理的に説明がつく。

（説明はあとでする）

大江健三郎の小説でキューンとなる人はいない。

あなたの彼氏が、真夜中に、落ち込んでいるあなたのことを心配して、二時間かけてあなたの家まで駆けつけてくれたら、あなたは彼氏の果てしない愛にキューンとするに違いないが、残念ながらそれは愛の産物ではなく、ナルシシズムの産物だ。

まさか、月9めいてわかりやすいものがマジで本当の愛だなんて思つたのか？

「キューン」は、ナルシシズムが充足するときに鳴る音なのだ。

多くの人は、それを「感動」と取り違えている。

サイモン&ガーファンクルの歌は、「スカボローフェア」などが特に有名だが、スカボローフェアの詩文が何を言つてはいるのかは、誰にもわからない。

だが、そういうことではなくて……

おれはさつきからずつと、何を言つてはいるかなど、「魂を呼びこむ」

という話をしている。

気魄が、詩文なら詩文という形・形式を為し、その形式が「受け皿」になつて、そこに魂が呼びこまれるのだということだ。

わかるとかわからないとかの話ではない。

受け皿、その「容器」を、分解して解析して解読するというのは——わかるとするとるのは——発想じたいが誤りだ。

受け皿、その「容器」は、魂を呼び込むためのものであつて、そのための用途に作られているのだ。

わかるために作られているのではない。

それを、本来の意味での「作品」と呼ぶ。

「魂を呼びこむ」という、観測不能の現象を担つてしまふ、その受け皿たる「品」を作る。

そのことを「作品」と呼ぶのだ。

だから、あなたをキューンとさせるものなんて、まるで本質として「作品」ではない。

あなたは、もう何十年も、そこを根底的に誤解したまま生きているのだ。

作品とは、魂を呼びこむものだ。その受け皿のことだ。

あなたをキューンとさせる作為物のことではない。

氣魄が、何かしらの形式の「受け皿」を形成し、そこに呼びこまれた魂が「遊ぶ」。

作品に魂が遊ぶのだ。

受け皿じたいは遊ばない。

たとえば、プールで遊んでいるのはプールではなく「水」だ。

プールはあくまで「水」の容器だ。

楽しい水、うつくしくてやさしい水を導き入れるには、きれいで、しつかりした、また楽しくなるように造形・デザインされたプールが必要

だろう。

そこでプールの仕事は「水が漏れないこと」だ。

プールという容器じたいは「何もしない」。

ナルシシストは、ここを誤解していて、自分の水を楽しくぶっかけるのがプール遊びだと思っている。

あなたの水をいきなりぶっかけたら、ただの迷惑行為になるだけだ。

おれの水をぶっかけても、誰も迷惑がらず、人がむしろよろこぶのは、おれがプールという容器を形成し、そこに遊ぶ魂を招き入れているからだ。

プールに呼びこまれているから水かけが遊びになるのであって、あなたの水をぶっかけたらそこがあなたのプールになつてくれるというわけではない。

プラスチックの風呂桶で、あなたに水をぶっかけようか。

そしたらあなたの視界は螢光イエロー、お菓子屋のプリンはカラメルが苦くて甘い。

宇宙ロケットは銀河を夢見て、プールの上空をぐーるぐーるだ。

何を言つていてるかわからない。

けれども、おれはそもそも、何を言つていてるかをわからせるために構文を組んでいない。

魂を呼びこむために構文を組んでいる。

あなたは引き続き、キューンを探しているかもしれない。

ナルシシストには、キューン以外の感動がわからないから。

「キューン」というのは、ナルシシズムが充足するときに鳴る音だ。

そして、逆にナルシシズムが蚕食されていくときは、キューンとは逆の「イライラ」が起こる。

たいていは、きついため息というサウンド付きだ。

ここにはあきらかに、ふたつの異なる営為が存在している。

「魂を呼びこむ」という當為と、「キューン↑イライラ」という反復當為が存在している。

そしてあなたは何十年も、前者の當為を知らないまま生きてきている。前者の當為の当事者たるを、まったく引き受けないまま生きていている。

^^魂を呼び込むということを、まったく受けて立たない、幼児のまま生きてきているVV。

あなたには何が「出来ない」のか、何が出来なくて苦しんでいるのか。簡単なことだ。

おれがあなたに、

「これのつづき、あなたが書いておいて」

と頼んだとしても、あなたはまったくそれが引き受けられないということだ。

おれがここまで、濃厚に魂を呼びこみつづけているのに、あなたはそれを引き継ぐことさえできないということ。

おれはここまで、文面・文体を受け皿にして、文学の魂を、書き手と読み手ともどものものとして呼びこみつづけて来ているが、あなたがこれを引き受けると、あなたは幼児のように、その受け皿を持ち上げてひっくり返し、ナルシシズムのまま、

「魂が失われました。なんかもう無理です」

とイライラして言い出し、さらには呪いを吐き始めるのだ。

キューン↑イライラだけを何十年もつづけてきたのだろう。

おれはそれについて悪口を言っているのではないし、責めているのでもない。

根底にあるどうしようもなさを解明して整理しているだけだ。それで、どうしたらいいと言つて、どうするもこうするも、成長するしかない。

心理学者の加藤諦三先生いわく、ナルシシズムを脱却するには、心理的に「成長する」しかないのだ。

どうやって解決するか、という話ではない。

六歳児は七歳児になるべきだということ。

その積み重ねで大人になっていくしかないのだから。

魂を呼びこむということは、大人にしか出来ないことだ。それに苦しみつづけるというのは、最終的に筋違いだ。

ナルシシストは、ずっとずっと「（ ）」を重ねてきている

ナルシシズムとはけつきよく何なのか。

ずばり、教えよう。

あなたは、自分の気持ちで、「人が言うことをきいてほしい」のだ。説明はまだまだ続くのでご心配なく。

人が、言うことをきいてくれるということ。

ああしてほしい、こうしてほしい、わかつてほしい、というようなことを、つまりは、ウンウンといって、肯定して、きいてくれるということ、わかつてくれるということ。

この、「言うことをきいてくれる」という表現は、慣用的にたしかに存在しているが、用法があやふやだ。よく言われるのは、母親が自分の子について、

「最近、ウチの子がもう、言うことをきかなくなつてねえ。反抗期から、本当に困るわ」

というようなことだ。

慣用的に、そうして「言うことを聞く／きかない」という言い方がされる。

ナルシシズムというのは、けつときよくのところ、自分の気持ちから、「言うことをきいてほしい」に尽きる。

ここで、「けつときよくのところ」と、促音便を並べたい気分にさせられる。

本当に、色とりどり、表面的にはバリエーションと、糺余曲折が展開されるのだけれど、けつときよくのところは、自分の気持ちから、人に言うことをきいてほしい、ということに尽きる。

そして、自分の気持ちから、人が言うことを聞いてくれるということが、ナルシシズムにおいては「美」なのだ。

ナルシシズムにおいては、それが美であり、やさしさであり、感動であり、胸がキューンとなる。

それだけが救済となる。

このことは恐ろしいことなのだ。

人が、自分の言うことを聞いてくれるということは、つまるところどういうことなのか。

しかも、それが自分の「気持ち」からというのは?

それは、支配とコントロール、ということを意味している。

人が言うことをきくというのは、支配でありコントロールだ。

それも、自分の「気持ち」がそれを為すということ。自分の気持ちが、他者を支配し、コントロールする。

そのことに、キューンという快感が起ころる。

そのことは、ナルシシストにとって、美であり、やさしさであり、感

動であり、救済であり、真実だ。

＾＾ナルシシズムは徹頭徹尾、支配とコントロールの欲求に端を発し、もともとから、支配とコントロールの欲求に行き着いているvv。

それは、最終的にあきらかになるところ、まるで怪物めいた欲求なのだ。

六歳児のまま加齢していくというのはそういうことだ。

まず、あなたにとり憑（つ）く正義のようなものは、そのほとんどがウソだと思え。

自分自身、そのウソにとり憑かれるのだ。

上司が口を酸っぱくして、部下に何ごとかを説教をし、部下にあしら・こうしろと指導をしている。

この上司は、仕事をしているのではないし、業務を執り行っているのでもない。

すばり断じて、「人が言うことを聞くと気持ちいい」のだ。

仕事をしているのではないし、部下に何か正しいことをさせようとしているのでもない。

言うことをきかせたい、だけだ。

人が言うことをきくと、キューンと、気持ちよくなる。

「わかつてくれたか」

という感じで、キューンとなる。

交際している彼女が、高額のアクセサリーをねだつてくるのと同じだ。

彼女は高額のアクセサリーがそこまで欲しいわけではない。

そこまで欲しいなら自分で稼いで購入するだろう。

そうではなく、人が言うことをきくと、快感で、キューンとなるのだ。

彼氏が言うことをきいた。

わたしの気持ちから、言うことをきいてくれた。

十八万円もするアクセサリーを買ってくれた。

言うことをきいてくれた。

そのことに、キューンとなる快感がある。

先日も、わたしがさびしいつて拗（す）ねたら、夜中なのに、二時間も

かけてなぐさめに来ててくれた。

わたしの気持ちから、言うことをきいてくれた。

本当に胸がキューンとなつた。

そのことが、ナルシシストにとつては、美であり、やさしさであり、救

濟であり、真実なのだ。

おれはこのことを責めているのではない。

ナルシシズムというものが、仕組み上、必ずこうした支配とコントロ

ールという結末へ行き着くということを、ひたすらレポートしているに

すぎない。

ナルシシストだつて、毎日部下に説教するわけではないし、いきなり十八万円のアクセサリーをねだるわけではない。

そうではなく、ナルシシストは前もつて、ずいぶんな「我慢」をしているのだ。

「我慢」の蓄積が先にあつて、それがついに爆発する、という手続きになる。

ここはじつにポイントだ。

ナルシシストは、ずっとと「我慢」を重ねてきている。

その「我慢」の果てに、耐えきれなくなつて、ついに言い出すのだ。

ああしろ、こうしろ。  
ああしてほしい、こうしてほしい。

そうでないともう無理だよ。

わたしはね、これまでずーっと我慢してきました。

どれだけ我慢してきたかわかる？

でも、いよいよ限界。

だから、ああして、こうしててくれる？ わかつてくれるよね。

必ずこういう文脈になる。

そしてこの文脈は、ナルシシスト當人にとつて、本当にそのとき燃え立つほどの真実なのだ。

ここであなたに、決定的な扉を開く、決定的な鍵を手渡しておきたい。

いわく、

へへあなたは、人が言うことをきかないということを、わずかも納得はしないないvv

どういうことだ。

どういうことか。

たとえば、おれがナルシシストだたとしよう。

アハハハハハ（なぞの笑い声。これは気にしなくていい）

あなたがスーパー・マーケットで、ティーバッグの紅茶を買っていたと

する。  
あなたが手に取つたそれは、置いてある中で最安のものだつた。

おれはふと思い、こう言う。

「紅茶って、あんまり安いやつだと、味も香りも薄すぎて、飲まなくなつて逆にもつたいなってこともあるよ」

それについてあなたは、フーンと言い、

「フーン、でもまあ、いいよ。わたし紅茶って、色ついてりやそりでいいつてタイプだし」

と、あなたは手に取つたその最安のものを、そのまま買うこととした。

このとき、おれがナルシシストだとどうなるか。

おれはあなたを、内心で鼻で笑い、

「すなおじやない奴」  
と貶（けな）す。

ん？

奇妙なことだ、これは何の話か。

ナルシシストの文脈はこういうものだ。

当人に自覚はなくとも、このときナルシシストのおれから見ると、あなたはおれの「言うことをきかない奴」なのだ。

もちろん冷静に、客観的に考えるなら、どんな紅茶を買おうが、それは購入する当人の勝手でしかなく、そこにおれの「言うことをきく」というような文脈は、そもそもから発生しえない。

あまり安物だと、飲まなくなつて逆にもつたいたいということじたいは、たしかにあるのかもしれない。

あるのかもしれないが、それにも、当人がその安物でいいやといふなら、その安物を買うだけのことのはずだ。

しかし、ナルシシストは、永遠にこのことに納得しない。

「せつかくおれが言つてやつてんのにさ」

もちろん口に出していちいちそのように噛みつくわけではない。

内心でずっとそう思いつづけているというだけだ。

人が、自分の言うことをきかないということに、永遠に納得がいかないのだ。

ナルシシストのおれは、あなたがおれの言うことを聞き、ちょっとだけ値段のする紅茶を買うということを、自然で正当なことと信じている。あなたがそうして「言うことをきいた」とき、おれの中にはキューンという快感が走る。

ナルシシストのおれは、ずっと、そういう快感の中だけを生きていくべきだし、そういう中を生きていく、自然で当然の権利があると思っている。他人が、おれの言うことをきくのが当たり前で、おれの言うことをきかないということには、永遠の不當さがあり、決して納得することはないのだ。

まあ、許してやらなくはないけど。

本当にそんなことを思つていて。

ちよつと値段のする紅茶のほうが、結果的に良いかもしれないよ、というのが、このときおれがあなたに向けた「気持ち」だつた。

あなたは、おれの差出口に一定の理解を示したが、けつきよくのところおれの言うことはきかず、あなたは最安の紅茶を買つた。

このとき、おれの中では、小さくはない「我慢ポイント」がグッと加算される。

「まあまあ、いいじやん。こいつが買いたい紅茶を買えばいいさ。ま、すなおじやないとは思うけどね」

そのように考えて、おれは「我慢」するのだ。

しようがない、我慢、我慢。

我慢？

お前がいつたいたい何の忍耐・辛抱をしたというのだ。

わけがわからぬけれど、これがナルシシストの内部文脈なのだ。

そして、これが六歳児のままの内部文脈で、じつさいのところ、これが世の中の大人の、多くの場合での内部文脈だ。

おれはこのとき、何に対しても「我慢」をしているか。

おれはこのとき、へへあなたがおれの支配とコントロールを拒絶した

VVVということに、我慢をしているのだ。

あなたはおれの支配とコントロールを受け入れず、それに反発した。

その許しがたいことを……それでも「しようがないから許してやろう」とする、いわゆる寛容さのこころにおいて、おれは我慢をした。

ただ、それでも、おれにも我慢の限度というものがある。

我慢というのは蓄積していくポイント制だから。

もつといろいろ言つてやることにしよう。

「その服装には、こないだのカバンのほうが合つていると思う。その力

「パンはぜんぜん色が合っていないでしょ」

「そのおにぎり、ゆかりを入れすぎでしょ。入るのはほどほどにしておかないと」

「ここで待ち合わせるからといって、そんな植え込みに座つてなくていいじゃん？ もつとあつちのベンチとかに座ついたらよかつたのに」

「どう考えてもさ、その洗い物の場合、先に鍋を洗つたほうが早く片付くよね？」

「それを食べるなら箸よりフォークのほうがいいでしょ。箸で食べるのは、何、なにか独特のこだわりがあるの」

「あなたみたいなタイプは、今の仕事より、こういう仕事とかに就いたほうがいいと思う」

「なんか太ってきた？ 年齢的に、そろそろ野菜を多めに食べたほうがいいよ」

「P.C使うとき、あなたのそれ、モニタと目が近すぎない？」

「どういう暮らしをしてきたか、見つめ直して、もつと丁寧な暮らしを目指したらいいと思う」

「同じマンガを読むにしても、もつとこういうマンガを読んだほうが、人と話が合うようになると思うよ」

「電話に出るとき、なんか口調に独特のクセがあるよね。気にしたほうがあなたのためかも」

「その眉毛なんだけど、眉毛の整え方について、美容師さんに、もうちょっとと注文出したほうがいいと思う」

「買い物袋をそういうところに置くの、悪いクセだよね。自分で気づいていないんだろうと思うけど」

「おれの、思ったことを、ぜんぶ言つてやろう。おれの、思ったこと、思ったこと、思ったこと、ぜんぶ、ぜんぶ、ぜんぶ、言つてやろう。

言つてやろう。  
言つてやろう。

言つてやろう。

おれの気持ちだ。  
あなたはおれの言つたことをきいてくれるよね。

それとも、あなたはいちいちのことに口出しされて、そのことにいきかげんうんざりし、「もうやめてください」と言うだろうか。

あなたがそんなことを言うなら、おれはとてつもない激怒を現わすだろう。

「おれだつて、言いたくて言つてんちやうわ！！！」

「おれが、どれだけ言つても、お前が言うことをきかんから、こつちはずっと我慢してやつてるんだろうが！！！」

なんだこの激怒は。

どういう仕組みで激怒しているのか。  
あなたの側としては、本当に意味がわからないだろう。

けれども、これがナルシシストの文脈なのだ。  
おれは何に激怒しているか。

あなたがおれの支配とコントロールを受け入れないことに激怒しているのだ。

せつかく「言つてやつている」のに、あなたは支配とコントロールを受け入れない。

それについてあなたは、おれの支配とコントロールを受け入れなくていい無意味だ。

それについてあなたは、おれの支配とコントロールを受け入れなくてはならないなんて、そんな義理も道理もない、と言うだろうか。

あなたがそんなことを言うなら、おれだつていよいよ我慢の限界だ。

おれは巨大なため息をつき、

「だからあ、そうじやなくつて……。ハー。あー、しんど。もういいわ。もう何か、何もかも無理だわ。本当にわかつてもらえないのね。ハー。もうわかつた。もう、いいです。なんかもう、おれが今まで生きてきたこの意味が、ぜんぶ無いなーって、逆に確信したわ」

おれは、空気を最悪なものにして、あなたを窒息させ、その圧力をもつてあなたに罪の改悛を求めるだろう。

おれは、あなたが、

「ごめんなさい、わたしが間違つていたわ」

と謝つてくれるのを期待している。

そのときはまだ、希望のやさしい光が差すだろう。

あなたがすなおに謝つてくれる、ただそれだけでいい。

おれがどれだけ我慢していたのか、わかつてくれて、謝つてくれたらそれだけでいい。

それ以外のことはおれは決して受け入れない。

このとき、ナルシシストのおれは、あなたに「わかつてほしい」のだ。

あなたがわかつてくれるなら、まだぎりぎり、おれはあなたのことを許せる、と感じている。

おれは何をわかつてほしいのだろう？

それは、いわゞもがな、おれの「気持ち」だ。

おれの気持ちをわかつてほしい。

おれがどれだけ我慢を重ねてきたかも含めて、おれの気持ちをわかつてほしい。

そして、おれの気持ちから、言うことをきいてほしい。

おれの気持ちから、支配を受け、コントロールを受けてほしい。

あなたがそれ以外のことを言うなら、おれはたぶん、あなたのことをけつきよく永遠に許せない。

なぜなら、おれの気持ちから、あなたが支配とコントロールを受け入れるということ、そのことだけが、美であり、やさしさであり、救済であつて、真実なのだから。

あなたが、おれの気持ちをわかつてくれて、おれの気持ちから、支配とコントロールを受け入れてくれるなら、おれもあなたに、もつとやさしくしていくことができると思う。

ここまでずつと、あきらめずに言いつづけてきたのは、いつかあなたが「わかつてくれる」と信じたからだ。

もしあなたが、ここまで来てなお、おれの気持ちと、それによる支配を受け入れないと言つたら？

そのときは、おれはドス黒い激怒と憎悪をさらに強めて、あなたに、「最悪」

と言いつけて、罵るだろう。

「人として、最低。よくそんな最低なこと言えるね。聞いているだけでマジで吐きそう」

ナルシシズムは、このように激烈だ。

そしてこれは、ナルシシストのなれの果てということではない。

これが抜きんでてスーパーナルシシズムというわけでもなく、これがナルシシズムとして標準的なものだ。

ナルシシズムというのはもともとがそういうものなのだ。

自分の気持ちが、他人を支配し、コントロールする。

そのことだけがうつくしく、そのことだけがやさしさで、そのことだけが救済で、そのことだけが真実だ。

こころのつながり。

こころを大切にすること。

こころを信じられる人のこと。

すべてはあなたが、言うことをきいてくれたらそれで済むのだ。

なぜそのことに、あなたはそんなにまでして抵抗するの？

おれには本当にわからない。

あなたが言うことを聞いていたら、キューンと、おれの胸は熱くなり、すべては解決して、すべてはやさしさに包まれて、すべては笑顔の光景になるのに。

それだけで済むのに、どうしてあなたはそうしないの。

それはあなたが救いがたい邪悪だからなんだろうね。

ナルシシストのおれは、そのとき本当にそのように強く確信している。自分のほうがどこかおかしいのではないかとは、そのときわずかも思わない。

魂を呼びこむというようなことと、ナルシシズムが、いかにかけ離れているか。

ナルシシストのおれという仮定を、もう取り外すとして、おれは己の気魄を、何かしらの形式に現成させ、それを受け皿にする。

その受け皿に魂を呼びこむ。

呼び込まれた魂が遊ぶ。

魂が遊ぶのであって、おれの気魄は、あなたに対して「何もしない」。

「何もしない」のまったく逆だ。

ナルシシストの気魄はまつたく遊ぶ。

ロールしようとする。

ナルシシストにとってはそれだけが美だ。そのことだけが、その人を

キューンと気持ちよく感動させ、救済する。それはもちろんニセの救済であって、ナルシシストの眼球が最後まで明るかつた試しはない。

## ナルシシズムは（ ）にはあまり露出しない

ナルシシズムという致命的な様相は、平常時にはあまり露出してこない。

いや、本当は、常に露出はしているのだが、われわれはそのことへの視力を持っていないのだ。

じつさいには、ナルシシズムの致命的な様相は、平常時でない「ちょっとしたとき」に露出してくる。

それ以上の、決定的なときには、やはり決定的なものとして露出してくる。

当人が自分のことをナルシシストだと知っているわけではない。

当人はあくまで「ふつう」にしているつもりだ。

当人はあくまで「ふつう」、あるいは、それ以上に善意的であったり、それ以上に意欲的であったりしているつもりだ。

その様相が、まさかナルシシズムと呼ばれるなどとは、当人はまったく予想していない。

それでいて、それがナルシシズムだと指摘されると、なんとなく、遠巻きに、うつすらと、こころのどこかで、思い当たるふしがないではないのだ。

そのあたりの「掴みづらさ」も、このナルシシズムという現象の特徴だと言える。

幸いというべきか、気休めになることとしては、そうしたナルシシズムの人というのは、世の中にまったくめずらしくはなく、何であればいつもナルシシストのほうが標準に近いとさえ言えるかもしれないということだ。

ナルシシストというのは標準的な存在だ。

あくまで一般平均と比較すればという話だが、その比較の中ではナルシシストは、全体に対して特別に出遅れたという存在ではない。

ありていにいうと、そのあたりは、多くの人にとって「五十歩百歩」というところがある。

一方で、そうした人たちがいつそ標準的というほどに数多いということは、それじたが、われわれの空間にずっと垂れこめている暗雲の正体なのかもしれない。

まあ、そのあたりは、他人をあてこすっているかぎりは決して救われないだろう。

自分の問題として向き合える人にだけ、なんとかなる可能性が残されている。

ナルシシズムは、平常時にはあまり露出しない。

たとえば、いつものように無言で出社し、多くの日常業務を進め、帰り道にカフェに寄つたり、ジムに寄つて汗を流したりして、それぞれ帰宅したらテレビ番組や動画サイトを観て過ごしているというような中で、ナルシシズムはあまり露出しない。

あるいは学生が、いつものように制服で通学し、いつものように級友と、マンガの話やアイドルの話、化粧の話などをし、放課後には部活動の強化メニューをこなすなどして、あとは帰宅して食事を採つて寝るというように暮らしている中で、やはりナルシシズムは露出しない。

ナルシシズムが露出するのは、「ちょっとしたとき」だ。

ちょっととしたとき、つまり、少々であれ、魂の當為に直面したときに、そのナルシシズムは出現する。

最も小さなこととしては、たとえば誰かが気の利いたジョークでも発したときだろう。

そのジョークは、内容としてもタイミングとしても冴えたもので、単

なる「ネタ」とは言えない、あざやかさのあるものだった。

われわれは一瞬、そこに安易な「才能」の存在をうかがつてしまう。しかし、本当にそこに佳いものが現れるとき、それは才能がどうこうということで現れているのではない。

魂が呼び込まれているのだ。

ある男子生徒が、ひとりの女子生徒に、ちょっとやさしく寄り添う拳動をした。

そのときに、何か空間が歪むような、「ちょっとした」、日常とは違う光景が現れた。

魂が呼び込まれている。

そこに、ごくわずかな断片だが、やさしい男性と、幸福な女性、というような光景がちらつく。

誰かの気魄が、何かの受け皿になり、それが場所になつて、魂が呼び込まれる。そこに魂が遊ぶ。

そこで、心理的な成長を経てきていない人は、そうした魂の現象には呼応できないので、パニックになる。

「なんか、眠くなってきたわ」

昼の日中に、なぜかとつぜんそんなことを言い出す。

「暑う。きょう、なんか異様に暑いっすね。暑、というか、蒸し蒸しする」

なぜかとつぜん、毒氣のある言い方で気候を罵る。

「はあ。なんか、きょうはぜんぜん、やる気がしません笑。きょうって何か、そんな感じしません?」

と、周囲のすべてをネガティブなものへ引きずり込もうとする。

文化祭の演し物で、ありふれた演劇をやることになった。

すると、クラスメートの中でいわゆる「一軍」と呼ばれるような人たちが、「超ウケるんだけど」と大声で言いながら、それでも演劇の組み立

てにはしゃぎ、盛り上がっている。

その中で、一軍ではないひとりの女子生徒が、端役ではあるけれど、ありふれたセリフを言うと、そのセリフの声でなぜか空気が変わる。ありふれた、それほど意気込んでいいない演劇、一軍の人たちがただ「はしゃぐ」ための材料でしかなかつたお遊びの演劇に、「そうではないもの」が混入する。

「一軍」の人たちが、やはりパニック様の挙動を起こし始める。

そういう「ちょっとしたとき」に、ナルシシズムは露出する。

たとえば、「就職面接ぐらい余裕っしょ」とうそぶいていた人が、次々に一次面接で落選したとき。

「大丈夫かよ」と茶化されていた新人が、プレゼンの本番では堂々たるファシリテートを示し、同僚たちをどよめかせつつ、臨席していたグローバルマネージャーから直接認められたとき。

子供たちが、親たちの言うことをきかず騒いでいたところ、子育て経験のない青年が「静かにしなさい」と穏やかに言うと、なぜか子供たちがその青年の言うことだけはすなおにきいたとき。

夜、おしゃれなカフェに入ったとき、小ぎれいな店員さんと、自分は話がかみ合わなかつたのに、自分の連れてきた友人のほうは、華やかに話が弾んだとき。

そんなことはいくらでもある。

どれもすべて、ささやかではあれ、魂が呼び込まれるということが起こつたときのことだ。

ふつうのマーケットでパンと卵を買い、彼がサンドイッチを作ると、なぜかそれがやけにおいしかつた。

名前もよくわからない打楽器を、みんなでたわむれに叩いてみたが、

なぜかあの人があの人が叩いたときだけ、ふしぎな感じがした。

誰かから電話が掛かってきたらしく、友人がその電話に出たが、そのとき力強く「おう！」と言つて、その一声がすごく打ち解けてきずなを感じさせた。

一緒に着物の着付けを習い始めたが、なぜか友人は、和室でたたずまいがうつくしくなり、ハツとさせられるようになつた。

バーでギター演奏をしていると、話には聞いていたが、じつさいにそのバーに行くと、彼は信じられないほどみんなに慕われていて、強い拍手を受けていた。

「このごろどうしているの」と、いつもどおり酒の肴に訊くと、彼女が話すところ、彼女が最近任されている仕事は、自分ではおよびもつかないほど大きなものになつていた。

現場を仕切つているとは聞かされていたが、いざその現場に行つてみると、彼はとんでもなく大きな声を豊かに出せるようになつていて、その監督ぶりには、まるきり気圧された。

「先日教えたやつ、ちゃんと把握しているか」と言われ、自分は「ぜんぜんです」と、テヘヘという調子で応えたのに、同僚はしつつ、ほぼ完璧に把握しているところを披露し、先輩に力強く「やるじやないか」と言われた。

魂を呼び込める者と、呼び込めない者の差。

魂を呼びめるようになりつつある者と、そのようにはなつていかない者の差。

そのような差が浮き彫りに出てくるとき、ナルシシズムが露出していく。

単純に言つて、「じつはすごい人だったのかも」ということ。

単純に言つて、「じつはすごい人になりつつある」ということ。

そのことに、ナルシシストは対抗できない。

同僚は、Aのプロジェクトを任せられることになった。

上司とやりとりをして、その受け答えから同僚は、そのプロジェクトの肝をじゅうぶんに把握しているようだつた。

次いではあなたは、Bのプロジェクトを任せられることになった。

Bのプロジェクトは、Aのプロジェクトほどもつかしくはない。

それで上司はあなたに、

「Bのプロジェクトの肝は、わかっているな？」

と確認する。

あなたは、

「……えつと、はい。たぶん、わかっている、はず、です。はい。あの、

わかつている、と、思います」

と言う。

上司は訝（いぶか）り、

「お前なりに捉えているところの、概要を言つてみて」と促す。

「……えつ？」

同僚は少しずつ、すごい人になりつつある。

あなたは、その同僚に比べて、じつは根本的に「よくわからない」ままでそこに生きている。

本部長が定年で勇退することになり、送別会が催されることになった。

同僚が送辞を述べるはずだったのだが、急病になり、同僚は送別会に行けなくなつた。

代理で、あなたが送辞をすることになった。

どんなことを言えばいいか、よくわからなかつたが、ネット検索もできることだし、あなたは無難にありふれたことを言えばいいだろうと思つていた。あなたは学生時代にもそうした飲み会に慣れている。

ところが、あなたは「飲み会」の調子で送辞を述べるのだと想像して

いたところ、そうではなく、到着してみると会場はずいぶん立派なところで、雰囲気はいささか厳肅だつた。

現場についてから、きゅうに方針転換できるわけもなく、あなたは居酒屋ふうの半笑いで、本部長への送辞を述べた。

その調子は、もちろん一同にこころよく受け取られるわけがなく、一同はむしろギョツとしたようで、ムードはしばらくドッヂラケになつた。

このようなとき、人はどのように落ち込むだろうか。

じつは、ナルシシズムのメカニズムにおいて、このようなとき、人は「落ち込む」のではないのだ。

テレビドラマのようには、じつさいの人の心理は挙動しない。あなたは、とにかく誰に向けてでもいいから、

「つていうか、そんなの、何の準備もなしにやらされても、無理に決まつているでしょ！？」

と、怒りとため息を撒き散らすのだ。

「はいはい、ま、どーせ、わたしが悪いんですけど落ち込むということはじつさいにはない。

そのことはまた後の章で述べられるだろう。

差し当たりここで知られるのは、ナルシシズムは、平常時にはあまり露出しないということ。

ナルシシズムは、「ちょっととしたとき」に現れる。

小さなものであれ、魂の営為にさらされるとき。

魂を、それなりにでも呼び込めるかという、大人としての当然のていどが問われるとき。

そのようなときにナルシシズムは露出する。

あなたにとつて、ちょっとしたことでも「やつていいこう」とすることは、額面通りに易しいことではない。

あなたの苦悩はすべて、魂を呼びこむという、大人のすることが出来

ないということに尽きるのだった。

大人ならそれなりに出来ることのはずなのに、じつさいには、自分はそこに幼児ぶりをさらけ出すというみじめなことしかできない。

そこには、多大な——猛烈というほどの!——痛苦と抵抗が伴う。だからあなたにとつて、ちょっとしたことを「やっていこう」というのは、じつさいにはとてもない壁になるのだった。

「ボクもあれ食べる」と言い出しきかない、ということが起こる。

母親は、「もうすぐ電車の時間だから、ソフトクリームはまた今度ね」と言う。

## 道理が（ ）わかつていな

ナルシシズムは病気ではない。

ナルシシズムで病気になることはあるが、ナルシシズムじたいは病気ではない。

ナルシシズムは、ただの未発達だ。

誰でも幼児のころはナルシシズムの中を生きている。

われわれは、0歳で生まれ落ちて、乳児のころ、まだ自我というような自我を持つていない。

まだ、言語化されていないふたつの感情、「快・不快」と、「落ち着いている・興奮する」という感情しか持つていない。

それが、幼児になりはじめると、どこからともなく、自我というものが発生してくる。

乳児のころは、たとえば、おでこに冷水をかけられても、それについて「やめてよ」と言うことができないのだ。何をされても、不平不満を持てない。

不快をいやがる、ということしかできない。

まだ、自我がなくて、自分や他人が存在するということもわかつていいから、何をされても、何もわからないのだ。

それが幼児になつてくると、「やめてよ」と言えるようになつてくる。自分と似たような子供が、ソフトクリームをおいしそうに食べているのに、自分はソフトクリームを食べていないと、いうとき、

「ボクもあれ食べる」と言い出しきかない、ということが起こる。

母親は、「もうすぐ電車の時間だから、ソフトクリームはまた今度ね」と言う。

幼児は、母親の言っていることが、なんとなくわかるが、よくわからぬ。

なんとなく、ダメと言われているのはわかるが、けつときよく、なぜダメなのか本当にわからぬ。

むくむく……

幼児の中でナルシシズムの温度が上がつてくる。

ナルシシズムは、「自分の気持ちで他者が動いてくれる」ということ、そこにキューンとくる快感に本質がある。

そのために、他者に侵略し、支配・コントロールをしようとする。だから幼児は、

「食べるー!」  
と駄々をこねる。

母親は、「また今度ね」と言う。

このとき、幼児の体内には、猛烈な不満と怒りが起こる。

何に対する怒りか。

母親が自分の支配を拒絶したことへの怒りだ。

母親が自分の支配を受け入れるなら、快感だが、その逆は、不快だ。

猛烈に不快だ。

それで怒りが湧く。

幼児は泣き叫ぶ。

幼児なりに、すべての「力」を持って、母親を侵略し、支配・コントロールしようとする。

これがナルシシズムだ。

幼児のころは、誰でもが、少なくともこういう成分を持つているはずだ。ていどの差はあるのかもしれないが、誰も幼児のころの記憶をまともには残していないので、わからないう。

幼児は、ソフトクリームの要求について、「ダメ」と言われていることはわかっている。

そしてなぜ「ダメ」なのか、その理由も、うつすらとはわかっている。そういう理性的な判断が、幼児にあるのだ。

さすがに、幼児だって、ソフトクリーム屋にナパーム弾が撃ち込まれ、激しい炎と黒煙に包まれていたら、「ソフトクリームは無理だな」と思うし、「それどころじゃないな」と思う。

幼児のナルシシズムは、「まだ何もわかつていのコドモだから」ではないのだ。

まだ何もわかつていの状態は、乳児のことであって、幼児のことではない。

ダメなのはわかつている。

が、むくむくと、ナルシシズムが立ち上がりてくるのだ。

他人が言うことをきいたらキューンと快感で、他人が言うことをきか

ないと不快だ。

自分の気持ちがある。

自分の気持ちが、他者を支配するなら、キューンとうつくしい感動だけれど、もし他者が支配を拒絶するなら、そこに湧くのは怒りと憎悪だ。

その、快感と不快感、感動と憎悪、そのパラメーターが、道理をもみ消してしまう。

もうすぐ電車の時間だからいまソフトクリームを食べるのはダメとう、道理が、幼児にまったくわからないということではなく、それをもみ消してしまうナルシシズムがあるのだ。

この幼児が、加齢してゆき、やがて三十歳になる。

三十歳になった彼は、知人女性に、

「ね、今夜さあ、一緒に食事しに行こうよ」と言う。

誘われた女性のほうは、

「うーん、それはちょっと。ごめんなさい」「えっ、なんで。いいじやん、いこうよ」「ごめんなさい、またいつか」

「え、なんでなんで？ なんでダメなの」「なんでもって言われても……」

「ねつ、お願い！ いいじやん、行こうよ。お願（ねが）い」「ちょっとそういうのは。すいません、ごめんなさい」

「えー、なんか、ノリ悪いね」

三十歳になった彼は、すでに道理を把握する能力を持っている。食事に誘われたとき、誘いに乗るかどうかは、あくまで本人の気持ち次第だ。

その気があれば付き合うだろうし、その気がなければ付き合わない。それが当たり前すぎる道理だ。

彼自身、誰かに誘われたとき、その気になれば付き合うけれど、その気にならないなら付き合わないのだから。  
こんな道理がわからない人はいない。

誘つても、向こうがその気にならなかつたら、それはしようがないでしょということ。  
そりやそりや。  
しようがない、しようがない。  
やれやれ、あつはつは。

むくむく……

道理をもみ消すナルシシズムが立ち上がつてくる。  
彼は、幼児のままなのだ。

心理的成長を得てきていない。

彼は、道理というものを、本当にわかっていない。  
彼は、

「おれの気持ちはどうなるのよ」と不満に思つてゐる。

自分の気持ちで他人が動けばキューンと感動だ。うつくしく、やさしい。  
かがやく世界を信じることができる。

彼は自分の気持ちで他者を侵略するのが「当たり前」になつてゐる。

幼児のまま生きてきているから。

自分の気持ちで他者を侵略し、他者が支配とコントロールを受け入れたら、キューンと快感が起る。彼はそれに感動する。

そこでもし、支配とコントロールを拒絶されたら。

たまらなく不快だ。

怒りと憎悪が湧く。

「えー、なんか、ノリ悪いね」

彼は、相手が自分の支配とコントロールを拒絶したことが、猛烈に不快なのだ。

そのことについて、怒りと憎悪が湧く。

彼は、その怒りと憎悪を、正直なところ正義の感情と思つてゐる。

彼は、自分のことを幼児だとは思つていないし、ナルシシストだなんてわざかも思つていない。

彼は自分のことを、総じて「ふつう」と確信してゐる。

「そりや、向こうが無理つて言つてんだからしようがないもんね。しようがない、しようがない。おれがへへ我慢vvするよ」

三十歳の彼は、別の女性と交際することにした。その交際相手も三十四歳だ。

ふたりはディズニーランドにデートを行つた。

彼女は、ひさしぶりのディズニーランドを大いに楽しんだようだつた。  
帰路についてから彼女は、

「すごく楽しかった！」

と言う。

彼は、少々出費がかさんだけれど、これだけ楽しんでくれたらならまあいいか、と思つた。  
彼女は重ねて言つた。

「ね、すごく楽しかったから、来月も行こ？」  
「え？」

「ディズニーって、やっぱり夢の国だと思う。わたしやっぱり、すつごい好き！」

「そうなの」

「ね、来月も連れてってくれるよね？」

「えーっと」

「ね？」

彼は答えあぐねる。

「来月もつていうか、わたしたち、月に一度はディズニーに行く、そういうふたりにしない？」

と言つた。

彼は、さすがに憮然として、

「それはさすがに無理。キツすぎる、というか、引くわ」

と言つた。

彼は、たまに行くディズニーランドは楽しいけれど、そこまで彼女のようによく楽しめるわけではないし、なんだかんだ出費がかさむ。

時間的にも金銭的にも、自分のやりたいことがまったくやれなくなってしまう。

彼の言つたことは、ごくふつうのことと、そういうことであれば、彼にまさか月一のディズニーランドを強いることはできない。それは当たり前の道理だ。

が。

「むくむく……」

彼女は、

「そうなんだ」

と言いつつもいて、

「じゃあ、もういい」

彼は訝り、

「何、どうしたの」

「なんかもう、どうでもよくなつちやつた」

「どうしたんだよ」

「なんでもない」

「そんな、無理言うなつて」

「もう、いいから。いいから放つておいて。どうせわたしのことなんかどうだつていいから」

彼女もまた幼児だ。

ガキくさい、ということではなく、発達心理学の指摘する事実として、

心理的に成長していなければ、人は何歳になつても幼児のままだ。

彼女は、三十歳だから、一般的の道理を当然わかっているが、本当にわかっていない。

「ちょっとしたとき」にはそれが露出してくる。

本当にわかつていな道理が、立ち上がりつてくるナルシシズムにもみ消される。

彼女はまさか、自分のことを幼児とは思っていないし、自分のことをナルシシストなんてわずかも思っていない。

彼女は、  
「わたし、ディズニーランドに行きたいって言つただけ。ただそれだけなの」

と思っている。

「ただ、そう言つただけなのに、彼にぜんぜん聞いてもらえなかつたのが、悲しくて、わたし傷ついたの」と彼女は言う。

月一ででもディズニーランドに行きたい、というのが彼女の気持ちだつた。

自分の気持ちで彼が動いてほしい、と彼女は思つてゐるし、また彼女は三十歳になつて、その思いが「当たり前」になつてゐる。

「わたしがこんなに言つてゐるのに。わたしの気持ちはどうなるの？わたし、あなたが仕事でいそがしくて会えないときも、いつも我慢しているじゃない」

自分の気持ちで彼が動くなら、それに彼女はキューンとなる。

快感と感動があり、彼女はそれを、うつくしいもの、感動そのもの、と体感する。

彼女においては、その美と感動こそが「恋愛」なのだ、という解釈もあるかもしれない。

その快感のため、美と感動のため、彼を侵略し、支配とコントロールをする。

そのことに何の咎（とが）があるだろう。

そしてもし、その美と感動たる支配とコントロールを、まさか彼が拒絶するなんてことをするなら。

信じられない、信じたくない、という大ショックが起ころる。

そして、猛烈な怒りと憎悪が湧く。

このとおり、ナルシシズムというのはただの幼児以降の未発達であつて、病気ではない。

病気ではないから治療の対象ではないのだ、ナルシシズムを「治す」ということは理論的にはない。

「心理的に成長するしかないんです」と、心理学者の加藤諦三は言う。おれも、そのとおり同じことを言うしかないように感じる。

心理的に成長するしか、たぶん本当に方法がない。

## ナルシシズムの克服は「（ ）」なので、ナルシシストはそちらの方向には進まない

自分のナルシシズムに気づいた人は、多く、そのナルシシズムを、「治したい」と考える。

ナルシシズムは、病気ではなくただの未発達だから、「治す」という対象ではないが、実際問題としては、「治す」「治したい」という語が当てはまつてくるのはよくわかる。

原理的には、それは未発達の様相とはいえ、現実的には、どうにもそれは「病的」というほどの感触がするからだ。

病的なものなら、「治したい」という言いようが当てはまつてくるのも自然なことだろう。

ところが前もって、このナルシシズムを「治したい」という話は、じつさいにはなかなか成立しないというか、成功しないということを、前もって言っておかねばならない。

ナルシシズムが克服されていく過程というのは、たしかにあるのだが、それは後に示すとして、それよりも先に、ナルシシズムが「治らない」という構造についてを、先に示しておく必要があるよう思う。

自分のナルシシズムに気づいた人は、それを「治したい」と考える。けれどもそれは、実際的には、そんなにすっきりした話ではないのだ。ナルシシズムを「治したい」と考へるのは、ナルシシストにとって、自分がナルシシストだと気づいたことが「不快」だからにすぎない。

不快だから、それを治し、「快」になりたいと考える。

これが、病的なものというより、はつきりとした病気だったら、その

文脈で問題なく成り立つただろう。

誰だって病気になれば不快だし、治癒したらそれは快に切り替わる。

自分が風邪をひいていたと気づけば、それを「早く治したいです」と望む、それは誰でも当たり前のすつきりした話だ。

けれどもナルシシズムはそういうものではない。ナルシシズムはそもそもが病気ではない。

ナルシシストが、「ナルシシズムをさつさと治したいです」と言うのは、何かを自己決定しての言いようではなく、単に「さつさと快になりたいです」と言っているにすぎない。

ところがじつさいには、ナルシシストにとつて、ナルシシズムの克服というのは、それに向かうことじたいが不快なので、ナルシシストによるナルシシズムの克服は大頓挫するのだ。

シンプルな仕組みがある。

ナルシシストにとつての快とは何か。

これはどこまでも変わらない。ナルシシストにとつての快とは、「人が自分の言うことをきいてくれること」だ。

自分の気持ちを、他者に侵入させ、他者が自分の気持ちから、支配とコントロールを受けてくれるということ。

そのことにのみ、胸にキューンとくる、無上のよろこびと、美と、やさしさと真実がある。

「キューン」というのは、ナルシシズムが充足されるときのチャージ音だ。

そしてありていに言つて、ナルシシストにとつてその「キューン」は、それだけがすべてを許せる「快感」なのだ。

ナルシシストはけつきよく、この「キューン」という快感に向かって全力で生きているだけにすぎない。

このことを、おれは勝手に、ナルシシストの「快感原則」と呼んでい

る。

ナルシシストは、この快感の得られる方向にしか進まない。

その他の方向へ進まされるときは、ナルシシストにとつて「我慢」にしかならない。

ナルシシストは、この「キューン」が得られないとなると、苛立つか、そうでなければ追い詰められる。

追い詰められた結果として、この場合、「治したいです」と言つてているだけだ。

これは意地悪で言つているのではなく、本当に、この原則を見ておかないと脱出のしようがなくなるので言つてているのだ。

追い詰められた結果、「治したいです」と言つてているだけで、そのまま快感に反する方法を示されると、けつきよくナルシシストは激怒するだけになつてしまふ。

ナルシシストは、「キューン」で快感を得ているときだけ安定しているが、そうでないときは、我慢を重ね、追い詰められているか、もしくは激怒している。

その激怒というのも、感情が未分化という、幼児未満の未発達によつて起つてているのだが、そのことにはまだ触れないでおこう（話がややこしくなつてしまふので）。

なぜナルシシストは、ナルシシズムから脱出できないのか。

ナルシシストにとつて快とは、「人が自分の言うことをきいてくれること」だ。

ナルシシストにとつて不快とは、「人が自分の言うことをきいてくれないこと」だ。

ナルシシズムとは、「人を侵略し、支配・コントロールすることの快感」

ナルシシズムの克服とは、その侵略やら支配・コントロールやらの、

発想と快感じたいを持たなくなるということだ。

それはナルシシストにとつて耐えられないことなのだ。

人がオレの言うことをきいてくれないなんて。

人がわたしの言うことをきいてくれないなんて。

「けつきよく我慢しろっていうことですか？」

となる。

ぜつたい許せない。

それがいちばん許せない。

そんなことを許すべからいなら、自分はナルシシストでいたほうがマシだ。

「そこまで我慢して、ナルシシズムとやらを克服したいとは思いません」「あはは、自分で気づきました。むしろわたしは、今までそうやって我慢させられてきた、被害者だつたんですね」

そうしてナルシシストは、ふたたび「キューン」を追い求める道へ帰つていく。

それはやはりナルシシストにとつて、燐然と輝く強い正義の道だ。

快への期待に、満ちている。

ナルシシストは誤解している。

ナルシシストは、誤解の上で、「ナルシシズムを治したいです」と言つてている。

ナルシシストは、

「ナルシシズムを治せば、またあのキューンが、今まで以上に得られますよね？」

と思っているのだ。

ビッグな快感を期待している。

それで、治したいです、と言つてている。

ビッグな快感を期待し、それが得られるならばと差し引きして、自分

のナルシシズムを認めてもよい、と考えている。

快感原則だ。

そこでもし、「そんなビッグな快感は得られない」と言い、それ以上に、

「その快感じたいがナルシシズムだから」と否定されるならば。

ナルシシストは、それを治すどころか、激怒するに決まっている。

意地悪で言つているのではない。

ナルシシストは本当に、前もつてこの「キューン（快感）充足⇒我慢激怒」の往復内に閉塞しているので、このことを先に示しておくしかないのだ。

ナルシシストは、露骨なため息を示して、

「けつきよくのところ、我慢しろ、と。そういうことですよね。我慢するしかないってことですよね。ハー、あんまり生きる意味つてないんですね。バカバカしくなつちやつた」

ここに当てはまるのはやはり、「治っていない」ではない。「成長していない」だ。

ナルシシストは「キューン」という快感原則によつてのみ拳動している。

快感原則に反するものは、「我慢」として受け入れるよりないが、その「我慢」はいざれ相応するキューンで報いてもらうという前提だ。そうでなければ未分化の激怒を発するよりない。

ナルシシズムが、「治る」わけがない。

残されるのはいつも、何十年経つても「成長していない」という振り返りだけだ。

ナルシシズムは、成長によつて「過ぎ去つていく」だけのものだ。

ただ、その「成長」を、頑強に拒む愚かさと傲慢さが、人には少なからずある。

快感と成長、どちらかを選ぶという、けつきよくは人それぞれの選択

でしかないのだろう。

おれはかつて、若かつたころ、いいかげん幼児じみた快感への期待と偏執に疑義を持ち、成長のほうを選んだ。

そしてそのときから——きっとナルシシストにとっては理解不能の極みだろうが——人がおれの言うことをきかないことほうが、おれにとつてはよろこびになつた。

とはいえるここでは、ナルシシストの「快感原則」という通告と、どうやらそうでないものもあるらしい、という予告を示すにとどめておく。

ナルシシストにとって、ナルシシズムの克服は「不快」なので、ナルシシストはそちらの方向には進まない。ナルシシストは常にナルシシズムの快感を期待しての進行方向のみを探るのだ。

どのように道理を把握していくも、けつきよくはむくむくと「が」が発生してくるので、いかなる道理の把握も無意味なのだ。

たとえばわたしが、有名企業の就職面接を受けたとする。わたしは、

残念ながら落選し、ほかの誰かが内定を勝ち取つたとしよう。

それはわたしが力及ばずだったからしようがない。

わたしより優秀な者がいて、わたしより有効なアピールを出来た者がいたのだからしようがないことだ。

そう、それはしようがないことではないか。

誰だつて、就職するなら、自分の入りたい企業に入りたいだろうが、誰も彼もがそうやって夢を叶えられるわけではない。

人生はままならないものだ。

落選したのは無念なことだが、そのことに不服はない。

わたし以外にも落選した人たちはたくさんいるのだろう。無念を糧として、前を見て進んでいくしかない。

誰だつてそうだろ？

人生は……

が。

が、なんとか今からでも、逆転して入社する方法はないですかね？

本当に、〇〇社に入りたいんですよ。

何か方法ないですか。

なんでもしますんで、誰か、なんとかしてくれる人を紹介してください。

ナルシシストは常にそうしたことを考える。

正確には、どうしても、そうした思念が湧いてきて、それに支配され

ではどのようにナルシシズムは克服されうるのだろうか？ これにはじつは、前もって決まっている手続きがあり、そこにドラマチックな盛り上がりはない。あとは当人がその道理の通りに進むかどうかという、自己決定にのみすべてが掛かっている。

それは心理的なことのはずが、学門としては恬淡としたものなので、特に演出も付加せず、ここでただ番号つきで示してゆこうと思う。

## （ ）の発見

ナルシシストは常に、特徴的な「が」を発生させる。

### ① 「が」の発見

「面接のとき、どうもうまくアピールできなかつたと思うんだよね。本

当のおれが見せられたら、結果はきっと違っていたと思う」

「そうは言つても、その本当の自分というのを見せるのが面接という機会で、そこでしくじつたんならしようがないだろ」

「それは、たしかにそう。まったくそのとおり。そのための面接だものね」

「そうだよ。誰だって、そこでコケなきやイケると思つてゐるけど、なかなかそうはいかないもので、みんな苦労するんじやんか」

「そうだな、おれもまったくそうだつた」

「まあだから、力及ばずで、残念だつたが、しようがないね」

「そうだな、しようがない。ああ、まったくしようがないわ。力及ばず、かあ」

力及ばずだつた。

が……

が。

が。

「が、それはそうなんだけど、なんか納得いかないんだよ。だつてさあ、これじやけつきよく、本当のおれは、向こうに見てもらつてないわけじやん？ これじや面接の意味ないじやんつて話なんだよ」

他の例。

わたしが社会人になり、同期のほうが先に出世したとする。

わたしから見て、同期の彼は、ただならず努力してたし、実績も出していた。

新人のころは、わたし以上に泣かず飛ばずの凡人だつたが、彼はわからりやすく根性を見せ、何事にも挑戦し、デキる男になつていつた。

そのことを何年もつづけてきて、今回の昇進は、むしろ衆目にも「当然」と認められる抜擢だつた。

同期のおれとしては、先を越されたことになるが、おれは彼に比べて

たいした努力もしていないし、挑戦もせず、実績も出していない。

何よりもそもそも、デキる男になるための根性を見せたということがない。

この場合、出世にかかわつて、おれと彼とを比較する由さえない。

おれもあらためて、彼のことを見習つたほうがいいかもしれない。

彼が祝福されるのは当然として、おれはしばらく平社員をつづけよう。

おれがダメなんじやなくて、彼がすごいんだ。

これら一連のことに、何もおかしなことはない。

おれはよくよく納得している。

おれが役員だつたとしても、どうぜん彼を選んで昇進させる。

それはそうだ。

が……

が。

が。

「が、なんか違う感じはするよな？ いや彼の努力も実績もわかるし、おれとの現時点での実力差もわかるよ。でも逆に、おれが昇進したほう

が可能性としてはよかつたんじやないつて思う。なんでかわかんないけど、直観的にさ。うん。……あ、わかつた！ おれたぶん、今回の人事には最後まで納得しないわ。今回の人事は、なんというか、わかりやすい失敗なんだよ」

ナルシシストは常にこの「が」を発生させる。

駅前でさんざん納得しても、交差点を曲がつたらもう「が」が湧いてくる。

なぜこのような「が」が発生するか。

その仕組みはシンプルだ。

ナルシシストは自分を特別なものと思っているからだ。

面接で落ちたら、その会社には入れない。他のふさわしい誰かが入社

する。「が」、自分は特別なものだ。ボクは直接で落ちてもその会社に入れるのではないか？ そういう思念が自然に湧いてくる。

そうして湧いてきたそれは、彼にとつてじつにすつきりと快、うつくしく真実で、ゆいいつ力強くやさしく、正しいものに思えるのだ。

努力としても実績としても、また具わった実力としても、同期の彼が出世するのは当然のことだつた。自分はそこまでやつていなし、実力的にそこまでに至つていないので昇進には当たらない。それも当然のことだ。

「が」、そういうのは一般論にすぎず、ほかの誰かに「特別な何か」がある場合は話が変わるだろう。

だから今回の人事はどうしてもしつくりこないんだよ。

もつとあるべき判断があつたと思うんだよね。

そういう思念が自然に湧いてきて、湧いてきたそれはじつに正しいものに思える。

「が」の発見。

あなたも自分のナルシシズムを疑う場合、あなたはいつそ、「自分はすべてについて何ひとつ納得はしない！」と前もつて考へるほうがよい。

なぜ納得しないのか。なぜなら、あなたにとつてあなたは「特別」だからだ。

^^ナルシシズムは、自分から見た自分が「特別」で、他人から見た自分はそうではないといふことがわからぬのだVV。

あなたは、自分が学級で一番目の美人だつたとしても、そのことに納得はしない。

いちばんの彼女のほうが美人だといふのは見たらわかる。

いちばんの彼女はあまりにも飛びぬけているのだ。

他の学校にも知られていて有名なぐらいで、芸能界からスカウトが来るようなタイプだ。はつきり言つてモノが違う。

さすがにアレには負けるよ、そこまでわたし思ひあがつていなかつて。「が」……

ナルシシズムの「が文脈」が湧いてくる。

いちばんの彼女はたしかにすごい美人だ。

が、

「彼女はただの、いわゆる美人つてだけでしょ。わたしの場合はそういうのじやなくて、美人というより、プラス別の、何かの感じの人じやん？」  
「だから、彼女は正直そこまでアレではないというか。本當には、わたしがいちばんだと思う。悪いけど。ね、じつさいそういう思わん？」

そういう思念が湧いてきて、その湧いてきた思念はあなたにとつてじつに正しい。すつきりして快で真実だ。

お金持ちは高級なホテルに泊まるが、あなたはせいぜい中級止まりだ。あなたはそんないそなうな身分じやないということを自分で理解している。

そんなにお金を持つていないのでから宿泊する部屋はほどほどのものだ。当たり前のことだらう。

経済的に大きなはたらきをした、財界人とかが、一泊三十万円するとかの、ああいう離れの部屋とかに泊まるんだろうね。

そういうもんじやない？ それはそれで、すごいことだし、わたしはわたしの身分で、満足しているよ。

「が」……

あなたは納得なんかしていない。

信号待ちをしていたときは納得していたが、青信号になつたころにはもう「が」に切り替わつてゐる。

あなたにとつてお金持ちは特別な存在ではないが、自分は特別な存在だ。

あなたは、どこまでも自分が高級ホテルに泊まるものじやないかとい

う思念を湧かせ、金持ちの宿泊に内心で首をかしげる。

「お金持つているからって、あの人たちは高級な部屋に宿泊しているんでしょ。それって、いわゆるただのお金持つて、もうけつこうな齢なんだから、そういう人たちが高級な部屋とかに泊まつても意味なくない？」

仮にあなたが、仕事上で大きなミスをして、多くの人を困らせ、少な

くない実害を出したとする。

そのときあなたは平謝りだ、

「まことに申し訳ございません」

なんでこんなミスをしてしまつたのだろうと、あなたは痛切に反省する。たしかにあのときの自分はボーッとしていた。不注意に加えて怠慢があつた、という指摘はまつたくそのとおりで、肅々と肯い、頭を下げるしかなかつた。

どう考へてもわたしが悪い。

いろんな人に迷惑をかけてしまい、なんとも、いたたまれない。申し訳ない。

ものすごい、わたしのミスだ。

「が」……

が、

「うーん、なんかそこまで、わたしが悪いわけじゃないと思うのに、なんでこんなに言われなきやなんないの？」マジむかついてきた。わたしのとき、どうしても気になることがあつて、注意散漫になつていてただけなんだつて。そういうことつて誰にでもあるじやん。それをさあ、ホントにここまで言われなきやいけない？」

そういう思念が湧いてきて、湧いてきたその思念はあなたにとつてじつに正しい。

ミスをすれば、そのミスは当事者の責任となるが、それはあくまで一般論であつて、「特別」なあなたにまで当てはめられることは、あなたにとつて許しがたい不服になる。

初めは頭を下げていても、内心でしだいに、あなたの側が不服と唱えるべき真の正義を覚えてくる。

あなたは「特別な何か」の人だから。

ほかの誰かがまつたく同一のミスをしたときには、その人は特別な何かの人ではまつたくないの、すべてはその人の単純な責任になる。

「弁解とかありえないんで。このミスじたいがぜつたい許せない。だつてこれ不注意というよりアツの怠慢の結果でしょ。マジ最悪」

他人の場合はそのとおりだが、自分の場合は「ちよつと待つて」になるのだ。

他人の場合は特別ではないが、自分の場合は特別なので「ちよつと待つて」になる。

もつと単純な例で言えば、たとえばわたしは、文章力ということといえば、あなたよりきっと上位にあると思う。そりやあこれだけ大量に書き話して、命を投げ込んできたのだから、経験量にせよ費やしてきたものの質量にせよ、差分があつて当たり前のことだ。

「が」……

あなたはけつときよく、自分がこいつより文章力において劣るというようなことにも納得はしない。理由はなんでもいい、どうせこじつけの理由だ。なんであれ、あなたにとつて自分は「特別」だが、ほかの誰かは特別ではないのだから、特別な者がそうでない者に劣る理由はない、引けを取る理由もない、という思念になつていく。

ナルシシストは永遠に、この「が」を湧き立たせる。

がんばっている人を邪魔するようなことは、してはいけない。ぜつたにしてはいけない。「が」、自分はこの場合しようがないというか、自

分はある意味特別だから。今回だけは。他の誰かがそんなことしたらぜつたい許さないと思いませんけど（笑）。この場合たぶんわたしだけはいいんですよ、だつてしようがないですもん。そういう思念が湧いてくる。

不十分なものは相応の低評価を受けるべきだ。「が」、自分の場合は、特別なので、不十分とはいえ高い評価を受けてよいものだと思える。そ

うでないとおかしいとも思えてくる。

みんなで暑い中を一時間歩いてきたら、みんなして「たいへんだった

！」となる。そりやそうだ、暑さは平等だ。「が」、「その中でも特にわ

たしはたいへんだったんだよね」となる。

自分が「特別」な存在に思えており、他人から見た自分がそうではないということがわからない。それが幼児性およびナルシシズムの最も安直な表れだ。そのことのじつさいは、果てしなく湧いてくる「が」で現れてくる。

だからナルシシストは、どのように帰り道に道理を納得したつもりでも、タクシーの後部座席に乗った瞬間にはもう「が」が湧いてきて文脈が書き換えられる。

すべての道理への納得はダミーに過ぎず、けつきよくは「おれの場合

は特別だから違うじやん」という文脈に書き換えられるのだ。

## ②「我慢」の発見

「が」「が」「が」と言つていてもキリがない。そして無意味なことだ。わ

たしがどのように思念を湧かせようとも、就職試験に落選したらその会

社には入れないのでし、人事が同期の昇進を決めたのならば昇進するの

は同期であつてわたしではない。

だからわたしはどうするかというと、

「しようがない、我慢するよ」

ということになる。

我慢するよ、と、サツと言える。

なかなか、潔（いさぎよ）いだろう。

それが、出来たオトナというもののじやないか。

……ん？

「いやだから、今回はあいつの勝ち、おれの負けだよ。そう認めて、おれは我慢するつて。なんども言わせるなよ」

わたしは何を言つているのだろう。

わたしはいつたい、何を「我慢する」というのだろう。

あなたは自分が学級で二番目の美人ということで「我慢」する。

あなたは金持ちと違つて中級ホテルに宿泊する。

「しようがないよね、わたし我慢する」

あなたは金持ちと違つて中級ホテルに宿泊する。

あなたは仕事でミスをし、多くの人に迷惑をかけて、平謝りした。

不注意に加えて怠慢があつた、と厳しく指摘された。その指摘は当たつており、まさにそのとおりだつたと自分でも思う。

「そりや、厳しく言われるよね。しようがない、受け入れて、わたしはひ

とまず我慢のときだ」

あなたは何を「我慢する」のだろう。

あなたはおれよりも文章力について劣るだろう。あなたはそれについては肯定し、

「そうですね。文章力についてはさすがに負けます。そこは我慢します」と言う。

不十分なものを出したあなたは、相応の低評価を受けた。あなたはそれについて、

「まあ、不十分だつたし、妥当な評価だと思う。今回はこれで我慢するしかない」

がんばっている人を邪魔したとき、あなたは、

「ごめんなさい、次からはぜつたい我慢するので、今回だけは」

と言ふ。

他の誰かがやつたら、ぜつたいに許せないことと感じるが、自分のことになると「特別」になり、「が」が湧いてくる。

先ほど①で示したように、人はナルシシズムにおいて、じつは何ひとつ納得などしていないのだ。どんな道理があつたとして、またその道理を把握していたとして、当人がそれで納得するというわけではまったくない。

当人としては納得したつもりでも、うつむいて一呼吸すると、たちまち体内からナルシシズムの「が」が湧いてくる。

そして、そんな不毛な「が」を湧き立たせたところで、そのナルシシズムがすべてを圧して押し通るわけではない。押し通らなかつた場合はどうするか。どうするもこうするも、どうしようもない「我慢」する。

わたしが女性をデートに誘つたものの、フラれてしまい、彼女は別の誰かとデートに行つてしまつたというとき、わたしはそのことを「我慢する」と言うのだ。

道路が渋滞しているとき、自分もその渋滞を作り出している当事者のひとりであることは確実だが、ナルシシストはその渋滞において自分だけを被害者と感じ、周囲の自動車を加害者と感じる。

「くそつ、車が多すぎ！」 移動する奴が多すぎなんだよ」

かといって、どうすることもできないので、ナルシシストは「我慢」をする。

「しゃーない、あーダリい、またこうやつて、オレは『我慢』させられるのか」

ナルシシストは、こうして当人だけ、この宇宙で無尽蔵に「我慢」を貯蓄していくのだ。

「水曜日は無理だから木曜日でいい？」

「そうなの？ わかった」

納得して了承したように見えるが、当人は内心で、

「水曜日がよかつたけど、まあ我慢しよう」

と思っている。

少なくはない我慢ポイントを溜めている。

そして定期的に「我慢の限界」が来る。

我慢の限界は、事象として爆発的な様相でやつてくる。

当人は、ここまで我慢の蓄積が、他のすべての人に理解・共有されていると思っているのだ。

「オレがこんなに我慢してやつてているの、お前らにはわからねえのかよ！」

とつぜんの爆発。

周囲の人たちは、

（え、え、これ何？）

（彼は何のこと言つているの？）

と怪訝な目配せを交わしあつている。

彼は自分のとつぜんの爆発が、話として当然通じていると感じている。

ナルシシストは、自分が「特別」な存在で、その特別性ゆえに何ひとつ道理に納得してはおらず、そうは言つても力及ばないことについては、すべて「我慢」しているのだ。

その「我慢」をしてきたぶん、自分はどうぜん、自分の気持ちで他者を支配・コントロールする権利があると思っており、そこでキューンという快感を得られることを代償のアテにしているが、そのことが否定されると、もう我慢の限度を超えて激怒を起す。

この激怒は感情的に未分化で、不快・寂しさ・悲しさ・怒り・不安・恐怖がごちゃ混ぜになつてゐる（※感情の未分化については本稿ではまだここまでに説明していません）。

### ③「他者」の発見

ナルシシズムの克服はこの一点に掛かっている。

ナルシシストは誤解している。正確には、やはり未発達のままで、情報報を正しく認識できていないということになるし、あるいは正しい情報を受け容できていないということになる。

他者というのは本来、「自分の言うことをきかない存在」のことを指すのだ。

あなたの右腕は、あなたの意図したとおりに動く。障害でもないかぎりは。あなたの左腕だってあなたの思ったように動く。あなたは思つたとおりに歩くことができるし、考えたとおりにグー・チョキ・パーを出すことができる。

つまりあなたの身体はあなたの言うことを聞く。

だからあなたの身体はあなたにとつて他者ではない。  
ナルシシストは他者に「言うことをきかせたい」。

これはナルシシストの誤解だ。

他者とは定義として「自分の言うことをきかない存在」なのだから。言うことをきかせたい、ということは、それじたいが「他者」の否定だ。

だからナルシシストは、他者の誰ひとりをも愛してはいないということになる。

この当たり前だ。

本当に六歳児のままだからだ。  
じつさいの六歳児のほうが混乱しないかもしない。

他者とは何だろうか。

あなたが頭の中で、三桁の数字を思い浮かべたとして、わたしはその

数字を読み取ることができない。

テレパシーやESPは、存在しないか、仮に存在したとしてもほとんど偶然に生じるものでしかなく、そんな恣意的なことには使えないのだ。一組のカードデッキから、あなたが自由に一枚のカードを選んだとき、わたしにはあなたの選んだカードがわからない。

当たり前だ。

「手品師なのにわからないのですか」

それは話が逆だ。

他人の選んだカードがわかるのだったら、手品師という存在が成り立たない。

人は人の内部に侵入できないのだ。

内部に侵入することはできず、内部から支配するということもできない。

サルトルが「地獄とは他人のことだ」と叫んだのがそれだ。  
われわれは、暴力や精神的加圧、恫喝、神経症的依存や、宗教じみた脅し等によって、外力的に他者を支配しうるだけでしかない。

それだってけつぎよく、

「何もかも要りません」  
と言われたら、支配はできない。

娘が内心で中指を突き立てていたとして、母親がそれを読み取るといふことはできない。

超能力やオカルトを前提にするというような馬鹿げた条件でしか、「こころはつながっているんだよ」というようなことは言えない。

こころがつながると言い張る人は、即刻、戦争ビジネスを続いているいくつかの国の首脳にこころをつなげて、その愚劣な行為をやめさせて

くれ。

こころがつながるならすばらしいことだ、明日の朝刊を楽しみにしているぞ。

こころはつながらないし、人に言うことをきかせることはできないのだ。

言うことをきかせられない存在が「他者」だ。

支配・コントロールできないのが「他者」なのだ。

ナルシシストはそのことがわかつていな。

繰り返す、ナルシシストは、本当にそのことがわかつていな。

わかつているつもりでいるだけだ。

定義レベルでわかつていな。

おれがあなたに、

「缶コーヒー買つてきてくれ」と頼んだとする。

「はい」

あなたは請け負つた。

かに見えた。

けれどもあなたはなぜか、おれにラグビーボールを買つて來たとする。

まったく予期していなかつたおれは、それなりに戸惑うだらう。

けれども、おれはそのことであなたに、

「はあ？」

と言つて怒るということはしない。

あなたが何をどうするかは、あなたが決めることだからだ。

缶コーヒーを買つて來いと言われたからといって、何をどうするかはあなたの決めることだ。

あなたが、判断力を失つたり了解不能になつたりして、ラグビーボールを買つて來たのだとすると、おれは別の心配をするが、そうではなく、

あなたの主体的な行動としてそれを買つて來たのだとすると、おれはそのことについて怒つたり、文句を言つたりはしない。

怒る筋合いでないし、文句を言う筋合いでもないからだ。

缶コーヒーについて、おれはあなたをアテにしたのだが、だからといって、あなたがそれに付き合わなくてはならないという道理はない。

アテにすると、この場合、あなたが缶コーヒーを買つて來なかつたからといって、おれが何か困窮するわけではない。戸惑うだけだ。

人がわざわざ困るようなことをするのは、悪意であつて、公共の福祉にも反するので、別の問題があるが、そうでないかぎり、あなたが何をどうするかはあなたが決める。

おれが、おれの書いたものをあなたに読ませ、

「どうだ、面白かったか」と訊いたとする。

それについてあなたが、

「つまんなかった」と言いたいとき、あなたはそのことに怯えなくていい。

あなたにとつてそれが面白かったか・つまらなかつたかは、あなたが体験することだ。

おれがあなたの体験を支配・コントロールすることはない。

おれの書いたものが面白くないわけはないけどね！ あくまで仮の話としてだ。

あなたが、おれの書き物を「つまらなかつた」と言うなら、おれは「あらら」と言うだけだ。

あなたが「もつとこう書けばいいと思う」と言つたとして、おれはあなたの言うことをきかないだらう。

あなたの言つていることの内容はヒアリングするが、あなたの言うことはわざかもきかない。

おれはあなたの言うことをきかないので、あなたもおれの言うことをきかなくていい。

あなたは誰の言うこともきかなくていいのだ。

同様に、誰にも、あなたの言うことをきかせようとするな。

従業員としては、業務命令に従う義務が一定ていどあるし、学校に行つていれば、生徒はあるていど校則に従わねばならないが、そうしたことでないかぎり、あなたは誰の言うこともきかなくていいし、同様に誰も、あなたの言うことなんかきかなくていいのだ。

「他者」の発見だ。

他者は、どこにでも存在するように思えるし、誰でも他者というものを認識しているように思える。

けれども、本当はそうではない。

他者というのは、当人が「発見」するまでは、本当には捉えられないし、本当には存在していないのだ。

ナルシシストには「他者」が存在していない。

他者が存在していないので、目の前の人々に、赤の他人に、侵略をして支配・コントロールをする、そのことがどうぜんに思えるという発想になるのだ。

おれが志望企業の面接に落ちたのはなぜだろう？

^^そのことは知る由もないvv。

なぜなら、おれを落選させたのは、おれではなく面接官だからだ。

おれを内定させるか落選させるかは、おれの決めることじゃない。さまざまな理由も含め、他者の決めることだ。

だからおれからは知る由もない。

同期の出世・昇進も、上司や人事の決めることだ。おれの決めることじゃない。

だから、同期が昇進するべきなのか、おれが昇進するべきなのか、そ

れについて考えるということじたい、おれが当事者ではありえない。

そこでおれがいつたい何を「我慢する」というのだろう。

一組のカードデッキから、あなたがハートの8を選んだとして、おれがそのことを「我慢する」というのか。

他者が選び、他者が決めるなどを、なぜおれが「我慢する」のか。

「我慢」という文脈は発生しない。

あなたがあなたの飼うハムスターの名前を決めるとき、その名前がどのようにであれ、それについておれが「我慢する」というのは意味不明だ。

おれはいつさいの我慢をしない。

おれが女性をデートに誘って、フラれたとして、そのこともおれが決めるこどじやない、誘われた彼女の側が決めることだ。

彼女がその誘いを受けてくれるにせよ、断るにせよ、おれが「我慢する」という文脈はない。

そのことは、「他者」を発見していない人にはどうしてもわからない。

おれがあなたに、缶コーヒーを頼んだところ、あなたはラクビーボールを買って来たとする。

多くの人はここでどう感じるか。

口には出さないにせよ、

(うわ、何こいつ。ヘンな奴。はあー、しようがない、面倒くさいけど我慢しよ)

と思う。

なぜ「我慢しよう」という文脈になるのか。

それは、どだい、人が自分の言うことをきくと思っているからだ。

言われたとおり、コーヒーを買って来てくれて、

「おっ、ありがと！」

と礼を言う、そういう予定調和のステレオタイプ・イメージが、人との付き合いだと思つてゐるからだ。

おれはあなたがラグビー・ボールを買って来たとしても、それについて「我慢」は一切しない。

なぜかといって、何度も言うように、何を買って来るかはおれの決めることではないからだ。

おれが何を頼むかは、おれの決めることだが、何を買って来るかは、あなたの決めことだ。

あなたがナルシシストだった場合、あなたはこれまで生きてきて、じつはひとつ的世界のありようを、まったく知らない今までいるのだ。ある人が汗をかいて、おれに、

「タオル貸してくださいますか」と頼んだとする。

おれはそれについて、

「おう」

と言い、竹とんぼを差し出す。

「ほれ、これをどうぞ」

するとどうなるか。

「は？」

とはならない。

「あ、竹とんぼだ！」

となる。

あざやかな声と、あざやかな瞳だ。

あなたの知らない世界だろう。

彼女は汗を搔いたまま、竹とんぼを揉んでシューと飛ばすことになる。

彼女はタオルを頼んだが、何を持ってくるかはおれの決めることがだ。

おれの決めることが、つまりおれの主体性だ。

彼女はナルシシストではなく、おれの主体性——他者の主体性——を

受け取るのが当たり前になつてるので、タオルではなく竹とんぼを渡されたときに、「は？」とはならなかつた。

ほとんどの人は、

「……は？ なんで竹とんぼなんですか」

となるだろう。

どだい、人が自分の言うことをきくものだと思つてゐる。

他者が存在しておらず、他者が発見されていない。

ほとんどの人がそれなので、ほとんどの人がじつさいには、六歳児かそれ未満の、ナルシシストということになる。

残念ながらそれが事実だ。

常識的に考えてうんぬんと、理屈を言うが、いかげんそういう無駄な問答も不毛だ。

他者を発見しておらず、他者の主体性を受け取るということを根本的に知らない、ナルシシストというのがわれわれのほとんどだ。

ナルシズムの克服は、この一点に掛かっている。

「他者」の発見。

それはつまり、「他者が決める」と。

侵略して支配・コントロールを目論むなら、それはもう定義として「他者」の否定だ。

そのことが真に発見されたとき、先ほどからの、「我慢する」というわけのわからない文脈は消える。

他者が決めるごとに、こちらへの悪意・加害の意図がないかぎりは、おれの側には何もすることがない。

(悪意と加害の意図がある他者に対する、とうぜんの危機管理が発生するが、それはまた別のジャンルの話だ)

おれは何もしない。

当たり前だ。

何を我慢するのか、我慢というのは意味不明だ。

おれは何もせず、おれはずつと、気魄を受け皿にして魂を呼びこむだけ。

気魄の正しい使い方は、地べたを行き渡り、「何もしない」のだった。

#### ④「冷淡問題」の発見

ナルシシストは六歳児なので浅はかだ。どれだけ加齢しようが、心理的に成長していない人は、「ややこしく」なるだけであって、奥行きを得るものではない。

ナルシシストは浅はかなので（これはただの悪口だ）、いまさらになつてこの「冷淡問題」に出くわす。

つまり、「他人は他人じゃないか」ということ。

他人の決めることは、他人の決めることであつて、奥行きを得「こちらから口出しはできないし、興味持つてもしようがないですからねえ」

と、ことさらには冷淡になるということ。

少年マンガにさえ出て来ないような浅はかさだが、ナルシシストは一旦この安物の文脈を思いついてしまうものだ。

この浅はかさから脱出しないと、人はニーチェなんかをありがたがつて読むというような、知性の低いものになつてしまつ。

先の③で示したように、他者とは、自分の言うことをきかない存在だ。自分の言うことをきいてくれるという期待は、そもそも定義として「他者」に反している。

仮にわたしが、若く美しい女性を見つけたとして、土下座して彼女との逢瀬を乞うたとしよう。

そのときわたしは、そのようなみじめつたらしい振る舞いで、彼女のところが動かされるようなことが、どうぞ「無きように」と願つてゐる。

わたしは他者のこころに侵略するようなことはしたくないからだ。

他者のこころに、人格に、自我に、入り込んで支配・コントロールするというようなことをしたくない。

そんなことはわたしにとつてわざかも快感でないし、わざかもよろこびでないのだ。

わたしがそうして性愛に向けての土下座をすることがあつたとしたら、それは本当に単純に、おれが土下座をしたくて土下座をしているだけだ。

人のこころに入り込んで言うことをきいてもらおうとはおれは一ミリも思わない。

仮にあなたが、やけ酒でも飲んで身体を壊しそうにしていたら、それはちょっとこころに割り込んででも、あなたをコントロールしようとしてしまうことがあるかもしれないが、そうしたことはやはりおれにとつてはよろこびではないし快感でもない。

おれはおれのやりたいことをやるだけだ。

あなたもあなたのやりたいことをやればいい。

おれは、自分がそうしたいと思えば、自分限りの當為として土下座もするし、土下座して「ほれ」と竹とんぼを手渡す、というぐらいのむちやくちやは平氣です。

おれは何をしているのか。

おれは何もしていない。

土下座したつて、別に相手に何かをしているわけではないし、竹とんぼを手渡したつて、別に相手に何もしていない。

気魄という事象の根源レベルで、おれは相手に何もしていない。

そして、こんなわたしのむちやくちやは拳動を、少年マンガにさえならない「冷淡さ」で上書きすることには無理がある。

他人は他人だからね、と、冷淡になつてゐるのは、ただのその人のひ



冷淡、というような、中学二年生でも控えそうな安直さを、われわれはつい思いついてうつかり気取つてしまふところがあるのだが、そんなことを言えばそもそも、あなたがいま手元で目撃しているこの文章が、実作のものとしてまったく冷淡でないということにつじつまが合わない。

他者は他者であり、人の言うことをきかないものということが定義であつて、わたしはそのとおり、これを読むあなたがわたしの言うことをきかないものとして書き話している。それはわたしにとつて当たり前のことだ。あなたがこれを読んで何をどう思うのかは、あなたの決めることであつておれの決めることではない。あくびをしようが唾を吐こうが、それはあなたの決めることだし、震えて冊子を握りしめるにしても、それはあなたの決めることだ。

おれが決めることは、ひたすらおれが何を書くかということだけ。そして、それが独りよがりにならないためには、おれの気魄が受け皿になり、読み手ともども、そこに文学の魂が呼び込まれなくてはならないということだつた。

そのことのどこが「冷淡」なのか。

「他者」が発見され、その他者を認めない・よろこばないということでは、けつぎよく元のナルシシズムに戻つてしまふだろう。だから他者は認められねばならず、他者は保たれねばならない。

それは当たり前として、「他者」というと、ここでなぜか多くの人はわざとらしく、「他人は他人だからね」と安直な冷淡さを気取り出してしまふ。なぜそんなわざとらしい陳腐な挙動を探るのか。

その理由は、逆に子供じみて単純なことだ。

つまりあなたは、自分が侵略・コントロールできない「他者」によつて、

とはつきり言わることを恐れているのだ。

「キモい」  
「ダサい」  
「寒っぷ」  
「痛い」

「才能ない」  
「要らない」  
「みつともない」

「恥ずかしい」  
「醜い」

「親の顔が見たい」  
「友達いなさそう」

「こんなふうにだけはなりたくない」  
「他者は他者なので、他者はすべてを思つたとおりに思うべきだ。そして、悪意や加害の意図がないかぎり、他者は自分の言いたいことを言うべきだ。

となると、あなたのすべては、こころのままに失笑され、百パー센ト鼻で笑われてしまうかもしれない。

それはそうだろう。  
「ザコ」というのはそういうものではないか。すべての人から鼻で笑われてこそザコだろう。

あなたは自分で自分のことを、大きくは見積もつておらず、それなりに自分が「ザコ」ということも、独りかぎりでは冷静に認めているところがあると思う。

ところが、あなたの覚悟している自分の小ささというのは、じつさいに他者の前に白昼堂々、自分自身を陳列し、白い眼で見られながら、「ぜんぜん面白くない、というか、見苦しいですね。ダサい。努力は認めなんですが笑、すべてが偽物というか、陳腐というか、これはとても

付き合いきれないですよ」

と言わることまでを想定してのものではない、ということが多いものだ。

だがおれがやっていること（やつてきたこと）は、それを覚悟するのが基本のことというか、それが始まりの土台というものだったので、これについては「他者とはそういうものだろう」としか言えない。

他者の中で自分をやつしていくというのはそういうものだ。

おれには何の社会的権威もない。おれは大学教授ではないし何かの受賞者ではないし何か芸事の家柄に連なる者でもない。

おれは常に、百パーセント、

「何こいつ」

と他人からキモがられうるという、そういう地点にばかり立つてきた。

おれの場合は、あなたから見ても、それが「当たり前」だろう。

今だつてそうだ。  
だから、「何こいつ」と言われたら、おれ自身、「何なんでしょうねこいつ」と、同じキモさを思わなくはない。

「何こいつ」と言われたら、「もし例外が起つたら」ということを追究しつづけ、おれはいま、「魂を呼び込む」というのがそれだけいう話をしているのだ。

もちろん、それが成り立つていなければ、そのキモさは倍増アンド倍増してしまうけれども。

こんにちの環境は、各種の當為についてまつたく有利な雰囲気・文化状況とは言えないが、そこを四の五の言つてもあまり意味がない。

魂が呼び込めば何かになるだろうし、呼び込めなければ「何これ」とキモがられて笑われて終わりだろう。

おれは二十年も前からずつとそこに立っているのだから、逆にフェアに、そのことにウソをつかずに申し上げるしかない。

おれは他者におれの書き話しを読ませている。

おれがやっているのは、いつのまにか、書き話しだけではなくなつてしまつたけれども。

そのすべて経験に立つて、当たり前のことを言うことができる。

他者は、自分とは断絶されたものだ。

断絶されていたものを、さびしがり、幼児的につなごうとすると、侵略になる。

侵略して、入り込み、内部から支配し、コントロールしようとする。

それに成功するとキューンとなる。

それは定義レベルで他者の否定だ。

コントロールできない他者なんか要らない。わたしの言うことをきいてくれる存在だけでいい。それが真実、というのがナルシシズムの自白だ。

このナルシシズムを放棄し、断絶した定義どおりの「他者」を目の前に置くとき、われわれは「冷淡を氣取る」というつまらない態度に終始するしかないのか。

そうではない方法はあるだろうか。

そうではないものを、ふだんは言わない言い方でいうと、愛と呼ぶ。きっと、英語圏で言われる love というほどには、愛という語は、使用を控えられている。

控えられているということとは、大事にされているということかもしれないし、ないがしろにされているということかもしれない。わからない。最重要のことばは濫(みだ)りに発するべきではないという直観もある。真相は不明だ。

ともあれ、愛というのは、ここでは簡単だ。  
実現は容易でないが説明は簡単だ。

他者と、断絶しているのに、通じるものがあるということだ。

他者に、何もされていないのに、迫つてくるものがあるということだ。

断絶されているのに通じるとか、何もされていないのに迫つてくると  
いうのはどういうことか。

だからそれが、「魂を呼び込んでいる」ということだ。

あなたが読んでいる、この書き話しの文章から、あなたが聞き取つて  
いる声は、じつはおれからあなたへのものではない。

この場合、もはや何を「おれ」と呼ぶかの問題になつてくるのだが、と  
にかく一般的な意味においての、ボクからキミへのものではない。

おれの気魄が、この書き話しという作品になり、これが受け皿になつ  
て、文学（その他）の魂を呼びこんでいるのだ。

あなたはその呼びこまれた魂を体験しているのだ。

あなたが聞き取つていてる声はそれだし、あなたに迫つて来ているもの  
もそれだ。

本当はあなたのこころのほうがそれに向かつて行つてているのだが、そ  
こまでの説明はまた別ジャンルのことになるので差し控えよう。

おれの話があなたに聞こえている功績はおれにはない。

おれに功績は一ミリもない。

おれがおれの話をあなたに届ける必要はないのだ。

おれがそんなことに鼻息を荒くしなくても、どうやら何か、もつと上  
等で祝福に満ちたシステムがある。

おれは、あなたに侵略を仕掛け、あなたの内部に侵入し、内部からあ  
なたを支配・コントロールする、なんてことをしなくてもいい。

そんなことをしなくても、あなたの中枢に直接「通じる」方法がある  
からだ。

その方法があるから、何もガバってあなたに侵略を仕掛ける必要が  
ないということ。

あなたはおれにとつて他者のままでいい。

他者のままで中枢に通じるから。  
むしろ他者が発見されなければ、おれはこの方法というか、現象を發  
見できなかつた。

聖書には、次のように書かれている。

こういうことについて、聖書がアテになるのかどうか、おれは知らな  
いが、書かれてあることはおれの発見したことにそつくり当てはまつて  
いる。

詳しいことが知りたい人は専門家に聞いてくれ、おれは宗教にはかか  
わらない。

いわく、

「まず、汝の主たる神を愛し、次に、汝の隣人を、汝のごとく愛しなさ  
い」

聖書にはさしあたり、「隣人にあなたの言うことをきかせて支配し、あ  
なたはキューンとなりなさい、それつて感動だよね」とは書かれていな  
い。

おれは、おれの隣人に向け、気魄を地べたに這わせ、それを隣人とも  
どもの受け皿とする。

何の受け皿かはわからない。

けれども、決まつて、ちゃんと祈つているところの魂が呼び込まれる。

そうしたら、おれが何かをしなくても、隣人は呼びこまれた魂を体験  
する。

もちろん隣人が熱烈拒絶したら話は別だ。

熱烈拒絶したら魂の呼び込みは成立しない。

それはおれが決めることではなく隣人が決めることだから、それにつ  
いては何もない。

というわけで、話は最初のところに戻つてくるのだ。

魂を呼びこむということ。

それは大人の出来ることであって、幼児の出来ることではない。

人の苦悩なんてけつきよくこの一点に尽きている。

人の苦悩とは、魂が呼び込まれないということの、みじめさと恥ずかしさだ（西洋では「罪」だ）。

ナルシシストは誤解をしている。

ナルシシストにはどう見えているのか。

ナルシシストには、おれが「気持ちのままを世界にぶつ込み、表現し、コミュニケーションしている」というふうに見えているのだ。

幼児からの視点としては、そのようにしか見えないのはしようがない。けれども実年齢としてはもう誰も幼児ではないのだ、そろそろ寝言も差し止めることにしよう。

おれのやっていることは、みずからの気魄を受け皿にすることだ。ナルシシストは、逆、世界を自分の気持ちの受け皿にしようとしている。

発想が逆、受け皿があべこべだ。

おれのやっていることは、他者の中枢に通じるが、それは呼びこまれる魂のはたらきであって、「通じる」ということにおれの功績は一ミリもない。

せいぜい、おれはその魂の営為の「仕手」ではどうやらある、というだけだ。

ナルシシストは、同じことを、他者への侵略、支配・コントロールで出 来ると思っている。

それが感動ですよね、と思っている。

本当は快感でしかなくせに。

ナルシシストは、心理的成長のていどとして、本当にそういう発想しか知らないのだからしようがない。

おれがおれの方法で百の声を通じせしめたとき、ナルシシストはナルシシストの方法で同じように百の声を通じせしめることができると思つて いる。

本当に、思つて いる。

しようがないのだ。

おれが魂を呼びこんだ代わりに、同量、ナルシシストは自分の気持ちをぶつ込めば、それで同等の声の通じが得られると思つて いる。

精神的発達のていどとして、本当に、おれが「魂を呼び込んでいる」ということが六歳児には見えないので、ナルシシストはナルシシストの方法を採る。そして、それがおれの方法とはまるで違うということ、結果としてもたらされているものもまったく違うということが、わからないまま暴れつづける。

むかし、ある国のある地方の人々が、金物屋で買った蛇口を壁に押し込み、

「水が出ないぞ！」

と次々にクレームを言つてきたということがあつたらしい。

びっくりする話だ。

蛇口はただの末端機構だ。

水道管や上水道、水源や浄化槽のインフラに接続していなければ、蛇口から水が出るわけがない。

ただの土壁に、蛇口を押し込み、それで水が出てきたら、そっちのほうが物理的に大問題だ。

でもそのことも、三歳児なら、わからなくておかしくない。

三歳児は、記号的に、蛇口をひねれば水が出るものだと思つて いるかも知れない。

精神的発達のていどとして、三歳児ならそれはしようがないことだ。おれの方法は、みずからの気魄を地べたに這わせて受け皿とし、そこ

に魂を呼びこむという方法だ。

ナルシシストは、自分の気持ちを世界にぶつ込むという方法で、

「同じ結果が出ないぞ！」

とクレームを言っている。

蛇口から水が出ないとクレームを言つてきた人たちに向けて、「まずインフラをしつらえないと、水が出るわけがありません」と説明したらどうなるだろうか。

説明されていることは、わかるような気がする、「が」、

「そんなことはどうでもいいのだ！ 水が出るようになら、われわれには水が必要なんだ」と無茶を言い出してもおかしくない。

ナルシシストは、自分の「キューン」という無上の快感を知つており、それを「感動ですね」と確信しているから、まさか自分の何かが誤つていて、自分が六歳児の誤解の中を生きているとは思っていない。ナルシシストは根本的に、何であれ自分はまず「出来る」と思つてゐるものだ。

自分が六歳児ということを知らず、世界には六歳児でない大人もいるということを知りようがないので、ナルシシストは、ほかの誰かがやつていることは、コツさえ教われば自分も近日中に出ると本当に思つてゐる。

けれども、ナルシシストがそう信じたとしても、じつさいのこととしては、大人の示しうる実作・実演・実物を提出することはできない。

ナルシシストが、幼児であつて大人ではないということ、魂を呼び込むというようなことは幼児には取り扱えないということから、いつまでたつても「出来ない」ということがつづく。

そのことは、ナルシシストにとつてはきわめて不快なことで、追い詰められ、やがては未分化感情の激発に至る。

いいかげんこの話にも飽きてきたので、ナルシシズムは克服されるべきだ。

ナルシシズムを克服するはどういう手続きになるか。

いつまでも「が」を繰り返すことを発見せよ。

まるで体内物質を生産するように、自然かつ強制的にその「が」は、ナルシシストの体内に湧いてくる。

なぜそのような、「が」の生産が繰り返されるかというと、自分を特別だと思っているからだ。

そして、じつさいには特別ではないので、結果はまともには伴わず、「生きにくい」と感じ、当人の感覚としてはさまざまに、みじめな憂き目にあわされている。

そのみじめな憂き目について、ナルシシストはひとつひとつ「我慢」をしていて、客観的に見たらめちゃくちゃな話だ、「我慢」するようなことはどこにもない。

だがナルシシストは快感原則にしたがつてしか挙動できないので、どう「我慢」を離れようとしても、けつときよく「キューン」と「我慢激怒」の往復しか運動の軸がない。

閉塞しているこの構造の中から、どうやって脱するのか。すべては一点に掛かっている。

「他者」の発見だ。

他者は誰だつて日常的に知つてゐるものに思える。

それはウソだ。

「他者」は、定義レベルできつちり「発見」されるまで、まともに存在しない。

他者が発見されば、これまで「我慢」と言つていた、ナゾの濃縮ウランのような自己都合沈殿物も、馬鹿げたものとしてもう発生しなくなる。

我慢を我慢するのではなく、我慢じたいが発生しなくなるのだ。

とりあえずそこまでナルシシズムの一次克服だらう。

そこまで、一般的にはじゅうぶんなのかもしれない。

他人は他人だから、という、すぐ打ち切られる少年マンガ連載のセリフのような「冷淡さ」、それに耽りつつ、それでも他者を他者として発見したのではあるならば、それでもう一般的にはじゅうぶんな心理的成长なのかも知れない。

おれはこのとおり、冷淡ではないけれども。

愛という現象があり、呼び込まれた魂がもたらすその祝福の中枢現象

が愛だが、その中枢現象について、おれの功績は一ミリも無い。

なんとも無力なことだが、愛というなら、愛という現象の主（あるじ）はおれではなく、その現象の主じたいがどこかにどのようにかして存在している。

おれはせいぜい、必死こけば、それを呼び込むことはできる、と言つておるだけの俗人にすぎない。

そして、それを呼び込む気魄のありようは、どんな形を取るにせよ、作品たるか、少なくとも作品性を帶びていると、おれは経験的に思う。

だからここに書き話しているこれは、題するなら、ナルシシズムと作品の読本ということなのだ。おれは自分がこれだけ言うからには、実作を示さないでは認められようもないだろう。

感情に振り回されている自分が、やつぱり「（ ）」人なのだと、ナルシシストは確信する

あなたは生後三ヶ月の赤子が「ブチギレ」しているのを見たことはないはずだ。

生後三ヶ月の赤子は、気ままに泣いたりぐずつたりはしゃいだりするけれども、何かにブチギレたり、納得したり、懐かしんだり、感慨を覚えたりはしない。

感情の多くは、後天的に分化・獲得されるものであり、生まれつき具わっているものではないのだ。

人は、生まれつきには、ふたつの感情軸しか持つていないと言われている。

ひとつには「快・不快」の軸と、もうひとつには「落ち着いている・興奮している」の軸だ。

赤子は、まるで  $x$   $y$  平面の象限のように、 $2 \times 2$  の、単純な感情しか持っていない。

快×落ちている..ごきげん、おだやか

快×興奮している..キヤツキヤ、はしゃいでいる

不快×落ちている..ぐずつている

不快×興奮している..泣き叫んでいる

母親が赤子を放つたらかせば、赤子はやがて泣き出すだろう。そのた

びに母親は、「はいはい、お腹空いたね」「さびしかつたね」「うんち出たかな」と言うが、赤子の側にはまだそのような複雑な感情分化は起こっていない。すべて「不快・興奮している」というだけだ。もちろんそのことに赤子の咎（とが）はまったくない。

赤子は「さびしい」という理由では泣かないのだ。もちろん、おしゃぶりを吸わせたり「ガラガラ」を持たせたり、抱っこしたりにぎやかなところに連れて行つたりすれば、赤子は比較的泣かないでの、結果的に「さびしいと泣く」ということはあるのだが、赤子のほうはそれを「さびしい」とは思っていない。

赤子はまさか「きょうは寂（さび）しい」「きのうは淋（さび）しかつた」などと使い分けて泣いているわけではない。そんな使い分け（分化）に至つている赤子は泣かないだろう。

赤子は「さびしい」という感情を捉えているわけではなく、ただそれが快・不快でいえば不快なのであって、その不快の訴えとして泣いているのだ。

赤子は、おむつの中が水濡れしても不快で泣くし、お腹が空いても不快で泣く。

さびしくても不快で泣くのだ。

大人の場合はどうだろうか。

大人は、おむつの中が水濡れして不快でも、それで泣きわめいたりはしない。

（認知症の場合はどうなのか、おれには知識や経験がないのでわからない）

お腹が空いても、「腹が減ったわ！」と言つて泣き出したりはしない。

それは大人だから当然のことだ。

……。

本当にそうだろうか？

あなたの母親は、子供たちが自立して、お盆にも帰つてこなくなつたところで、さびしがつて泣くということがありうるのではないだろうか。

あるいは、汗をかいてシャツが濡れ、

「ああっ、ベトベトして気持ち悪い！」

と言って、ズチギレ様相を示す可能性のある人が、あなたの知り合いの中にひとりぐらいはいるのではないだろうか。

お腹が空くと「イライラ」しがちな人が、あなたの知り合いにひとりやふたりはいないだろうか。

感情の分化と発達は、後天的に得られるものであつて、これもまた心理的成長のひとつだから、万人が同じようにその成長を得てはいない。

さびしくて、シャツが水濡れして、お腹が減つていたら、それらについての感情がごちゃ混ぜになり、

「不快！ 不快！ 不快！」

と泣いたりわめいたりする大人はじゅうぶんに存在しうる。

「あーもう！ 無理！ キモい！ ウザい！ ムカつく！ もう死にたい！ 気が狂いそう！」

泣き声や体躯が赤子のそれではないというだけだ。

多くの人はきっと、感情の「分化」なんてことは、これまでに一度も考えたことがないのではないだろうか。

このことも、あなたの心理的成長と深くつながつていて。

たとえば、あなたの実母はともかくとして、誰とは知らない高齢に近いおばさんが、

「お盆のにもう、子供たちが帰つてこなくなつてねえ」と言い、泣いていたとする。

あなたはおそらく、それを見るとすなおに、

「かわいそう」

と感じるだろう。

そしてあなた自身、そうして「かわいそう」と感じることについて、あてはめうことばを持つていないのでないだろうか。

さしあたりおれがそれについて、

「人情、というやつか」

と言えば、あなたは、

「そう」

と肯うだろう。

あなたは感情の分化について知らない。

そして、それについて知らないということが、あなたの背骨たる経験量として危なつかしさを漂わせているということも、あなたは知らない。

子供たちが帰つてこなくなり、「さびしい」と言って泣いていたおばさんは、翌日、思いがけない人たちからカラオケパーティに誘われた。

そうすると、意外に意気投合したみたいで、おばさんから送られてきた動画は、年甲斐もなくピースサインを示しており、おばさんはカラオケの爆音の中でカララレンズに向かい、「イエーアイ！」と大声を発していった。

さびしさは癒されたようだ、めでたしめでたし。

人情としてはここで打ち切りにしてよいと思うが、精神的な発達という視点では、あなたとしては少々の疑義が残るはず。

子供たちが帰つてこないということがさびしかったのではなかつたのか。

おばさんは、来週もカラオケパーティに誘われたとのことで、あたらしくお出かけ用の服を買ひに行くといつて、デパートに出かけていった。それが悪いと言つてはいるのではない。むしろ楽しそうで何よりだ、友

人が得られるのはすばらしいことだ。

ただ先日の、さびしいと言つて泣いていたあれは何だつたのかといふ話だ。

さびしい、と言つて、仮にここで、彼女のお子さんたちは、事故や病気で、みんな若いうちに他界していたとする。

それはそれでさびしいことだ。

亡くなってしまったのであれば、靈的なことを除けば、お子さんたちは母親のところに帰省してこないだろう。

しかしその場合、そのおばさんは、お盆に子供たちが帰つてこないということで泣くだろうか。

帰つてこない、という意味では同じだが、彼女はおそらく、その場合は泣かないようと思われる。

帰つてこないというか、帰つてきようがないので帰つてこないのだが、なぜその場合はおばさんは泣かないのか。

このおばさんの感情について、あなたは、じゅうぶんにあてはめて説明できるだけの「ことば」を持っていないかもしれない。

もちろんただの推測なので、誤つていたら申し訳ない。

けれどもこうしたことは、当人が心理的成長・精神的発達を得てきていなかぎり、

「んー？ よくわからないです」

になるものだ。

よくわからない、のではなく、本当には、「そこまで考えたことがない」「そんな領域にまで精神が発達していない」のだ。

ここで考えうる、おばさんの感情について、おれがあるべきことばをあてはめて説明してみる。

もちろんどんな感情であるかは、当人のことなので、あくまで「考えうる」ものの列举にすぎないけれども。

まず、お子さんたちが他界していた場合はきっと泣かなかつただろうということは、逆にいま、お子さんたちは存命で、「来ようと思つたら来られるのに」ということ、「来られるのに来てくれない」ということが、おばさんの感情に深く刺さつているのではないかと推定できる。

その場合のおばさんの感情は、申し訳ないが、「さびしい」というよりは「みじめ」だ。

加えて、お子さんたちはまだ若く、それぞれ都会に出て活躍し、にぎやかに遊んでいるかもしれない。

その若さと、にぎやかさと、楽しさと、都会での充実と、自分にはなかつた人生が、「妬（ねた）ましい」ということもありうる。

その場合は「嫉妬」だ。

妬ましさ、嫉妬が混入していたということは、「ひがみ」の感情、あるいは怒りや憤（いきどお）りしさなどの感情もあつたかもしれないし、さらには自分も華やかにやりたいという、あてどない空想・願望の感情もあつたかもしれない。

自分も華やかにやりたいという願望・欲望があつて、それを求めていふのに得られないということがあれば、悲しみの感情はあつただろうし、求不得苦という苦しみの感情もあつただろう。

あるいは、お盆でお子さんたちがどうこうという以前に、おばさん自身の日々が、もう年齢もあり、ひそやかなもので、

「あとはもう、このまま年を取つて、死んでいくだけなのかしら」という思いもあつたかもしれない。

だとしたら、その感情は「空漠」と「虚しさ」だ。

さらには、その「死んでいくだけ」ということに、ゾッとする感情も覚えていたかもしれない。

その場合、その感情はさびしさではなく直接の「恐怖」だ。その恐怖には、規模のわからない「不安」も混ざつていたかもしれない。

おばさんが覚えていたさびしさ、というよりはみじめさは、自分がお子さんたちにいまいち好かれていないということ、疎まれてさえいるかもしれないということ、それに加えて、お子さんたちを含めて全体的に、そもそも自分が人から関心を向けてもらえないということにあつたかもしれない。

おばさんは、あまり人付き合いが上手でなく、気の利かないところがあり、友人らしい友人を得ずにここまで来たということもありうる。だとすると、そのみじめさには、劣等感やパニックなどの感情も含まれているだろう。

また、自分がそうしたみじめさの中にあることについて、「言い訳がましさ」というような感情のはたらきを持つていてもおかしくない。

お子さんたちを含め、誰も自分のことを相手してくれないということについて、「どうせわたしなんか」という自己卑下の感情、あるいは「世の中なんてしょせんそんなものよね」という厭世の感情も持つていたかもしれない。

カラオケパーティで盛り上がつたということは、お歌が上手であろうが下手であろうが、マイクを持てば一定ていど盛り上がつて昂つてしまふという、自己顕示欲求の感情もあつたのかもしれない。

「イエーイ！」という動画が撮影されるということ、またそれが送られてくるということは、思いがけずおばさんには遊蕩という気質あるいは抑圧されてきたその感情があるのかもしれない、お酒を飲んで騒げば気が大きくなる、そして自己主張をしたくなるという感情もあるのかもしれない。またその自己主張に伴つては、どうせん「快感」という感情も得られたに違いない。

このあたりで、感情の可能性の列挙はひとまず済ませたということにしようと思うが、どうだろうか、あなたがこのおばさんに向けていた先ほどまでの共感性の感情は、大きく変化したのではないだろうか。

人情といえば、これらのことはずべて人情と言いうるだろうし、総じて言えばそれは「さびしい」に当てはまるだろうが、あなたの捉えていたところのものは大きく変化していったはず。

あなたは先ほどまで泣いているおばさんを「かわいそう」と思つていたのだ。

お盆なのに子供たちが帰つてこなくなつた、とおばさんが泣く。

かわいそう、とあなたはすなおに思つた。

「人情、というやつか」

「そう」

さきほどまで覚えていた、おばさんへの感情は、あなたの内部でずいぶん変化してしまつたはず。

そして同時に、このおばさんの「こころ」あるいは「心理」についての手触りは、あなたにとつて先ほどよりずつと生々しいものになつたのではないか。

あなたはいま現在のほうが、このおばさんのことを「よく知つてている」はずだし、おばさんのことと「よくわかる」はずだ。

ではさきほどまであなたが覚えていた「かわいそう」という強い感情は何だったのだろうか。

精神的発達のていど問題として、^^感情が未分化vvということがあら。

わかりやすく言うと、おばさんは赤子のように、泣きわめいていたのだ。

もちろん赤子のそれとまったく同一に泣きわめいていたわけではない。

赤子においては感情が未分化なのは当たり前だ。

赤子はただ、不快という单一の感情において泣く。

おばさんも同じだ。

さびしいといえばさびしいし、みじめといえばみじめ、悲しみといえ

ば悲しみ、苦しみといえば苦しみ、虚しいといえば虚しい、恐怖といえば恐怖、不安といえば不安、自己卑下といえば自己卑下、厭世といえば厭世。

それらの感情が、分化されておらず、未分化のまま一緒くたにされ、「とにかくこんなの、つらいです、耐えられない、厭（いや）です」と泣いていた。

何かしらのネガティブな感情・受容しがたい否定的な感情でおばさんが泣いていたのはあきらかだが、もう高齢者に近いおばさんに、

「何の感情で、どうあつてほしいとお望みなのですか」と訊いても、おばさんは、

「そんなの、わからないです。ただ、お盆だからね、お盆ぐらいはみんな実家にね」と泣き声でいう。

「わからない」というまま、とにかく自分の感情をなぐさめてもらいたくて、お子さんたちを「人情」的に、またお盆という風習的に、実家へ呼びつけようとしていた。

あなたは、自分の経験と、自分のことばを総動員して、このおばさんの感情をじゅうぶんに「分化」して捉えることができると自負できるだろうか。

そのことはちよつと、むつかしいです、とあなたは言うのではなかろうかと思う。

これらのことは、いまこの場でウンウン唸つて考えて、「わかった」となるたぐいのことではない。

自分自身のこと、またこれまでの周囲のさまざまのことについて、たくさん考えてきて、いくつもの感情の分化をみずからに発見・獲得してきたというタフで直接の経験がないと、にわかに手触りのある感情の分化なんて出来ない。

子猫を見て「かわいい」、ネイルを見て「超かわいい」、イケメンを見て「尊い」、上司に説教されて「ウザい」、月曜日に「ダルい」、知り合いを見て「無理」、音楽を聴いて「エモい」、そんな粗雑な感情の放置をつづけてきて、きゅうに感情の分化が達者になるわけがない。

現代人は特に、子猫を見て「かわいすぎてヤバい」、ネイルを見て「映えすぎてヤバい」、イケメンを見て「エロすぎてヤバい」、説教されて「ウザすぎてヤバい」、月曜日に「ダルすぎてヤバい」、知り合いを見て「無理すぎてヤバい」、音楽を聴いて「エモすぎてヤバい」と、とにかく「ヤバい」しか言わない。

赤子が泣くのと同じだ。

ヤバい、ヤバい、と泣いているのと同じ状態にある。

悪口で言っているのではなく、本当のこととしてやむを得ず言つているのだ。

「快でヤバい」「不快でヤバい」と言つてゐるだけしかない。

感情の未分化について、われわれはいつまでもなんとか怒鳴り声で押し切ろうとしているが、そんなことがどこまで通用するものやら、どこまでいつてもそれは冷静に見ればただの「未発達」にすぎない。

六歳児なら何もかもが「ヤバい」のまま未分化でよいかもしれないが、その六歳児のまま顔つきは中年の面持ちとなつてくると、やはりわれわれはそこに酸鼻なものを見い出していくのだ。

本来、精神の発達は、感情の分化と同道する。

感情の分化は、それじたいが心理的成長の大きなひとつでもあるといふことだ。

先ほどのおばさんが、仮に、何かに目覚めたように、みずから感情に徹底的に向き合い、何の知恵あってか、まるで天啓を受け続けたかのよう、感情の分化に成功していくたとする。するとおばさんはみずからについて次のように述懐するだろう。

「わたくしは年甲斐もなく、お慈悲のように厚意で誘つていただいたカラオケパーティではしゃがせてもらい、ありがたくも人から構つてもらえるということ、まるで気の置けない知己のように交歓してもらえるといふことに、これまでみじめだったうらさびしさをおおいに慰められました。そこでわたくしは、酒精もあつたにせよみつともなく気を大きくし、それに乗じて、イエーイと声を張つた醜態の動画まで撮影し、まるで充実している自分を若者ぶつて誇示するかのように、それを知人に送りつけましたのです。振り返れば、自分が慣れない快感に酔いしれ溺れていたということを認めざるを得ないところです。そのことの背後には、これまでずっと、叶うことならそのように人に慕われる者でありたかった、華やかに人気者のひとりでありたかったという、願望があり、それが無作法にも弾けて飛び出したのだと思います。その、人に慕われたいという不相応の願望は、これまで行き場をなくして、立場として最も付き合わせやすい子供たちに向けられてもおりました。彼らはわたくしの子なのですから、母であるわたしを慕つて当然だと、強弁できる正当性があるようと思ひ込み、その思い込まれた正当性の強さにすがつたのです。これまで華やかなことがなかつた自分が、このまま枯死していくだけなのだろうかということが現実感を伴つて毎夜のように迫つてきますと、恐怖もあり、不安もあり、またすべてがあまりにもみじめで、そんなこと信じたくないというやたらな拒絶感に苛まれたのです。わたくしは何とも、さびしい人でしたね。そのことを引き受け切れず、せつかくのご厚意の中で醜態をさらしてしまい、たくさんの人には厄介な思いをさせてしましました。今となっておわびの申し上げようもありませんが、精一杯、愧（は）じております」

おばさんが突如、そこまでの感情の分化に至つたとする。感情の分化が得られたとしても、おばさんを取り巻く環境は何ら変化していない。

けれどもあなたはこの述懐をもつて、おばさんを軽蔑するだろうか。

心理的な成長など存在しない、関係ない、おばさんはただのおばさん、

とあなたは思うだろうか。

わたしにはこのおばさんは心理的に長足の進歩を得たように思える。

このおばさんは来年のお盆にも、「子供たちが帰つてこない」といつて

メソメソ泣くだろうか。

あなたが先ほど「人情」と言つて捉えたところのおばさんと、いま、感

情の分化を得て心理的に成長したおばさんとで、あなたが「こころある  
人」と体験するはどちらのおばさんだろうか。

仮に、後者、成長したおばさんのほうが「こころある人」だった場合、  
こころある人のほうが感情に振り回されないのはなぜなのだろう?

ナルシシストは六歳児なので、感情のほとんどが未分化だ。

感情が未分化なので、感情に振り回される。

そして当人はそれを「人情」のたぐいだと思つてゐる。

そのとき、誰よりも自分こそが、「こころある」者だと思つてゐる。

人が、自分の言うことをきいてくれると、ナルシシストは「キューン」  
となる。

キューンとなるということは、「快」だ。

快ということは、「好き」で、「美」で、「やさしさ」で、「正義」で、「真

実」で、「救済」だ。

なぜ?

なぜと言われても、未分化だからだ。

快に属するものはすべて一緒くたにされている。

逆に、人が、自分の言うことをきいてくれなかつたらどうなるか。

それは「不快」だ。

それが不快ということは、「悪」だ。不快ということは、「誤り」で、「怒

り」で、「憎悪」で、「邪悪」で、「軽蔑」で、「愚劣」で、「断罪」だ。

不快もなんとか「我慢」するけれど、その我慢はただの不快の後回し  
貯蔵タンクでしかない。

不快に属するものもすべて一緒くたにされている。

分化されず、一緒にされたまま、不明の混合情動となつた感情に  
振り回されることになる。

そのことは、当人にとっては、誰よりも「こころある」と信じられる状  
態だ。

「好きなんだからしようがないじゃん!」

「マジ無理、死ねとしか思えない」

「なんですか、そうやって、人のこころを平氣で踏みにじることができ  
んの?」

「あたしたちってスゴくない!?」

感情が未分化というのはそういうことだ。

快なら快で暴走するだけ、不快なら不快で爆発するだけ。

成人男性が、おっぱいを揺らすアイドル女性を見て、快を覚える。

それは快だから、「好き」で、「かわいい」で、「天使」で、「尊く」、「応  
援されるべき」で、「がんばっている」、「純粋で」、「まじめ」、「性格いい」。  
おっぱいが揺らされただけなのにだ。

けれども、冗談でなく、感情が未分化なので、

「ゆさゆさゆさゆさ」

「好き好き好き好き」

になる。

アホの極致という可能性はじゅうぶんにあり得る。

それを当人は、

「本気で彼女に恋をした。こんなに人を好きになつたのは初めて。この

感情を、彼女がくれた。いつも彼女に元気をもらつてゐる」

と大真面目に言つてゐる。

そのとき当人は本当に、自分こそが「こころある」と確信しているのだ。

成人女性にとつては、イケメンの顔面が「快」だし、高級なレストランが「快」で、自分をちやほやしてくれるのが「快」だ。

快だから、それは「正義」で、それは「恋」で、それは「愛」で、それは「青春」で、それは「ピュア」で、それは「大切」で、それは「けがれおらず」、それは「聖なるもの」だ。

ところが、彼が別の女性をちやほやしたら、それはとたんに「不快」だ。

不快だから、それは「邪惡」で、それは「嫌惡」で、それは「憎惡」で、それは「惡夢」で、それは「汚物」で、それは「ゴミ」で、それは「軽蔑」で、それは「無理」で、それは「サイテーなもの」だ。

この成人女性が、

「そろそろ婚活に向き合いたい」

と言つており、さきほどの成人男性が、

「おれ、彼女ほしんだよね」

と言つてゐるのだ。

何かがどうにかなつて、こうしたふたりが「うまくいく」なんてこと

がありうるのだろうか。

数十年ぶんと、いうレベルで、心理的成長・精神的発達が遅れているといふのは、のつびきならずそういうことなのだ。

ナルシシストは、感情が未分化で、その不明の混合情動となつた感情に振り回されている。

そして、そうして感情に振り回されるということをもつて、誰よりも自分が「こころある」と確信する。いまこのときもそうだ。

ナルシシストがおれの書き話を聞いていたら、ナルシシストは最終

的に、おれのことをこころある人とは思わないし、そのように認めもない。

ナルシシストにとつてこころある人とは、誰よりも自分、特別な自分だ。

感情に振り回されている自分こそが、やつぱりこころある人なのだと、ナルシシストはしだいに確信を深めていく。ナルシシストは感情の分化には向かわない。

このこともまたナルシシズムの快感原則だと捉えてよい。

感情に振り回され、誰よりも「こころある」真実の自分を確信するとき、そのことはキューンと胸に音を立て、自分にとつて否定のしようがない至上の快感をもたらすのだ。

ナルシシストは、自己愛の権化だ。

それは幼児期においてはしようがない。問題はやはり、心理的成長は、生理的成長のようには、自動的に得られないかないとということ。

百六歳になつても、心理的には六歳のまま、ということがめずらしくもなくありうる。

それでは敬老の精神も撤廃すべきだろう。じつさいには六歳なのだから。

百年間、何をしてきたかというと、何もしてきていない。

何もしてきていない、エエッ？

そんなことはめずらしくないのだ。「ふつう」だ。

ナルシシストは自己愛の権化で、自分のことが好きすぎ、いつも調子

コイでいる、たちの悪いやつ、というイメージがある。

たしかにナルシシズムとしてそういうことが成り立っている時期もある。

若いうちや、何かしらの成功や強みにいるあいだ、あるいはその成功や強みを錯覚しているあいだには、いわゆる「イケイケ」の、そういうナルシシズムもありうる。

けれどもじつさいの割合としては、そうしたイケイケタイプのナルシシストは少ない。

ナルシシストは、自己愛の権化だが、その自己愛というのは、イケイケというよりただ「自分への関心度ばかりが異様に高い」という形で現れてくる。

仮に、自分の同級生がオリンピック出場権を得たとしても、

「へーそうなんだ。超スゴいじやん」

ぐらいで、それよりは、

「ちょ！ マジで前髪切り過ぎたんだけど。何なのあの美容院。ヤバい、待つて待つて。これ明日学校行けないじやん」ということばかりに関心がいく。

このことはめずらしいことではない。

ナルシシストが、テーブルに足をひっかけて、高価なグラスを床に落として割つてしまつたとする。

そういうチヨンボをすると、ナルシシストは、

「あちやー！ やつちやつた」と反省する。

本人なりの、そういう反省をするが、大切にしていたグラスを失つた

人の気持ちということは、ナルシシストにはわからない。

自分の「やつちやつた」だけが百ばかり、誰かの「グラスが失われた」はゼロわからないのだ。

表面的には、反省しているように見えるし、謝罪しているように見えるだけに、見分けがつきづらくたちが悪い。

人の気持ちを考えないというより、「他人の気持ちを第一義に考える」というような高潔な能力を、彼の発達でいどに見込めるわけがないだろう」という状態だ。

六歳児というよりは三歳児ぐらいのことで、三歳児がグラスを割つてしまつたら、「ごめんなさい」と震えて言いつつも、まず「ガシャーン！」というショックで自分が泣いてしまうだろう。たいてい代わりに保護者が謝罪するはずだ。

大人になつても、彼のチヨンボは、代わりに先輩や上司が謝罪して回るはずで、そのことを、ナルシシストの当人は「おかしい」とは気づけない。

あちやー、やつちやつた、とばかり思つており、当人は本当に反省しているつもりで、当人は、「その真剣な反省だけで自分は百点だ！」となぜか自己肯定的なことを思つていたりもする。

まあ、こんにちでは、ヘンに落ち込まなくていい、というメリットの点もあるけれども。

根本的に、グラスを大切にしていた他者のことまではわからないので、ナルシシストにはそこまでの反省のしようがない。

ナルシシズムはこういうとき、奇妙な盛り上がり方をするのも特徴だ。チヨンボをやらかしたのだが、それでもいちおう、悪目立ちで人から注目され、一種の「時の人」にはなるわけで、そのことに対するテンションの昂りを抑えられなくなる。

信じがたいことだが、それでも彼にとつては、自分が人に注目されな

いよりはマシ、という感情があるのだ。

恋愛すると必ず喧嘩ばかりになる人にはこのパターンが多い。

派手に揉めて、派手に喧嘩すると、何はともあれ交際相手からの、憎悪混じりのきつい関心は自分に向くわけで、そうすると自分の自己中心性が満たされることがある。

喧嘩をして、喧嘩にまぎれてどぎついことを言えば、そのどぎつきで交際相手を侵略・支配コントロールできるということもあり、そのことにはやはり「キューン」という快感が得られる。その快感が得られることに比べれば、お互いに什器を投げつけあつたり罵詈雑言を投げつけあつたりというようなことは、「別にどうだっていいや」と思う人は少なくないのだ。

あるいは、世の中の半分以上の人気が知っているように、社会人の中に部下に厭味を言つたり、残業を押しつけたりで、支配コントロールの快感を味わうためだけに、毎日会社に出勤しているという人もいる。

仕事熱心でも何でもない。

ナルシシストだから快感原則でしか生きられないのに、小物すぎて、支配・コントロールというと会社で立場に乘じるしか方法がない。他に行くところもなくて、土曜日も日曜日も出勤し、デスクで若手と下請けをいじめるネタばかりを探している。

こうしたものは、周囲に実害があるし、特に立場の弱いものにしわよせがいくので、はつきりいつて世の中の汚物だ。

そうした人は、そうした行為やあなたの存在じたいが汚物ですと、はつきり言われたとしても、そのことをけつきよくやめられないだろう。どう言われても快感原則にしか動きようがない。

ある意味、徹底している。

途中からは逆に、ニヤニヤし始めたりさえする。

ナルシシズムというのはそういうものだ。

異常性に気づいたとしてもやめられないのだ。

病気ではないがじゅうぶんに狂人ではある。

ごまかしているうちは誰でも、「いくらなんでもそこまではならないですょ」と思えるのだが、誰だつて遅かれ早かれだ。誰のナルシシズムでも本質は変わらない。

なぜ自分で異常性に気づいても、ナルシシストはそれをやめられないのか。

快感原則でしか動けないからだ。

ナルシシストなのだから、自分のナルシシズムに向き合うなどという不快な方向へは進めない。

自分のナルシシズムに向き合おうとすると、何が不快なのだろうか。

ここで、まったく思いがけないテーマが出て来る。

ここでナルシシストは、

「自分が許せない」

ということに行き着くのだ。

んんん？

ちょっと待て、何の話だ。

何がどうなつて、そんな話になつたのだ。

自分が許せないといつて、そうじゃない、お前のことと許せないのは周囲の全員のほうだ。

なぜお前がとつぜん、「自分が許せない」というような、スピ魂マンガ風のことを言い出すのだ。

自己愛の権化のくせに、セリフがおかしいだろう。

自己愛の権化なんだから、あるべきセリフはあつかましく、「ボクはサイコー」であるべきだ。

「自分が許せない」というのはいくらなんでもおかしい。

ところがそうではない。

これこそまさに、ナルシシストが自己愛の権化だからなのだ。

ナルシシストは、自己愛の権化のために、へへちょっとでもケチのついた自分を、もう認められない▽▽のだ。

鉄オタの撮る鉄道写真と同じだ。

仄聞するところ、鉄オタの撮る鉄道写真というのは、構図や角度やタイミングが完璧でなくてはダメなのだそうだ。

そのことはよくよく考えると奇妙なことだ。

たとえば犬好きの人が、いろんな犬の写真を撮っていたとして、その人は犬の写真について、構図や角度やタイミングが完璧でなくては「ダメ」とは考えないだろう。

犬を愛しているので、つい犬の写真をパシャパシャ撮ってしまうというだけだと思うが、鉄オタの場合はそうではない。

鉄オタは、鉄道を、何かしらの形で偏愛しているのだろう。ちょっと、あまりに共感できない趣味なので、その偏愛がどういうものなのか、おれにはわからない。

写真に撮られる犬の横で、おれがピースサインでもしたら、写真を撮る人は「ははは」と笑うだけだろう。

鉄オタが鉄道写真を撮るところで、おれがピースサインで割り込みでもしたら、鉄オタはちょっと一般には知られていないような激怒の仕方をする。

なぜそのようになるのかは、知られていないが、とにかくそのようになる、ということはすでに一般に知られている。

やや気が引けるが、ナルシシストというのもこれに似ているところがある。

自己への偏愛と完璧主義があるので。

ちょっとでもケチがつくと「ダメ」。

当人にとっては激怒に値することになるのだ。

別にそれぐらい良いじやん、と言つても、当人にとっては「もうダメ、終わつた」「絶対に許せない」。

それはわれわれが、鉄オタの撮る写真に何か余計な看板でも映りこんだとして、「別にそれぐらい良いじやん」と言うのと同じなのだ。

鉄オタにとつては「もうダメ、終わつた」なのだろう。

だからナルシシストというのは、じつさいには、自分自身に対して「サイコー」とは思つておらず、「ダメ」と思つていることのほうがはるかに多い。

ちょっとでもケチがつけば「ダメ」なのに、じつさいにはケチがつくのは「ちょっと」どころではない。

先ほど会社のナルシシストおじさんは、はつきりとおれに「汚物」とまで言つてしまつた。

ナルシシストなんて、万人にどこか「キツいっす」と思われているに決まつていて。じつはナルシシストの多くは、自分のことを根底でめちゃくちゃ「ダメ」と思つていてのだ。

もちろん、自分のことだけがひたすらイケていると断じつづけるタイプもいるが、そちらのタイプはナルシシストというよりも、自己愛性パーソナリティ障害（自己愛性人格障害）という向きが強い。

自己愛性人格障害の人は、そこまで世の中に多くはないが、ナルシシストの人はめちゃくちゃ多い。

自己愛性人格障害の人は、本当に、自分についてのネガティブな情報は「耳に入らない」というような、特殊な偏りを示す人で、それは未発達ということではなく、人格の機能として「どこか壊れている」というようなことだ。

語弊があつて気が引けるが、障害、という診断名がついているのだから、そのように言うしかないだろう。

ナルシシズムは障害ではなく未発達だ。

ナルシシズムにおいては、人は自分のことを根底で「ダメ」と思つていることのほうがはるかに多い。

たとえば、学歴が大したことがない。

すると、「ダメ、終わっている」と、どこかで思つてている。

外見は、美貌ではまったくない。

そのことも、「ダメ、終わっている」と思つてている。

職歴や、仕事の能力も、いちおう人並みと思っているが、人並みでい

どということは、たいしたことがないということであつて、「ダメ、終わ

つてている」と思つてている。

これまでに、そこまで「活躍した」というようなことがない。

これまでに、あまりまともな恋愛経験がない。

友人は、いるにはいるが、きずながあるとまで言える親友がいたかといふと、そこまでの友人はいなかつた。

趣味でテニスをやつてているが、そんなに上手なわけでもない。

最近は髪が薄くなつてきた。

日焼けのあとに、少しあらが出て来てしまつた。

自分は美声ではない。

音感はあるがリズム感がない。

派手な服が年齢的に似合わなくなつてきた。

このことについては誰よりも詳しい、というような得意分野は持つていないし、何かの役に立つというような、目立つほどの特技は持つていない。

車の運転は、いちおうできるけれど、せわしない道路だと、乗り心地がどうこうということまでは、とてもじやないが気を配れない。

海外旅行をよくしてきたので、いちおう、日常会話ぐらいの英会話はできるが、ネイティブのように「ペラペラ」ではないので、ダメだ。

ああ、ぜんぜんダメだな。

終わつている。

そのようにナルシシストは思つてている。

ここに、まったく別のAさんを用意してみよう。

Aさんの学歴も大したことなく、Aさんの外見も美貌ではない。

Aさんの仕事の能力も、人並みでいどだ。

Aさんもこれまでに、目立つて「活躍した」というようなことは特にない。

このAさんについて、ナルシシストは、「ダメ」「終わつてている」とはまったく思わない。

なぜそう思わないか。

ナルシシストにとっては、Aさんのことなどどうでもいいからだ。

ナルシシストにとつては、Aさんはふつうの人なのだから、万事が「ふつう」でいいでしょ、思つていて。

ところが当人についてはそうではないのだ。

ナルシシストは、自己愛の権化で、自分は特別な存在だから、自分は

「ふつう」ではダメなのだ。

Aさんがふつうなのは、許せるし、「当たり前」と思うが、自分はそうではない。

自分がふつうだなんて、許せない。

自分がふつうで、やつていけるわけがない。

だからもう何もやつていくことはできない。

無理なんだよね。

このように、ナルシシストは、自分のことを多く「許せない」と思つているものだ。

自己卑下が、表面的には謙虚なふうにも見えるので、われわれはこのナルシシストを見落としてしまう。

彼は、Aさんのことは肯定的に言い、自分自身のことは否定的に言う。

それは謙虚さのあらわれではない。

自分だけは特別なんです、だから自分の場合はダメなんです、ということのあらわれであり、Aさんなんかは、「ふつうだからどうでもいいんです」ということのあらわれだ。

ナルシシストは、自己愛の権化なのに、自分のことを愛せない。

奇妙な矛盾だが、じつさいのナルシシストは、主流としてそういう形質だ。

自分の子供を偏愛する母親が、教育ママになつて、テストで百点を取つてこない我が子を愛さない、愛せない、というのと同じだ。

「○○ちゃん！ ママと一緒にあんなに勉強したのに、どうして七十点しか取つてこないの？ ママびっくりしちやう。次は、もっと出来るよね。ママ、大切な○○ちゃんのこと、とつても応援しているからね」

自己愛といつて、ナルシシストは、そもそもその「愛」という機能じたいが成熟しているわけではないので、自己愛というのもまともな愛ではありえず、実態としては「自己への執着」だ。

（余談だが、おそらくキリスト教などでは愛というと「まともな愛」のことが言われており、仏教では愛というとこの偏愛・執着のことが言われている）

ナルシシストは、自己愛の権化で、さらにはその愛はまともな愛ではなく、その自己愛は自己への偏愛、自己への執着だ。

ナルシシストは、まるで自分のことを、「能力者バトルに出て来る主人公」のようでなければ愛せないと思つていて、あるいはまるで自分のことを、「神話に出て来るヒロイン」のようでなければ認められない、と思つていてりする。

現実的にはそんなこと成り立ちようがないので、ナルシシストは自分のことを「ダメ」「終わっている」と思つてている。

それでいて、そうして自分のことを「ダメ」「終わっている」と言つながら、「そんなわたしのことを完璧に愛してくれる人」を厚かましく要求しており、その愛も完璧でなくてはならないと、本気で思つていて。

その愛は、完璧でないと許せない。

完璧なものなら認めるけれど、完璧なものでないならけつきよく認めない。

でも、そんな人けつきよく現れないんだよね。

そんな人が現れないことは、わたしは愛されないつてことで、わたしが愛されないつてことは、わたしに価値がないつていうことだよね。「だからわたし、自分のこと、終わつていると思つているの」

そうして自己への偏愛・執着があると、それじたいがナルシシズムだから、ナルシシズムを克服するためには、奇妙なことが必要になつてくる。

ナルシシストは、自分を許し、自分を認め、自分を愛さなくてはならないのだ。

自己愛の権化なのに奇妙なことだ。

そしてじつさい、ナルシシストにとつては、この「自分を許す」「自分を愛する」ということが、ものすごくキツいことなのだ。

無理、とただちに切り捨てたくなるほど、そのことはナルシシストにとつて不快に満ちている。

「だってそれは、『ふつう』のわたしを許してやれつてことで、『ふつうでしかない自分を愛せつてことでしょ？」

そのとおりなのだが、それはナルシシストにとつては何よりもキツく、最大に「無理」と感じられることだ。

教育ママが、七十点しか取つてこない我が子を許し、愛するというこ

とのように、それは最大に無理で、最大にキツい。

ヨソの子なら七十点どころか五十点でもかまわないので、

若手と下請けに支配コントロールを仕掛けてキューンとなるだけの、汚物のようなおじさんは、自分がどれだけくだらない小物であるかということを、じつは内心でわかっている。

そりや、鏡を見たらわかるし、自分の半生を振り返ればわかるのだ。あなたもその汚物おじさんの立場になってみれば、何がいちばんキツいかが、逆に視えてくるかもしれない。

その、愚にもつかない小物を、自分でして、許し、認め、愛してやれというのだ。

キツすぎるだろう。

自分は、オタクアニメの主人公のような能力と環境を持つているか、そうでなければ神話の中の登場人物というほどでなくてはならないのに、よりもよつて現実は、「汚物のようない小物おじさん」たる自分を許して愛せというのか。

へへさびしくてみじめな自分を許す・愛するなどということは、ナルシシストにとって最大にキツいvv。

それはとても可能とは思えないような、はてしなくキツいことだが、事実としてはそういうことなので、しようがない。

本当に、そういう自分を、何であれば「ふつう以下」の自分を、許してやらないといけないし、愛してやらないといけないのだ。

ダサい言い方になるが、けつきよくそうすることでしか、先には進めないのでだ。

さらにダサい言い方にするなら、そうしていくことでしか、心理的な成長には向かっていけない。

あなたの実態が、あなたの価値観において、とても肯定できないものになつているということは、じゅうぶんによくあることだ。

あなたが、さまざま言い分だけは自分を肯定し、代わりに誰かを見下して、表面的には強気でいるけれども、内心ではこれまで自分自身で

光り輝くようなものを得てきたわけではなく、本当にはそんな自分自身を愛せてはいないのだとしたら、それはとてもありふれたことだ。

そこで、自分が自分を許せなくて、自分が自分を認められなくて、代わりに誰かに認めてもらいたい、たくさんいいねをつけて認めてもらいたいと考え始めるような、地獄の承認欲求ルートへの思いつきはおすすめできない。

自分が愛さなくてはならないものを、キツいからといって他者操作で代替しようとするな。

ふつうあるいはそれ以下の自分だったとして、さびしくてみじめな自分がだつたとして、それでも愛します、とあなたが言うなら、それでも愛せるのだ。

さびしくてみじめなわたし。

何をやらせても、本物ではないわたし。

何をやらせても、そこまでは上手じやない寒いわたし。

何をやらせても、本当に優秀とまでは言えないわたし。

何をやらせても、醜い自己防衛がただよつているわたし。

何をやらせても、下手というよりは「しんどい」わたし。

何をやらせても、けつきよくは人を頼つて投げ出すわたし。

何をやらせても、すぐに人のせいにするわたし。

何をやらせても、形だけであいまいな成果しか出さないわたし。

何をやらせても、けつきよく他人の真似ばかりしているわたし。

何をやらせても、内心では自分のプライドを高くしているわたし。

何をやらせても、お茶を濁して本当の評価を避けるわたし。

何をやらせても、「馬鹿にされたくない」だけに必死なわたし。

何をやらせても、人に空気を読ませるだけのわたし。

何をやらせても、「見返してやる」としか考えていないわたし。

何をやらせても、本当の価値なんかわかつていらないわたし。

何をやらせても、何者にもなれなかつたみじめなわたし。

何をやらせても、きのうの決意がきょうはもう無いわたし。

何をやらせても、けつぎよく成長してきていないわたし。

何をやらせても、本当に人に慕われないわたし。

何をやらせても、汚らしさが出てうつくしくないわたし。

何をやらせても、集中力が無くてすぐイライラしだすわたし。

何をやらせても、自分の陳腐さを思い知るだけのわたし。

何をやらせても、若さがなく老醜がちらついてきたわたし。

何をやらせても、やさしい自分になんかけつきよくなれないわたし。

そんな自分が、許せない、唾を吐くしかない、というのは、ナルシシズム

であつて、誠実さではないし自分への厳しさでもない。

それは自分への厳しさではない、^^責任逃れに自分自身を「拒絶」し

て突き飛ばしているだけvvvだ。

そうではなく、自分自身に、

「そうか」

と言うのだ。

突き飛ばさない。

見るに堪えない自分を突き飛ばさうとしない。

もう六歳児じゃないんでね。

それではじめて、ナルシシズムの結び目がほどけはじめる。

自分にはとめどなくあふれるテーマがあるというように感じられているのだ。  
その正体は、ただの自我インフレーションなのだが、そんなことを言  
われても、それはとても六歳児に理解できることではない。  
ナルシシストはけつぎよく、そのナルシシズムを捨てるという選択を  
採れない。

なぜならナルシシストは、そのナルシシズムに、いわばかけがえのな  
い「ときめき」を見い出しているからだ。

自分に秘められたときめき、自分にあふれてくるテーマ、まさかそれ  
を捨てる、というような選択は採れない。

ナルシシストは、そのときめきと、あふれてくるテーマ（じつさいに  
はただの自我インフレーション）を、

「これが『オレ』なんだよね」

「これが『あたし』なんです」

と思っている。

全力でそのように思つてゐる。

全力でそのように思い、思えば思つほど、そのことは思い返されてく  
る。

ナルシシズムというのは、どこまでいっても佳いものではない。

ナルシシズムは、何のロマンでもないし、ナルシシズムには、ついに

ドラマツルギーはない。

ナルシシズムは、ただの大問題でしかないのだ。

夢のないことだが、本当にそのでしようがない。

ナルシシズムに夢はない。理としてはまさにそうなのだけれども、ナルシシズムの当人、ナルシシストは、そのナルシシズムに究極のロマンとドラマの核を信じている。

自分にはとめどなくあふれるテーマがあるというように感じられているのだ。

その正体は、ただの自我インフレーションなのだが、そんなことを言  
われても、それはとても六歳児に理解できることではない。

ナルシシストはけつぎよく、そのナルシシズムを捨てるという選択を  
採れない。

なぜならナルシシストは、そのナルシシズムに、いわばかけがえのな  
い「ときめき」を見い出しているからだ。

自分に秘められたときめき、自分にあふれてくるテーマ、まさかそれ  
を捨てる、というような選択は採れない。

ナルシシストは、そのときめきと、あふれてくるテーマ（じつさいに  
はただの自我インフレーション）を、

「これが『オレ』なんだよね」

「これが『あたし』なんです」

と思っている。

全力でそのように思つてゐる。

全力でそのように思い、思えば思つほど、そのことは思い返されてく  
る。

ナルシシズム、（ ）！

はどうしても、胸の奥にキューンとくる無上の快感を覚える。

それで、その快感を原則にして挙動することしか考えられない、とうことになる。

ナルシシズムといつて、ここまで書き話してきて、ここまで赤裸々に解き明かされるのであれば、さすがにナルシシストの当人も、ナルシシズムというものについて理解する。

鼻白むことも通り過ぎ、どう考へても、そのナルシシズムというものにたしかに自分のこころあたりがあると、さすがにナルシシストも認めるものだ。

そしてほとんどの場合、ナルシシストは、そのナルシシズムを「治したい」と考へる。

治したいと考へるのだが、言葉尻はどうであっても、じつさいには追い詰められて、「なんとかしたい」「なんとかしてほしい」と思うところだ。

悪口を言つてゐるのではない。

あなたが何かを克服しようとしていくことがあつたならば、そのときには、あなたの余計な手間が減らされているように、おれが先に情報の構築をしているのだ。

ナルシシズムは、自己中心性、という語にも置き換えられる。

他者が発見されていないのだから、自分だけが絶対の中心になるのは理の必然だ。

ナルシシストが、ナルシシズムを「治したい」と思つことじたい、まずはこの自己中心性の中で生じざるを得ない。

だからナルシシストは、

「どうしたらいいでしようか」

と訊きながら、

「なんとかしてください」

とも思つてゐる。

ナルシシストなので、「治したい」といえば、その「治したい」がすべての中心になる。

そして、それが世界の中心事なので、世界の辺境から何か巨大なものがあつてきて、自分のことを解決してくれる、というような前提を持つている。

何を言つてゐるのか、わけがわからぬと思うが、自己中心性というのはそういうものだ。

ナルシシストはいつも、

「これつてどうしてくれんですか」

と思つてゐる。

「誰が責任取つてくれるんですか」

「誰に言えばいいですか」

と思つてゐるのだ。

たとえば、自分が株に投資をして、大損をしたりすると、

「これつて誰が責任取つてくれるんの！？」

と激怒する。

わけのわからぬことだが、何か世界のあちこちには、なぜか自分の問題について責任と解決を担つてくれる「何者か」がいて、そいつらに強く要求しないといけない、というような固定されたヴィジョンがあるのだ。

自分が試験勉強をして、まともな点数が取れなかつたとき、ナルシシストは、

「はあ、これ、どうにかしてほしんいだけど」と発想する。

「このままいくと、マジで今年も不合格つてありえるんだけど。え、これつてどうするの。どうにかしてもらわないとマジでヤバいんだけど」

どうにかしてやろう、と思うのではなく、どうにかしてほしい、と思うのだ。

ナルシシストは、ふざけた邪意があつてそんな発想をしているのではなく、やはり六歳児のまま（この場合は六歳にもなっていないが）、未発達なのでそういう発想になるのだ。

じつさい、幼児のうちは、すべてのことは自分よりずっと大きい両親がなんとかしてくれるという前提でいるので、ナルシシストはそのころのまま、何か巨大なものが自分のすべてを「なんとかしてくれる」と思つてているのかもしれない。

ナルシシストには自信がない。

当たり前だ、六歳児のまま数十年が経つたのに、豊かな自信が構築されてきているわけがない。

ナルシシストは、自己中心的で、そこにときめきを覚えているから、強烈な「自負」は隠し持つていて、だからといって物事に対して堅牢な自信があるわけではまったくない。

自負だけが強烈にあり、自信はまるでないので、そのぶん、他人に対して強気に当たらなくてはならないという事情が、ナルシシストにはある。

腰を低くすることはできないのだ。

ペコペコしているようだつたり、控えめなふうだつたりとしても、真に腰を低くすることはできない。

自己中心なのだから、けつときよくは他人を見下すしかなく、けつきよくは他人を侮辱するということに行き着く。

みずからの、自負にふさわしく他人を侮辱し、みずからの、自信のなさにふさわしく他人を頼る。

だからナルシシストは、最終的に、「自分のいかなる侮辱をも受け入れてくれる人」を探す。

何をどう考へても、そんな無価値で屈辱的なことに付き合おうとする人が存在するはずはないのだが、何しろ当人は自己中心的だ。自分にとって大切なことは、ほかの人のすべてのことより大切なことだと信じられるし、「どうしたらしいか」については、世界の辺境から不明の巨大なものがやってきて、自負にふさわしいぐらいに「どうにか」してくれるはず。

自分でどうにかしようという発想はナルシシストにはない。（「はいはい、自分でなんとかしますよ」と、いやらしくしか思えない）この仕組みは、ナルシシスト当人にもわからず、次第に当人にとってさえ、謎の「発作」のように現れて来る。

何をどうしても、自分の口から、誰かへの「侮辱」が飛び出すのだ。そんなつもりがあるのかないのか、もはや当人にもわからない。

そもそもナルシシストは、感情が未分化なので、自分に何が起こり、どういう感情でどういう挙動をしているのかなんて、まるでわかつていない。

まったく必然性のないときにも、突如、自分の口から誰かへの「侮辱」が飛び出すのだ。

当人にとっても気持ち悪い、まるで発作のようだ。

「そろそろ帰り道だから後輩の○○クンを侮辱しようか」

「昼食も済んだから高校のときの同期を侮辱しようか」

「雨で洗濯物が干せなくなつたから転職した△△ちゃんを侮辱しようか」

それで、さすがにこれはおかしいと自省し、そのことを自らで抑える。すると、一週間は抑えられるが、その抑えたぶん——我慢したぶん——は、来週に利子までつけて飛び出す。

このわけのわからないことには、おれが名前をつけておこう。

ナルシズム、発射！

おちよくつたような名前で、これこそがまるで侮辱のように聞こえる

かもしだれないが、本当にそれは「発射！」なので、そのように命名しておく。

すべてあなたが完全な脱出不可能に陥らないための措置だ。

あなたが、ナルシシズムを「発射！」すると、なぜかあなたの内部で、「始まつた！」

というような、お祭りさわぎが起ころる。

自分の内部がイケイケになるのだ。

そのときは、どうぞ自分の内部を観察してみなさい。

本当にそれが言つたとおりになつてゐるから。

あなたには自信がなかつたのだ。

あなたが自分で、自信のつもりで隠し持つていたものは、じつは自信ではなく、ナルシシズムによる「自負」だつた。

ナルシシズムのときめきから生じた、根拠のない、それはただの釀成された「自負」だ。

あなたが秘めていたその自負は、あなたの内部では強烈なものに思えただけれど、じつさいの場所（魂の呼び込みが問われる場所）で取り出してみたら、それはまるで虚弱で、本当の場所で実用に堪えるようなものではまつたくなかつた。

自信がゼロになり、あなたはナルシシズムの古巣に帰りたくなる。

あのときめきと、秘めた自信に満ちていた古巣へ。

それで、

「ナルシシズム、発射！」

自分の口から、誰かへの・何かへの侮辱が飛び出す。

あなたは、認識としては、別に誰のことも見下していないが、自負としては、周囲のほとんどの人を見下しているのだ。

あなたがそのようにしようとしているのではなく、ナルシシズムというのはそういうものだ。

自己中心で、それがときめきに満ちており、他者などはまったく発見されていない。

それで自分を低くして他者を敬つてゐるわけがない。

自己中心で、自分は秘めた自負とときめきの中にあり、一方、「ふつう」の他人たちはそれとは違うものとして存在し、あなたは自然とそれを見下しているという状態が、あなたにとつては旧来からの「正常」な状態だ。

ナルシシズムというのはそういうことなのだから。

不意にでも自信を失つたあなたは、「正常」な状態に戻ろうとする。

それで、ナルシシズム発射！ となる。

そのことが起つたとき、あなた自身で、

（おー、今日も発射したなあ）

と思って眺めておくのがいい。

自己客観視というのはそういうことだ。

自己客観視を積み重ねていくうち、やがてさすがに自分のことを、（いつまでも、何やつてんだこいつ）

と冷静に見定めるということも起つてくる。

自信をおびやかされたナルシシストが、ナルシシストとして「正常」に戻ろうとするとき、その合図の大砲のように、それは発射される。

ウェブ上の、さまざまなレスや記入欄に、侮辱的なコメントが書き込まれているのもその「発射！」だ。

誰もその自覚はないが、ナルシシストとして自信を恢復し、「正常」な状態に戻ろうとして、それらの書き込みは行われている。

ナルシシストが探す、「自分をわかつてくれる人」「自分を受け止めてくれる人」は、定期的にやつてくるそのナルシシスト砲の侮辱発射を、どこまでも受け入れてくれる人だ。

ナルシシズム砲が発射されるとき、ナルシシストは「正常」になり、自

信を恢復していく。

それは恢復なので、ナルシシストの体内で、

「始まつた！」

「いうお祭りさわぎが起ころうのだ。

自信を恢復して、自分の内部がイケイケになる。

それはけつこうな勢いなのだ。

「止まらない、マジで止まらない」と、本当にファナティク（狂信的）

な、宗教的というほどの昂つた顔つきをし、止まりようのない声を発する。

なにしろ、あのかけがえのない「ときめき」と共に、すべての中心という無敵の自分も取り戻されてくるのだから。

そのため、侮辱を発射し、他人を見下しもする。

それ以外に、自分がやつていく方法はもうない。

何しろ、本当に自信はないのだから。

当人は、そんなことをしているつもりはない。

そのとおり、当人はそんなことを意図していない。

当人は自信を恢復したいだけだ。

ナルシズムのときめきから生じる、秘めた自負、あふれつづけるテ

ーマ、それを自分の自信にしていた、あの状態に返りたいだけだ。

自信がおびやかされたときにだけ、その発射は起ころうし、他人を見下すということも起ころう。

仕事に自信のない営業マンが、車を運転していると、いつのまにか、

周囲に毒づきながら走行しているだろう。

「チツ、さつさと進めつてんだよ」

「なんだ、あんなブサイクな女連れて」

「自転車がちよろちよろしてんなよ、邪魔なんだよ」

「汚ったねえ定食屋だなあ、こんなとこ客来ねえよ」

本人はそうして、毒づき、「発射」をしていることに、まったく気づいていないし、そんなことをしている自覚はない。

そのとおり、当人が意図していることは、「侮辱」でも「発射」でもなくひたすら「自信の恢復」だ。

ときめいて自信に満ち溢れていたあのときのボクとアタシに帰ろうとしている。

六歳児のまま営業マンをさせられているので、そこだけを見れば、自信を持ちたいということ、偽りのものでも自信を恢復したいというのは、切実なこととして理解されうることだ。

ナルシズムを、「治したい」とは思うのだが、ナルシズム由来の「自負」が、これまでの自信のすべてだったのと、それを取り外すことはなかなかできず、ほとんどの場合は、

「お、また発射したねえ」

とならざるを得ず、元の木阿弥になつてしまふものだ。

それでもじわじわやつていくしかないのだろう。

ナルシシストは、自信をまつたく持つておらず、自負で生きている。

そしてナルシシストの当人はふだん、その自負と自信の違いがわかつていい。

なぜ違いがわからないか、なぜその違いに気づかないかといえども、ナルシシストは他者を発見していないからだ。

自負は、自室で寝転んでいるときには通用するが、他者に向けては通用しない。

たとえば、自室で寝転んでいるときに、「自分は人並みにコミュニケーション能力を持つていて」という自負を持つたとして、その自負は自室において万全に通用する。通用するも何も、当人しかいのだからそりやあその自負は通用するだろう。

ナルシシストはこういうとき、自負に浸る「ひとりの時間」で、自分にけつこうなときめきを覚えている。

けれども、自負がどのようであれ、じっさいに街中でショートパンツのギャル四人組と対面したとき、あるいは職場であたらしい案件について上司にメールするとき、はたまた友人のイベントで初対面の人たちが来客したとき、自室で寝転がつて醸成したその自負というものは通用しない。

コミュニケーション能力に自信があるかどうかは、そのとき目の間にしているギャル四人組に向けての自信の有無、ということで問われる。まさかギャル四人組を相手に、自分が「魂を呼び込む」か。

そんなことはなかなか出来ることではないだろう。

このとき、派手なギャル四人組を目の前にすると、内心で、（何なのこいつら、人としてまともじやないでしょ。こんな連中に話通じないわ）

という思いが湧くことがある。

そして、予想したとおり、コミュニケーションは抄（はかど）らず、双方ともギクシャクして、向こうからはなんとなく、「ダルつ」  
というような表情をされた。

あなたは帰り道、車の運転をして国道を走行する。

明日は友人のイベントがあり、出席する予定だが、会場には自分の知らない人たちもたくさん来るらしい。

するとあなたは車を運転しながら、何とはなく、「うわここ、小っさい店なのに、駐車場ばっかり広いなあ！」  
通りすがりの風景に、侮辱を吐き捨てる。

あなたにその自覚はない。

発射だ。

とつぜんどうしたのだ、なぜいきなり何でもない景色に「発射」したのか。

発射した当人は勢いづいて、気色ばみ、止まらない、という様子だ。

何の発作か、何が起こっているのか。

これは、自負と自信の食い違いに「発射」が起こっているのだ。

あなたはコミュニケーション能力に一定の「自負」があつた。

けれどもショートパンツのギャル四人組を目の前にしたとき、あなたがじっさいに体験したのは「自信」がないということだった。

自信と自信が分化されていたら、「自負と自信は違うでしょ」というだけのことで、何も混乱することではないが、自負と自信が未分化なので、あなたは混乱する。

コミュニケーション能力に自負があるのに、コミュニケーション能力に自信がないという思いをさせられるのは、矛盾していくへンだ。

へんというのは、何が原因か。

へんといっても、自分は何もおかしくないのだから、自分とは違う何かがへんなのだ。

自分は正しくて、世界が正しくない。

となると、コミュニケーションするとはいっても、ギャルの四人組という連中がへんなのだ。

それで、

「人としてまともじやないでしょ」

そのようにあなたには見える。

たとえば、魚をさばく技術に自負があるのに、目の前の魚をさばける気がしないのであれば、それは目の前の魚がへんだ、ということになる。

「何この魚、へんなの。これまともにさばける魚じやないでしょ」

車の運転技術に自負があるのに、乗っている車がフランして制御できないなら、それは乗っている車がへんだということになる。

「この車おかしいよ、壊れていて無理」

PCの知識に自負があるのに、PCがおかしな挙動をするなら、PCがヘンということになるし、書道に自負があるのに、下手な字が書かれたならば、筆や半紙がヘンということになるだろう。

「何このPC、ウイルス入ってない？」

「あー、たぶんこの筆はなんかダメなやつだわ」

自分が正しくて世界がヘンなんです、ということになる。

それであなたにとつては、ギャルの四人組が「ヘン」ということになるのだ。

「何なのこいつら、人としてまともじゃないでしょ」

あなたは帰り道、明日のイベントのことを思い出した。

友人のイベントで、知らない人たちもたくさん来るらしい。

コミュニケーション能力にかかる機会になるのは必然だ。

あなたはコミュニケーション能力について、自負があるが、先ほどギャル四人組に、自信がないという思いをさせられたため、未分化のまま不安が惹起される。

自信（本当はただの自負）はある、のに、不安が起こる。

未分化の感情には、強く振り回されるので、あなたは感情的に強くネガティブなストレスを覚える。

自信（本当はただの自負）があるのに不安にさせられるのはヘンだ。

ということは、世界の何かがヘンなのだ。

あなたはそのことについてボヤきたい。

「うわここ、小っさい店なのに、駐車場ばっかり広いなあ！」

正しい自分が、世界がヘンであることを指摘する。

すると、先ほどの不安ストレスが和らぐ。

ときめきが少し取り戻されて、止まらない。

帰宅して、知人に電話し、

「そういえばさ、二年前に○○くんが取引先でトチッたこと！ あれつてじつに○○くんらしくて、いまも忘れないよね！」

すべての中心たる自分が取り戻され、自信と混同される自負にときめきが取り戻され、「やつていいける」という気がしてくる。

現実的には、しょっちゅう不安にさせられる。

要するに、明日のこと、来週のこと、来月までのことが、ちゃんとやれるか不安なのだ。

そこで、発射すると「やつていいける」という気がして止まらないよう生きていかなくてはならないのだ。

それに、実情として、人は「発射」しながらでも何でも、破綻しないよう生きていける気がしない」と、不安に圧し潰されて、夜眠れなくなり、

追い詰められるというわけにもいかない。

方法論を抜きにして、自信を獲得できたら、この「発射」は消える。

自信を獲得できたら、ときめきは自己中心性のものではなくなってゆき、ギャル四人組と当たり前にコミュニケーションすることができるようになり、それでいて「いや、たいしたことはできないけど」と、自負は薄まっていく。

## 理解はできるけれども（ ）が勝つ

ナルシシストは、幼児だ。

大人ぶっているし、シニカルな、老練ふうや円熟ふうを演出してくる

けれど、本質が幼児だ。

加齢すると、テクニックがついてくるし、ややこしさが増してくるのだけれど、それはやはり、テクニックを身につけた幼児でしかない。

幼児というのは、その人らしさではなく、単に「大人になることができなかつた」だけ。

ナルシシズムというのは、性質ではなく「結果」だ。

建築資材を置いておけば、勝手に家が建つというわけではないし、土木用具を置いておけば、勝手に整地されるというわけでもない。

何十年経つても、その土地はその土地のままだつた。

雑草が生え、根が入り込み、ねずみや外来種が棲みついてややこしくなつたが、それは厄介ものになつていつたというだけで、何かが成り立つていつたということではない。

幼児のまま、「大人になることはできなかつた」という、結果なので、それは「どういう人」と描写することさえしにくい。

どういう人にもなつていい、ただの厄介もの、としか表現できない。

ナルシシストは、そんな自分を、本心では恥じているが、さらに本心では、何もかもが「よくわかつていらない」。

幼児のままなので、本当に「よくわかつていらない」のだ。

幼児が、たとえば「大政奉還」と「王政復古の大号令」について話し合つたつて、本当によくわかつていらないだろう。

あたかも、何かがわかつてているように、見せかける、そう振る舞うといふ、偽装のテクニックは身につけているのだが、本当に主題じたいがよくわかつていていないので。

徳川幕府が朝廷に将軍職を返上した、と、教科書に記されてあつたことを丸暗記していても、まず「幕府」が何なのかよくわかつていてないし、「朝廷」が何なのかよくわかつていてないし、「将軍職」がよくわかつてない。

碇シンジ君が初号機に乗つて「うわあああ」とイヤがり、神経の弱い

同士に情を誘う、というような、本質的にストーリーを喪失したものについて、自分が覚える「印象」、というようなことしかわかつてない。

幕府というと、幕府つ「ぽい」もののヤバみしかわかつておらず、朝廷というと、何かそれつ「ぽい」もののヤバみしかわかつてない。

初号機つぽいもののヤバみ、使徒つぽいもののヤバみ、ネルフつぽいもののヤバみしかわかつておらず、それが何の話なのかという、主題じたいがわかつていてないのだ。

だから、新世纪エヴァンゲリヲンには、物語としての主題がない。

作る側も、観る側も、主題はよくわからない同士で、何かヤバみのフレーバーを嗅ぎ合い、その印象を「ヤバい」と言い合つてているのだ。

ヤバみを嗅ぎ合つてきた、印象キヤツチへの「自负」だけが肥大し、それはどういう話かと訊かれると、「よくわからない」のだ。

「主題」は、大人にしかわからない。

「主題」は、その魂が呼び込まれるかどうかということだから、幼児にはわからないし、幼児には取り扱えない。

ナルシシストには、そのことがずっとストレスで、そのぶん、自分の「わかる」ことについては火がついたようになる。

先に述べたように、ナルシシストは、自分の強烈に「わかる」ことに閉じ込められているのだ。

だから、ストレスと発射が呼応し、逆に、  
「え！ キミわっかんないの？」  
という表現が出る。

ふだん、これまでにもう何十年も、心理的成長を得てきた人たちだけが取り扱う「主題」の話について、「よくわからない」でいて、わかつているふうに振る舞うという偽装のテクニックだけを駆使してきているのだが、そのことじたい恥ずかしいし、当たり前だが苦痛なのだ。

みんなでスケートリンクに来たけれど、自分だけスケート靴を履いてはおらず、ふつうの靴で氷上を「滑走しているふり」をしつづけているというような苦痛だ。

本当にはスケートなんかしていない。

それと同じように、本当には主題なんか「わかつてない」。

スケート靴の存在を未だ知らないまま、スケートしているふりをつづけているのだ。

大阪の道路に、府道30号線というのがある。

ところが、この府道30号線を、地元の人は「13号」と呼ぶ。

え、なぜ？

わけのわからぬ話だ。

歴史的に由来があり、かつてその道路は、道路幅から「十三間（じゅうさんげん）道路」と呼ばれていたそうだ。

だから地元の人は、それを13号と呼ぶし、むしろ13号としか呼ばない。

「府道30号線を……」

「はあ？ どことそれ」

本当にこういう調子だ。

行政の冊子にさえ「13号」と書いてある。

（二〇二五年現在はわからぬけれど、二〇一五年ごろまでは確實にそう）

もちろん、国土交通省が定めるところの「府道13号」は別に存在している。

守口市から京都への接続に、府道13号が存在する。

だから仮に、地元ではない人に、

「13号線沿いのファミレスで待ち合わせしよう」と連絡すると、その人はどうぜん守口市に行くわけだ。

それでは待ち合わせが成り立たない。  
ここで待ち合わせが成り立たなかつたとき、どのようになるかといふと、

「あんなあ、13号言うたら、ここのことやろ」となる。

地図には30号線と書いてある。

「せやけどふつう、13号言うたらここのことや」

そんなの知らない、知るわけがないと言うと、

「え！ 知らんの！？」

となる。

知らんに決まっている。

カリフォルニアから来た旅客が地図を見て、30と書いてあるのをサ一ティーンと自動的に読み替えるなどということがあるわけがない。

けれども、人は、

「え！ 知らんの！？」

と、そのことに驚き、人を嘲笑し、人を侮辱する。

「自分、常識ないな！」

ここでひとつ、音楽CDでも再生してみよう。

「この曲、知っている？」

「こんな外国の歌なんか知らん」

「ビートルズの、エリナー・リグビーだよ」

「そんなん知らん。知るわけないやろ。そんなんは、知っている人だけが知っているもんや」

世界全体で見たらどうぜん、「13号」より「エリナー・リグビー」を知っている人のほうがはるかに多い。

けれどもそれは、彼の「常識」には当てはまらない。  
信じがたいことだが、本当に彼は、「自分に見えているものしか見えて

いない」のだ。

「サリーとアン」の課題に示されているように（※ググつてください）、彼は、本当に自分の指定した「13号」が、たとえブルガリアの体操選手の少年にだって伝わると思つていてる。

13号といえば「ふつう、ここのこと」だから。

一方、ニーヨンロクといえば、東京で城南のほうへ走つてゐるあの道路のことだ。

城南、つまり、目黒区世田谷区品川区大田区だが、ここに住んでいる人で246を知らない人は存在しない。

「うち、玉川通り沿いだから、246をずっと来てもらつて……」

「その、ニーヨンロクから、玉川通りへはどう曲がつたらええんや」

「え？ 玉川通りだから246じやない」

「国道246号からどの交差点を曲がればええんや」

「え、ひょつとして知らないの？ 玉川通りつて246のことじやん笑」

「そんなん知らんわ」

「そんなこと言われても、そんなのフツー誰でも知つてゐるし」

「それに、いま246号走つとるけど、青山通りつて書いてあって、玉川通りつていうのは無いで」

「それは……あー、なんて言つたらしいのかな。渋谷のあたりを超えたら玉川通りになるの。だから246をまっすぐ来たらそれでいいの笑。

そんなの知らない人つて本当にいるんだ」

どうしても鼻で笑つてしまう。

東京城南ニーヨンロクと、大阪阪南13号の戦いだ。

「映画の中で、戦車に隠れてマシンガンを撃つていた」

「は？ そんなシーンなかつたでしょ……ああ、ひょつとしてあれか、自走砲を遮蔽にしてアサルトライフル撃つていたシーンのことを言つているの？笑」

どうしても鼻で笑つてしまう。

このような場合、彼は、戦車と自走砲は分化できており、マシンガンとアサルトライフルは分化できているのだが、自分と他者が分化できないのだ。

鼻で笑われるのはどちらであるべきか。

「このスピーカー、スイッチはどこですか」

「は？ スピーカーは本来パッシブなものなので、スイッチなんかついていないんですけど。ひょつとして、アクティブスピーカーのアンプ部のことをおっしゃってる？笑」

「これはどういうウイスキーですか？」

「は？ そつちの棚はもうブランデーだけど。そんなの見たらわかるじやん。ここからここまでがバーポン、ここからここまでスコッチで、こつちから向こうの棚はブランデーだよ笑」

「そのサンダル、色がきれいでかわいいね」

「え？ あ、はあ、ありがとうございます（このミュールのこと言つて

んのかな？ さすがおじさん、わかっていない笑）

たとえば、ついうつかりといふことも含むと思うが、たまに、お寺で賽銭をして合掌するのに誤つて手をパンパン叩いてしまう人がいる。つまり神社でする柏手をやつてしまう人がいる。

ナルシシストは、他人のそれを見ると、どうしても「発射」が止まらない。

「いやいや！ お寺で柏手は打たんやろ笑！ キミほんと常識ないなあ、さつきからあそこでお坊さんがあんなにお経唱えらつしやるのに、キミにはここが神社に見えとるのか？」

ナルシシストは、ふだんの自分が、あるべき主題を「わからない」まで生きているので、他人の「わからない」が大好きなのだ。

「え、キミつて、そういうことわからないんだ！？」

大好き、大好き、止まらない。

そうして人を侮辱し、嘲笑しているあいだは、あたかも自分が「わかつていてる」側でいられるから。

ここではひとつ、くだらない教訓として、ナルシシストの立つ瀬をなくしてみよう。

「それで言つたら、さつきからお坊さんがお勤めしているのは偈頌（げじゅ）であつてお經ではないぞ。そんなの聞いてりやわかるだろ、句になつていて節（ふし）がついてんだから偈頌だよ。恥ずかしいから大声を出さないでくれ」

先ほど述べたように、ナルシシズムというのは、平常時にはあまり露出しない。

ナルシシズムは「ちょっとしたとき」に露出する（「発射」の発作を除く）。

あなたが、ふと、こんなことを思い出した。

「わたしやつぱり、あのときのあれのこと、許せない」

あなたの内部で、精神は曇り、底深い憤怒に満たされていく。

そこに、待ち合わせていたとおりに知人がやつてきた。しばらくやりとりをして、知人は何か不穏の気配を察し、

「なんか、具合悪いことあつた？」

と言う。

あなたはそれについて、

「お察しのとおりで」

とは言わないし、そのように思わない。

あなたはため息をつき、

「ハー。いや。わかつてくれないなら、もういいんだけど」

「なに、どういうこと」

「もういいって」

「そんなこと言われても……」

「うーん。面倒くさいなあ。あのさ、見ていてわかんない？」

「いや、そんなこと言われても、わかんないっていうか、見当もつかないよ」

「ハー。あのさ。わたしは、やっぱりあのときのこと思い返してね。やっぱり許せないって思つてているの」

「はあ……」「こんなこと、いちいち言わせないで。言わされるわたしの身にもなつてよ」

「その、あのときのことって、どのときのことを言つてているの？」

「え！？ ひょつとして、それさえわからないの？ もしそうだとしたら、マジでありえないぐらい許せないんだけど」

「そんなこと言われたつて、わからないのはわからないよ」

「うわ、マジ最悪」

平常時には露出しない。

ちょっとしたときには、ナルシシストという本質が露出する。

あなたは、自分が「13号」と言つて向こうが「わからない」と答えると、心底からおどろき、軽蔑するのだ。

こんなにわかりやすく言つているのに、わからないとかマジありえなから。

どいつもこいつも、頭おかしいよ、と、あなたは本氣で思つてている。

「正直、○○ちゃんは、それぐらいすぐわかつてくれると思つていた。

だから、本気でショック。もう何も信じられないかもしない」

あなたは、そのショックの中、「本当にわかつてくれる人」を夢想する。

「わかつてくれる人」、ただそれだけ、ただそれだけの人と過ごすことが

できたら、そのときわたしはなんと無垢の、自然体でいられるだろう。

あなたはその夢想にときめきを覚え、こころあるものについて確信を

深め、そのぶん、そうではない目の前のものに軽蔑と憎悪をたしかめてうなづく。

あなたは内心で、

（ハー。さしあたり、「我慢」するしかないか）

と思うのだった。

取引先のA社は、何かと口うるさい。

口うるさいので、資料を送ったり、電話でやりとりしたりするときには、前もつていつも憂鬱だ。

あなたはそのA社向けの資料を作成している。

ちょっととしたときにナルシシズムが露出する。

同僚が、

「飲み物買つてきますけど、何か要りますか」と声をかける。

あなたは、ハーとため息をつき、鼻でせせら笑い、「要らない」と冷淡な声で言う。

あなたはやがて耐えきれなくなり、こう発射する。

「あのさ、いま、神経使う作業しているの。見ていてわからない？」

わかるわけがない。

A社向け資料とB社向け資料、作成している姿はまったく同じだ。

A社向けのそれを作成するときは、前もつて気分が憂鬱になるというの、あなた個人の心境であつて、そんなものに他者が帯同できるわけがない。

しかしナルシシストは、他者を発見していないので、自分が見えてい

るものは、他人にも同じように見えていると思っている。

自分に「13号」と見えていれば、他人にも「13号」と見えているはずなのだ。

「神経使う作業をしているとき、話しかけられたら迷惑だし、ミスにながるからやめてほしいのよね。あと、さつきわたし、ペットボトルで紅茶飲んでいたじゃない。だから飲み物はきっと要らないだろうって、想像つかない？」

あなたは、自分がペットボトルの紅茶を飲んでいたということを、ほかのすべての人も「知っているはずでしょ」と思っているのだ。

他者を発見していないというのはそういう状態だ。

もちろん、

「お前がペットボトルの紅茶飲んでいたところなんか、誰も注目してないわ」

と言われたら、そのことは理解できる。

理解はできるけれども違和感があるのだ。

理解はできるけれども違和感が勝つ。

いや、まあ、うん、言っていることはわかるよ。が、

「いやいや、フツー、わかるでしょ……」

そう思えて、嘲笑と侮辱が発射される。

自分が神経を使う作業をしていること。A社向けの仕事は憂鬱でナイーブだということ。さっき紅茶を飲んだのでもう飲み物は要らないということ。

そんなこと、いちいち他人からはわからないでしょということは、あくまであなたの、平常時の認識でしかない。ちょっととしたときにはもう認識が変わる。

「フツーわかるでしょ笑」

その認識と、他人への侮辱にこそ、ときめきと快感がある。

ああ、しんどいなあ。またこうやって、我慢しないといけないのか。わたしのやっていること、思っていることが、他者からはわからない

ということは、理解はできても、違和感がある。

けつきよくはその違和感が勝つので、問答を差し挟んで時間稼ぎをすることには意味がない。

神経を使う作業をしているとき、話しかけないでほしいし、飲み物を飲み終わったところに、飲み物要りますかなんて聞いてこないでほしい。

「そんな当たり前の要求さえ、わかつてもられないってことですか笑」

ナルシシストはけつきよくそのように感想して、他人の愚劣ぶりを嘆く。

理解が勝つのは平常時のみ。

ちょっとしたときには違和感の側が完全勝利する。

ナルシシストは、自分がことが他人にはわからないということに違和感があり、自分がことが他人に重要な注目されていないということに、

ずっと違和感があるのだ。

だから、「ちょっとしたとき」にはもう、

となる、「ハー。ありえない」

あなたは「ちょっとしたとき」のことについて、いつもの結論として、

「ピンと来ない」

「しつくり来ない」

というふたつを言う。

ニヤニヤして、あなたはそれを言う。  
追い詰められたときもそれを言う。

駅前で理解が勝つても、交差点を曲がるころには違和感が勝つている。やつぱり、「わたしの思っていることが、他人にわからない」ということには、軽蔑すべき違和感しか湧いてこない。

そんなあなたに、何の準備もなく、「あなたがいまやっていることの主題は何」

と訊くと、あなたはとっさに答えられない。

あなたは、

「主題？ A社向けの資料を作っているんですけど。そういう仕事をしているんですけど」

としか答えられない。

A社向けの資料を作っているのはあなただけだ。

あなただけ、だ。

しかし、あなたは正味、自分のやっていることが「主題」だと思つている。

自分限定のそれを「主題」だと思っているので、その「主題」が他人からわかるないということに、あなたとしては違和感があるので。あなたは、

「13号が、地図には府道30号と書かれている」

と思っている。

「府道30号が、ローカルには13号と呼ばれている」

本来はそうではない。  
のだ。

主題としては、13号は「存在しない」というのが前提だ。

しかしナルシシストには、13号が「存在しない」というそのことが、どこまでも違和感でしかない。

あなたにはピンと来ないし、しつくり来ない。

鼻で笑い、

「いや、まったくピンと来ないですね」

と言う。

あなたは、13号が「わからない」人を嘲笑し、快感を得る。

快感と共に、自分をそのとき「わかつている人」とし、自分がいつまでも主題について「よくわからない」幼児でいるということの、ストレス

と奥深い恐怖から自分を守りつづけている。

の「他者」に展示する、「他者」に手渡すという時点で、当人の意識が混濁する。

だからほんどの場合、人は、何かを「やつてみた」ということに留め、ツイッター(X)やウェブのコメント欄などで「つぶやく」ということに留めるわけだ。

そこに留めておくなら、意識は混濁しないし、自分が六歳児ということもバレない。

「作品」として提出するとバレる。

あるいは、バレないためには、作品のふうに見せかけ、すべてを「思わせぶり」ということに留めるという方法もある。

色彩をほどこし、微妙な表情を浮かべ、何とも言えないBGMを添える。

すると、何もかもは思わせぶりになり、そうして思わせぶりということに留めておけば、すべてについてを、「さて、どうでしょう」

とし、本質をくらますことができる。

「ま、センスの問題じゃない?」

さらには、もつと単純に、「価値」を押し出すこともできる。

人が、黄金で装飾されたロココ調のベッドで寝ているところを、高級なレンズで撮影すれば、人は映し出されているものの金銭的価値に反応し、注目する。

加えて、スケベな恰好をした女性を並べておくだけでもいい。

先輩の家に、何かしらの豪奢なトロフィーが並んでいたら、それは作品ではないが、パツと目を惹かれる。

その中央に立ち、「これがオレなんだよね」と言われると、その「価値」によって、あたかも実物が成り立っているかのように錯覚される。しかしこれらのことはすべてナルシシストでも可能なことだ。

## 創作において、意識を（ ）させない、（ ）

### もさせない

平常時、ナルシシズムというのは露出しにくい。

だから、平常時、自分の本質が幼稚で、六歳児でいどままでいる、致命的な実情は、ありていに言って「バレない」。

ふつうの陽キャ、ふつうの絡みやすい奴、ふつうの社会人、というふうに、自分を偽装してゆける。

あるいは偽装ではなく、そのことまで含めてこそがふつうの社会人なのかもしれないけれども。

とはいえる。

本当に実物を問われたらバレる。

本当に実演を見られたらバレる。

本当に実作を手がけたらバレる。

だからこそ、そのようにするのがいい。

作品あるいは作品性と呼びうるのに、みずからを踏み出させるのがいい。

作品というものは、ほとんどの場合、他者に展示する・手渡すといったことを前提にする。

ナルシシズムのままでいると、他者が発見されていないので、まずそ

ナルシシストの女性を、半裸にし、ダイヤとサファイヤの装飾をつけさせ、サハラ砂漠に立たせ、高級なレンズで撮影すれば、そこに示される金銭的・経済的価値は、彼女がナルシシストだということに何ら関係がない。

近いうち、誰でも「世界とわたし」という写真集を、生成AIでワンタッチ作成できるという時代が来るだろう。

いま現在でも、ヒマ人がちょっと手を掛ければ作成可能だ。

までは、そんなヒマな行為は流行まではしないだろう。  
生成AIでワンタッチ出力されるきらびやかな「あなた」に比べて、  
けれども、馬鹿馬鹿しいことなので、本当にワンタッチの時代が来る  
あなたがあなたで出力しようとする「あなた」は、まるで貧相で、成り立  
つておらず、見るに堪えないものだ。

俳句のひとつだけ、「作品」として他者に向けるということは、あなたにとって「よくわからない」ことだ。

575で構成し、季語を含ませるということは、常識的に知られているから、あなたにもわかる。

それをツイッター(X)等に書きつづけていれば、たしかにそのうち十や二十の「いいね」はもらえるだろう。

けれども、あなたがその自作俳句を集めた冊子を発行して、それを誰かが買いに来る・その冊子が大切にされるというのはかなり遠い道筋の話になるし、あなたがウェブサーバーを借りて、あなたの俳句のページを作ったとして、それをわざわざ読みに来る人というのはまずないと見込まねばならない。

ツイッター(X)の場合に「いいね」がつくのは、単にツイートが他人のタイムラインに割り込むからにすぎない。

他人のアカウントのタイムラインを侵略する機能があるので、ふと目に触れて「いいね」をつけてもらえるだけだ。

おれがもし、自作俳句のウェブページを立ち上げ、それを「作品」として見てもらおうと考えるなら、  
「まず、数が必要だから、365日ぶん俳句を詠み、それを初期の状態としよう」

と考える。

おれは何を考えているのか。

実作を問われたら、「これが実作です」と展示できるということ、それだけを考えている。

实物と言われたら「これです」、実演と言われたら「このようです」と、示せるということ、それだけを考えている。

作品および作品性について考えることの第一は何か。

それは、他者にとつては「要らない」ということだ。

それは当たり前のことであつて、わざわざ冷淡な気分になるようなことではない。

おれの詠んだ俳句が誰かにとつて「要る」ということはまずない。

もし、それが誰か(身内でない誰か)にとつて「要る」ということになれば、それはすさまじいことだ。

それはよほどの魂を呼び込めているということになる。

おれが詠んだ俳句なんて、何の娛樂性もないのだから、他者にとつては「要らない」に決まっている。

それに比べて、たとえばパチンコには、派手な音とヴィジュアルがあり、それで個々のお金が増えたり減ったりするという生々しいスリルの娛樂性がある。

だから、世の中にパチンコを「要る」とする人は多い。

それほどに、おれの俳句が「要る」とされることはまずない。

その当たり前のことの中で、例外中の例外になるのが、本当の意味で「作品」ということになる。

きれいな女の子をはべらせてお酒を飲み、胸元をチラチラ覗き込んで「やーだ」と言われてデヘヘするということより、お前が唄う何かの一節のほうが「要る」んだよというようなことは、宇宙の法則として「ない」というのが原則だ。

ただその原則にも例外があるということ。

仮に、おれが大金持ちだたとして、おれがあなたに五つ星ホテルのロイヤルスイート宿泊をオゴるとする。

そのことと比較して、おれの書いた短編小説のひとつのはうがあなたにとつて「要らない」とされるなら、おれは即刻小説家を辞める。

あなたはそんなことを言わないはずだ。

五つ星のロイヤルスイートに泊まるより、おれの書いた短編小説のほうが、あなたにとつてはなぜか「要る」だろう。

これはじつはおどろくべきことなのだ。

あなたは、おれに五つ星ホテルの宿泊をオゴられるより、一本の短編小説を書いてもらう・読ませてもらうことのほうを「要る」と感じている。

なぜ？

そんなことは、通常ありえない。

宇宙の法則としてありえない。

だから、宇宙の法則が曲がっていると言つていい。

魂を呼び込んでいる。

それなら宇宙の法則も曲がっておかしくない。

魂が呼び込まれるということなら、それはたしかに、五つ星ホテルに泊まるというような無意味なことをしている場合ではないのだ。

実作・実物が問われるというのはそういうことだ。

五つ星ホテルのロイヤルスイートに無料で泊まれるという「現実」に対抗できる「実物」でなくてはならないということ。

あなたは、あなたの母親が、十万円をのおこづかいをくれるか、それとも習つている浪曲をひとつ唄つてくれるかという選択肢があつたとき、いちおうは、「じゃあ浪曲のほうで」と、苦笑して言うかもしれない。でもそれはあなたが身内だからであつて、他者の場合はそうではない。

十万円あげます、と言えば、たくさん的人が寄つてきて、「ウソです、浪曲を唄つてさしあげます」と言えば、「なんだ」「詐欺師め」と言つてすべての人は去つててしまうだろう。

他者としては当たり前だ。

中には、ある種のやさしさで、そのおばさんの唄う浪曲を、数分ぐらいい聴いてやろうとする人もいるだろうが、おれの場合、そういうやしさをありがたいと縋（すが）るものではない。

おれの書き話しがつまらなければ、すべての人は即刻去るべきだ。

まあ、どうせおれの場合はそうならないしな。

おれはそうして、宇宙の法則が曲がるのが好きだ。

娯楽性はないのに「面白い」、認識も観測もできない魂の体験があるといいう一点で、何の「価値」もないこの白黒の、平板なテキストが読み切れようとしている。

「価値」としてはまったく「どうでもいい」もののはずが、ただならずのめり込んで読まれている。

身内でもなければ、知り合いでもない、赤の他人の、社会的身分さえ担保されていない書き話しなのに。

認識はスッ飛んでいる。

そこに作品が「ある」のかどうかさえよくわからない。

作品とはそういうものだ。

自分が「他者」をどこまで捉えられているか、そして「他者」と共にどこまでのアプローチ方法を持っているか。

そのことは、ささやかでも「作品」ということで如実にあらわれてくる

る。

「他者」を捉えられない、他者に展示する前提の「作品」ということに向き合った時点で、いきなり閉塞している混乱に陥る。

作品にアプローチするといって、何の自覚もなしに、ナルシシスティックなアプローチ方法が自分から出てくる。

たいてい、

「わっかんないんですけど」

「ぜんぜん、さっぱりわかりません」

という言い方が出てくる。

しかもその言い方は、どことなく、強く威張っている。

「作品」が、さっぱりわからないということは本当はないのだ。

なぜなら、「ローマの休日」と言って、そういう映画を知らないではないし、観たことがある。

古池や　かわづ飛び込む　水の音、というのも知っている。

たくさんの歌を聴き、何なら自分のプレイリストまで作成している。

ほとんどの人は、自分の読んできたマンガからおすすめの三作ピックアップすることができる。

「作品」がさっぱりわからないということはない。

タスマニアの草原をうろちょろしているウォンバットなら、自分のプレイリストなんてものは作成していないので、作品というのが「よくわからぬ」というのもわかるが、あなたはタスマニアのウォンバットではない。

「他者」を発見していれば、必ず「主題」の有無を目撃しているはずで、「主題」を目撃しているならば、「作品」ということはまったくわからぬいではないはずだ。

ウソをついてはいけない。

あなたはこどものころ、一度や二度は、自作のマンガを描こうとして

みたり、自作の小説を書こうとしてみたりしたはずだ。

手帳に自作のポエムがあつたりしたはずだ。

それを、他者に展示するという前提にすると、意識がぐわーんと混濁するというだけだ。

あなたは、自分の「作品」ということに向き合おうとする、それがとてもささやかなものであつたとしても、

「さっぱりわかりません」と言って、ピンチになる。

あなたは追い詰められるのだ。

何に追い詰められるのか。

他者に展示されるということにだ。

自分が茶碗を作り、自宅でそれを使うというだけなら、それはただの

趣味であつて、あなたは追い詰められない。

そうではなく、あなたがこれまでに受け取ってきた誰かの作品のように、自分の作品も展示され、誰かに受け取られるということになると、そのことに追い詰められるのだ。

作品といって、何もわかりやすいそうした「作品」だけではなくてよい。作品性に及ぶものはすべてだ。

たとえば誰かが、あなたにとても気分のよいあいさつをしてくれた。

あるいは誰かが、あなたにわかりやすい説明をして、教えてくれて先に進ませてくれた。

はたまた誰かが、あなたに気の利いたジョークをいい、あなたをパツと笑わせてくれた。

誰かが、魂を呼び込むという、実物・実演をあなたに示してくれたのだ。

あなたが六歳児なら、それについて、「すごいなあ」と見上げるだけ

でもこれを読んでいるあなたの実年齢は、おそらく六歳ではない。

あなたは、すでに六歳ではない自分が、ぐぐもつて自分の社会生活だけを冷淡にこなし、

「誰にも迷惑かけていないですか？」

と悪態をつくという、そのようなことでは、本当には何も成り立っていないのだということを、奥底ではわかっているのだ。

あなたがかつて見上げた「あの人」は、そんな歪んだ六歳児ではなかつたのだから。

おれがいま話していることは、とてもわかりやすいと思うが、あなたはおそらくこれを「わかりやすい」とは体験せず、「追い詰められる」と体感する。

ナルシシストにとっては、自分の見ているものだけが主題だからだ。

「追い詰められるんスよね～」

そのことが主題になり、おれの書き話していることは主題にならない。だからこそ、自分が自分の作品を手がけることになつたときは、それがどれだけささやかなものでも、閉塞した混乱に陥る。

「追い詰められた」とか「スカッとした」とか、「参考になつた」とか「考えさせられた」とか、これまで自分の感想だけを主題にしてきたからだ。

たとえば、仮にアニメ映画「天空の城ラピュタ」が、どうぜんひとつの大冒険譚として体験されていたら、「血沸き肉躍る冒険活劇」という作品への手がかりはゼロではないはずだ。

そこで、「胸がキューンとなつた」という感想しか抱えてこなかつた人は、いざ自分の作品ということになると、シャレにならない閉塞・混乱に陥る。

キューン、ナルシシスティックな快感、ナルシシスティックなときめき、それらから得られる強い「自負」。

それらはどうぜん、「他者」を前提にしていない。

(ナルシシズムのものだから、他者は発見されてもいない)

だから、それらの快感・ときめき・自負をもとに、他者に展示する前提の作品を手がけようとする、

「何をどうしたらしいか、さっぱりわからない」

となるのだ。

自分を、規模としてささやかなものでいいので、作品のほうへ踏み出させるのがいい。

そして、下手くそでもいいので、「他者」に通じる作品を示せ。

作品といって、時代に冠絶したきらびやかな才能を示せということではない。

まずは他者に、

「なるほどねえ」

と言わせればいいだけだ。

他人を侵略せず、言うことをきかせようとせず、よその何かをパクリもせず、「なるほどねえ」と言わせることは、それだけでなかなかむつかしい。

多くは、何かしらを主張して、

「ね、わかるでしょ？」

と、言うことをきかせ、支配・コントロールを仕掛けるということしかできないものだ。

他者に展示し、他者に手渡すという前提において、作品に踏み出すといふのはそれだけで「いい」ことだ。

もちろん、そうは言つても、けつときよくテクニックを身につけた六歳児ということを脱せず、単にエッチな女の子のイラストを描いて終わりとか、世の中の嫌味に共感を呼ぶマンガやコメントを発して終わりとか、そういうこともよくある。

その場合は、それを自分の魂の作品として「よいか」と訊かれると、当

人が「いやです」と否定することになるだけ。

自分で否定するならそれはどうぜん「作品」ではなかつたのだろう。

作品に踏み出すといって、第一の前提は、自分が他者にとって「要らない」ということに立つこと。そこにへへ平然とvv立てるようになること。それだけで、自分のナルシシズムに対する決定的なアンチテーゼになる。

ナルシシズムにおいて、「わたし」は自分にとって最重要のものだ。けれども、自分にとつてそう思っていることが、他者からはそうは思えていない。

当たり前だ。

そのことに平然と立ち、意識を混濁させず、意識を硬直もさせない。

冷淡にもならない。

冷淡とか、そういう……

おれはそこで、「あんなあ」と髪を搔きむしり、「要らないおれの気魄を甘くみるんじゃねえぞ」

どうそぶくことにしよう。

意識の混濁？ 硬直？

まさか、このおれが、あなたにとって要るとか要らないとか、そんな寝言にかまけることがあると思うのか。

おれがここに示している金言は、作品・作品性に踏み出す勇者にのみ正しく共有されよう。

自分の作品に踏み出したとき、意識が混濁する人は、体内に自分のナルシシズム・ティック・アプローチが湧いてきて、それが作品レベル・他者レベルには通じないということにぶつかって行方不明になり、意識が混濁している。

自分の作品に踏み出したとき、意識が硬直する人は、自分のナルシシズム・アプローチを封じ込め、代替によそから既製のイメージや

価値を借用して来、「自分でない」そのアプローチを捉えようとすることで（批評のターゲットを自分から逸らそうとする上で）、意識が硬直している。

ナルシシストを「他者」前提に向き合わせると、そんなものだ。

創作において、意識を混濁させない、硬直もさせない。

このことの、当たり前の手ごわさ、ささやかだがごまかしのきかないこの手ごわさに向き合わされると、ナルシシストは裏側で、別の発想を思いつきはじめる。

そこに湧いてくる発想は、ナルシシズムと作品性の相克において、ついにナルシシストになりきるという者のパターンだ、と説明しておこう。ナルシシストは、きゅうに思いつく。

「わかりました」

まるでついに自由になつたというよう。

「これをナルシシズムというなら、わたしは、ナルシシストのわたしを認めてほしいんです」

わたし、気づいた。

オレ、気づいたんだよね。

ナルシシストのわたしを愛してよ。

それってそんなにいけないこと？

むしろ、リアルな愛、本当の愛って、そういうものだと思う。

自分のことをごまかして、それで愛されたなんて、けつきよく我慢して納得したふりをしただけの、「ウソ」じゃないですか？

本当の愛は違うと思います。絶対。

わたしわかるもん。

わたし、そのことから逃げたくない。

誰かさんと違つて、わたし、逃げません笑。あるがままのわたし。

本当に、ここから正直で素直なわたし。

それを愛してくれる人が現れるまで、わたし負けちゃダメなんです。あはは、こういうときめきを、わたしは長いこと忘れていた気がする。

わたしは、自分がどうなりたいか、本当に気づいたやつた。

理屈じや、ないやつた。

これがさあ、あるがままのオレなんだから。

オレがオレのままでいること。それがやがて、正しい。

他者とかそういうのは、「何それ」としか思わない。

やがておれは、正しい。初めからね。

なぜかオレは、ずっとそのことだけは、知っているんだよなあ。

ごめんなさい、その「他者」っていうのは、たぶん、本當には価値のない残念な人たちのことだと思うの。

作品性というなら、実物というなら、いまこのときのわたしが、まさにわたしの実物で、いまのわたしは、何より作品性に満ちていると思う。

ニセモノじやなく、これが本物のわたし。

どう思いましたか？ あはは、ビビらせちゃつたかもしませんね。

オレはそういう、自分をごまかしたニセモノにだけは、なりたくないんで。

ちゃんとやつてている人しか、本当の男にはなれないと思いますよ？

簡単に言うと、このように、自分の作品に踏み出すということでコケてしまつた人は、たいていこうした逆方向のことを思いつき、ナルシシズムをこそ作品性だと言い出す。

そこまで行き着くと、もう、何が正しいとかどうするべきだというようなことは、おれからは言えない。

おれは、自分が正しいと断定してやつてているわけではないので、ナルシシストになり尽くした——もう戻つてはこない——彼が、誤つてている

と断定することもできない。

ただ、おれの側の勝手な言い方でいうなら、それは宇宙の法則として正しいのだと感じる。

おれにはそう視えるし、正直、そう目撃もしてきた。

ナルシシストになり尽くす、というのが、引力のとおりで、宇宙の原理原則としては正しい結果ではなかろうか。

だからこそ、おれは宇宙の法則を曲げたい。

宇宙の法則が曲がるのが好きだ。

宇宙の法則に、ただ従うのであれば、引力のとおり、われわれはみんなナルシシストになり尽くすだろう。

あなたにとつて「本氣」とは、ナルシシズムの

( ) のことだ

おれはもともと、この「ナルシシズム」という題材で書き話しをすることに、前向きではなかつた。

そのわりには、やけに詳しいだろう。

そう、おれはナルシシズムに詳しいのだ。

それは、いまから三十年前、おれがまだ十代だったころに、さんざん向き合つて研究させられたからだ。

おれがまだ十代だったころ、時代としては九十年代、おれは加藤諦三先生の本を複数読み、自分のナルシシズムというものにずいぶん向き合

わされた。

それは忘れるようなことではないし、時間で薄まっていくようなことでもない。

おれがこの題材に前向きになれなかつたのは、この題材についてはずでに、加藤諦三先生が言い尽くしているからだ。

何百冊も本が出てる。

いまさらおれが言い足すべきようなことは何一つないのだ。  
しかし一方で、時代の局面は、まさにこのナルシシズムということに、巨大なツケがやつてきたというところに来ている。

もはや、ナルシシズムを取り扱わないわけにはいかない、という状況だ。

おれとしては率直に、

「九十年代に逆戻りかよ」

という、憮然とした思いがある。

そのとおり、まったく、九十年代に逆戻りだ。

冗談でもなく、いまこのときの主題は、

「いまさらミスチルのイノセントワールドでも聴くの？」

というところにある。

おれは、その時代逆行に肯定的になれなかつたので、けつこう無理や

りに、そしてきつときわめて正当なこととして、これをナルシシズムと「作品」の読本とした。

ナルシシズムについては加藤諦三先生の著書を読めばいいのだ。

ただ、それと「作品」ということの重なりを言うのなら、いくらかおれ

にも語り手としての出番がありうるだらうということ。

加藤諦三先生は、「魂を呼び込む」などという、わけのわからないことは言わない。

おれが今回書き話したものは、もちろん加藤諦三先生から古く教えら

れることではあるが、すべてその後におれが直接体験してきたことにもとづいてのものだ。

加藤諦三先生に教わってはいるが、聞きかじりや丸パクリはしていない。

すべておれの話だ。

ちょっと昔話をとおこう。

おれが加藤諦三先生の本を読み、ナルシシズムとの向き合いに、ひどい格闘をしていたころ、時代のせいもあり、おれに影響されて、同じようく加藤諦三先生の本を読む奴が、知人のうちに複数現れた。

ある男が述懐したのは、加藤先生の本を指差し、「この中に、おれのことが書いてある」ということだつた。

彼はショックを受けていた。

加藤先生のナルシシズムについての指摘は、ことごとく、彼の幼稚な心理と精神にあてはまつたのだそうだ。

それからのこと、彼の様子は、まるで体内に「ナルシシズム」という語がずっと反響を繰り返しているように見えるほどだつた。

その後彼はどうなつただろうか。

おれがその後に目撃したのは、彼が、ナルシシズムの克服には「向かえなかつた」という事実だつた。

彼は、ナルシシズムの克服には向かえず、数年後には残念ながら、もうわたしの友人ではないものになつていつてしまつた。

わたしはそのときのことを覚えている。

「ナルシシズムを理解し、ナルシシズムを問題として捉えたからといって、ナルシシズムの克服に向かうことになるとは限らないんだ」

おれはつくづくそう思い知らされた。

おれはさいわいなことに、同時に、そうしてナルシシズムに向き合

つて、ナルシシズムを克服するほうへ進んでゆくことができた。

もし、加藤諦三先生に面談することがあるならば、おれは堂々と、

「加藤先生のおかげで、現在のわたしがあります」

とお礼と報告をするつもりだ。

わざわざそんなことをしようと、おれが企図しないのは、加藤先生のところにはどうせそうした人がすでにワンサカ詰め寄せているだろうからだ。

それならおれは、いくらかでも、加藤先生から教わった者として、まともな話のひとつでも展開したほうが有益だろうと、思う次第なのだった。

おれの知人は、ナルシシズムを克服するほうへ向かうことはできなかつた。

おれはさいわい、ナルシシズムを克服するほうへ向かうことができた。その差分はなんだつたのか。

もちろんこんなことは、どこまでいっても当人次第だ。

当人が選択していることにすぎない。

途中で隕石が降つてきて吹つ飛んだとでもいうならともかく、そうでないかぎり、けつきよく自分が選んでいる。おれはナルシシズムの克服を選んだ。

ナルシシズムを理解して、ナルシシズムに苦しみ、ナルシシズムに苦しむボクを愛してもらおうとする、というようなことは選ばなかつた。いまこうして話すかぎりは、それはただそれだけのとうぜんのことだが、当時のおれとしては、そのことは悲壯なほどの決断だつた。

ナルシシズムのボクを愛してもらおうとすることは、選ばない、とうのは。

おれはどのようにナルシシズムを克服してきたのか。加藤先生に、届くわけではないレポートをしよう。

おれはさまざまなもので、自分の実作、実演、実物、ということに向かつていたわけではない。

た。

ナルシシズムについてどうすればよいのかは、そんなにはつきりわかった。ただ、さまざまなもので、物事を作品としてまともなものにしようとした。

すべてを作品としてまともなものにするためにはどうすればいいか。

そのことに向かって突つ込んでいった。

いろんな形で突つ込んでいったが、もちろんそんなことをすべては書いていられない。

無数にあるし、いちいちが膨大な話だ。

それをぜんぶ書けと言われたら、おれはもう、

「おれが本サイトやブログで書いてきたすべてがそれだ、それらをすべて読めよ」

と言うしかない。

作品をまともなものにするためには、身も蓋もない、若いおれはもう「かなぐり捨てる」しかなかつた。

この「かなぐり捨てる」ということの中に、ナルシシズムも含まれていたらしい。

それはそうだろう、かなぐり捨てなくてはならない第一のものは、きっとそのナルシシズムだつたろうから。

作品ということになれば、誰もおれの言うことをきかない。

当たり前だ。

おれの小説を「面白がれ」と言うのか。「感動しろ」と言うのか。言うことをきかせるなんてこと、できるわけがない。

指揮者になつて棒を振り、「唄え」と言つても、声なんか出ない。言うことをきかせるなんてことはできない。

手品をやって、客に「びっくりしろ」というのか。

言うことをきかせるなどという、そんな発想は愚かでしかない。

女の子をデートに誘つて、「付き合え」「好い顔をしろ」「おれを好きになれ」というのか。

言うことをきかせることに興味はなくなり、むしろ人が言うことをきかないということに、おれはよろこびを見つけはじめた。

他者の発見だった。

他者を発見し、おれはかなぐり捨てる。

かなぐり捨てるに、人に「通じる」ということが起つた。

おれはそのときの歓喜を、いまでもはつきり覚えている。

おれはいまもずっとその歓喜の中にいるのだから。

まったく手の届きようのない、赤の他人のうるわしい女性が、かなぐり捨てたおれにはパツと、花の咲いたような笑顔を見させてくれた。

本当に通じるんだ、と、おれは奇蹟を目の当たりにしたと思つた。

地べたを這つていたおれに、とてもなく深く清潔な感動が与えられた。

指揮台に立つて指揮棒を振つていると、超能力かよ、みたいなことも起つてくる。

Nくんが唄い出しを間違いそうになるところを、おれは指揮台からパツと差し止めたのだ。

「あっぶねえ〜」

舞台上の全員が苦笑して思つた。

しかし、おれはなぜ、Nくんが間違つて唄い出し「そう」になるところがわかつたのだろう。

ブレイヤーは五十人以上並んでいて、おれはそこにNくんが立つてゐるなんてことは把握していないので、

ただその瞬間、

(オイ違うぞ!)

と、とつさに手を出して差し止めた。

すると、息を吸つたところでギリギリ止まつた、Nくんがそこにいた。

何かが通じている。

それが何なんて考えていられない。

ただかなぐり捨てるに、本当に何かが通じている。

何が起つてゐるのかを研究するような余地は、当時のおれにはなかつた。

そのまま突き進むしかなかつた。

余裕をこいてやっていたようなことではまったくなかつたから。

何の素地もなかつたおれが、まあ無理やりにでもよくやつたものだ。

無理やり駆け抜けて、演奏会が終わつた翌日には、もうおれの身体から、その超能力は漏出を始めていた。

そのことは、身体の感覚でなぜか直接わかつた。

「本当に、無理やり、出来もしないことをやつていたんだな」

そうしみじみ思はされた。

そのときから二十五年かけて、おれは当時のことも含め、「おれが体験していることは何なのか」を突き止めていた。

この報告はその四半世紀の研究結果ということになる。

あのとき何をしていたか、いまも何をしているのか。

魂を呼び込んでいるのだ。

おれが何かをしているわけではない。

呼び込まれた魂の現象があるだけだ。

おれに功績は一ミリもない。

漠然としたことではなく、魂魄、という事象をおれは体験している。そのことを研究していくことになつたのだが、そのことの奥行きが、まさかこんなにあるとは思わなかつた。

当時のおれは、「かなぐり捨てる」までするしかなかつた。

現在のおれは、もう余計なものを持つていないので、気魄を地べたに這わせて受け皿にする、ということで、呼び込むべきを呼びめるようになつた。

現在、二〇二五年の九月になつて、われわれはナルシシズムということに言及しないわけにはいかないという状況になつてゐる。

三十年分のツケがやつてきたのだ。

ほとんどの人は加藤諦三先生の本なんか読まなかつたろうし、読んだ人も、先ほど言つたように、ナルシシズムの克服に向かうというわけではなかつた。

そしてナルシシズムという問題を取り扱うとき、おれは、たしかな経験にもとづき、次のように言いうると思う。

「かなぐり捨てないと、作品は『まとも』にはならないよ」

おれが体験してきたことをそのままに、そう言えるだろう。小手先でちよいちよいしたつて、何ほどのものにもならない。

かなぐり捨てるといつて、何をかなぐり捨てるか。

第一に、ナルシシズムをかなぐり捨てないかぎり、作品および作品性というのは、「まとも」にならないだろう。

作品のためにそこらへん、と言い出すつもりはおれにはない。

作品なんて一般の人からは縁遠いものだ。

そんな縁遠いもののために、「かなぐり捨てる」などということは、一般の人には想像しにくいくことだらう。

そうではなく、おれが言つてゐるのは、むしろささやかな作品でいいから、縁を近くして、あなたらしくやつてみたらいいということだ。

かなぐり捨てるまでしなくていい。

あなたがあなたらしく、ささやかな作品をやればいい。

するとそこには、何が現れるか。

「かなぐり捨てていない」

ということが現れるだろう。

作品といつて、無理をせず立ち回れば、短編小説であろうが陶芸であろうが、「いちおう」「そこそこ」のものは創れるだろう。

それでかまわないし、むしろそうしたものにこそ現れているのだ。

その短編小説は、凡庸な文体で、ふつうの内容だろう。

その陶芸作品も、凡庸な造形で、ふつうのものだろう。

知人に率直に論評させるとどうなるか。

「まあ、ふつうですね」

率直に論評すればそうなるだろう。

このとおり、先に述べたとおりだ。

ん?

ここでおれの言つていることが先に読み取れた人は、とても構造の把握力が高い人だ。

先に述べたとおりだ。

あなたは、ふつうの自分を許しにくいし、ふつうの自分を愛しにくいだろうということだ。

自分の作品を、

「まあ、ふつうですね」

と評された。

あなたは落胆する。

なぜ落胆するのか。

なぜ「ふつう」なのに落胆するのか。

ナルシシズムがあるのだ。

あなたには、小説執筆の経験もないし、陶芸に人生を費やしたわけでもないのだが、それでもあなたは「特別」なのだから、その作品が「ふつ

う」と言わると落胆する。

あなたは、短編小説の第二作を書き、陶芸では、次の造形に挑戦したとする。

その後は、第三、第四、とやつていつたとする。

それが、十も二十も、とつづけられることはまずない。

あなたのこころが折れる。

精神が持たない。

何にあなたのこころは折れるのか。

毎回の落胆にこころが折れる。

毎回、「ふつう」「凡庸」「わざとらしい」しか出て来ないことにこころが折れる。

ナルシシズムがあり、あなたは自分を「特別」と思っているので、さつきと作品として「特別」な何かが出て来てくれないと、こころが折れるのだ。  
そこではあなたは、一念発起して、小説の執筆に向かう「方法」じたいを模索し、取り組みを本格化することにした。

どのような「方法」がありうるだろうか。

よくあるのは、自分の好きな音楽をガンガン聴いて、イメージとテンションを高めてから執筆に向かう、あるいは構想を膨らませる、という方法だ。

「こころを活発な状態にしないと、創作なんかできるわけないから」  
あなたが作品に向かおうとするときの手がかり。  
よくよく見ると、あなたはけつきよく、胸が「キューン」とするということ、そのことしか手がかりに持つていらないということになる。

自分を「キューン」とさせて、その感情の快感から、作品への「気持ち」を高めていこうとする。

あなたは気持ちを高め、思い切った作品をあらわそと、真剣に造作

と執筆に向かう。

その場合、執筆がどうなるかという例について考えていく。

そのときあなたは、「自分の昂る気持ちのままに書いた文章こそが、読み手のこころに流れ込んでいく」というイメージで、その執筆に没頭するようになる。

そのことには、はつきりとした快感がある。

そして、翌朝、あるいは三日後に、原稿を読み直すと、その原稿に見つかるものは、

「何の魂も呼び込まない文章」  
だ。

これは何を「発射」した代物なのか。

借りてきたイメージに耽溺し、文体を気取らせ、感情的なまま読み手に侵入しようとしているだろうけれど、それらの思いきりのすべてが逆に陳腐さを際立たせ、幼稚さを爆発させているというような文章だ。  
あなたはその、自分の書いた感情的なだけの文章を、恥ずかしく思い、原稿をボツにする。

そのことを何度も繰り返すと、

「こんなふうに、感情的に書いたってダメなんだ」  
ということを理解する。

だからあなたは、独りよがりに気持ちを昂ぶらせ、あくまで読み手にとつて読みやすいように書くんだ、とこころがけて筆を進めていく。  
そうするとどうなるか。

こんどは、しょせんその書き物が「冷淡だ」という問題にぶつかってくる。

聞こえて来るものがない、迫つてくるものがない。  
いちおう読めるが、読み物として「ザコ」すぎる。

あなたはいちおう読み手のことを考えているが、あなたにとつて読み

手というのは、

「ね、読んでみてどうだった？」

というような存在だ。

あるいは「いいね」を押してくれたり、コメント欄に肯定的な寸評を書いてくれるどこかの人のことだ。

あなたは他者を発見していない。

他者を発見していないので、読み手も発見していない。

それでは、気魄を読み手ともども受け皿たる作品に為さしめるなんてことはできようもない。

それだけつきよく、あなたのやることは、小説に向けてであれ読み手に向けてであれ、「自分の気持ちをぶっ込む」ということでしかなくなってしまう。

自分が「キューン」となるということを手がかりに、けつきよく「わたしの気持ちをぶちまけてわからせる」という作品を手がけるしかない。

あなたが若くておっぱいのデカい女性でもないかぎり、あなたの小説を心待ちしてくれる人なんて出て来ないだろうし、あなたの小説をその手にギュッと握りしめて震えてくれる人なんて出て来ないだろう。作品をやつてはみても、人から何というほどの反応はもらえない。それはしようがないことだ。

あなたはそれについて、

「まだ実力がないからしようがない。それは我慢する」と引き受ける。

我慢？

本書、ナルシシズムと作品の読本は、あなたに何を教えているか。

あなたには、作品に向かうアプローチ方法がすでにある、ということを教えている。

あなたがごく一般的な人なら、あなたにとつて「作品」なんてものは、

ずいぶん縁遠いものだろう。

だからあなたは、「作品」などというものについて、「アプローチ方法を持つていないですよ」と思っている。

そうではないのだ。

あなたはすでに、「作品」というものに向けての、アプローチ方法を持つている。

やつてみればわかる。

あなたが、ちょっとでも本気で「作品」をやつてみようとしたとき、あなたは何ひとつ教わらなくとも、「胸をキューンとさせるもののほうへ向かっていく」というアプローチをする。

何も教えなくても勝手にあなたはそうする。

作品へのアプローチ方法は、「あつてしまふ」のだ。

そのアプローチ方法こそ、ナルシシズムの快感原則なのだ。

そして本書は同時に、次のことも教えている。

あなたは自分自身について、どこまでも、

「わたしはナルシシストなのかなあ、それとも、そうではないのかなあ」ということを疑問に思つている。

そのことを自分ではつきりさせておきたいだろう。

そのためには、ちょこつとだけ「本気」で、何かしらの作品・表現に向かつてみたらい。

ちょこつとだけでいい。

あなたがピアノを弾いたりバイオリンを弾いたりするとしたら、あなたはその演奏表現を、どうやって「本気」でするだろうか。

そりやあ、数々のレッスンの先生が言つてきたとおりにする。

「もつと感情を込めて！」

レッスンの先生が「魂を呼び込め」とは言わなかつただろう。感情を込めるということ。それをちょこつとだけ本気です。

するはどうなるか。

胸がキューンとなつてくるに決まつてゐる。

ちよこつとでも「本氣」でやろうとすると、ナルシシスティックな方法が出て来る。

あなたにとつて「本氣」とは、「ナルシシズムの解放」なのだ。

あなたは「本氣」になつて、世界に自分のナルシシズムをぶつ放す。

そのときあなたは、これまでの自分の違和感が消えた、ときめきを覚える。

「本氣」といつて、それは「氣」なのだから、氣魄のことだ。

あなたはその「氣」を、世界にぶつ込み、世界を変える、と思つてい

る。

世界を受け皿に、自分の気持ちをぶつ込むと思つてゐる。

そのことを本氣で考へるとキューンとする。

よほどの経験と訓練の果てにいなかぎり、あなたはナルシシストなのだ。

「本氣」といつて、「氣魄を受け皿にする」「そこに魂が呼び込まれる」な

んて、まつたくやり方がわからないだろう。

当たり前だ。

胸がキューンとするほうに向かつていくしかない。

そのやり方しかわからないはずだ。

そしてそのキューンのやり方（快感原則）はなぜかわかつてしまふはずだ。

人は誰でも、幼児のころ、ナルシシズムの中を過ごしてきているからだ。

幼児のころから、ナルシシズムの方法は知つていて、一方、そうではない「本氣」のやり方など、ほとんどの人は知らない。知りようがない。

あなたは「本氣」で取り組んだそれを、「ふつう」と評されると落胆す

る。

あなたは自分のことを「割とふつうですけど」なんて思つてはいない。

あなたは本当は自分のことを「特別な何か」の人と思っている。

だから、あなたが本氣で取り組んだことは、誰かの胸にキューンと刺

さつてほしいし、その作品と表現については、評者に「特別な何かがあり

りますよね」と震え声で言われるようでありたいと、あなたは望んでい

る。

おれの場合はどうだつたかって？

おれの場合は、だから、かなぐり捨てていたから、それどころじやなかつた。

胸に刺さるとか、評者がどうこうとか、そんなこと一ミリも考へる余裕はなかつた。

自分の気魄を、地べた這わせていつて受け皿とし、そこに魂を呼び込む。

そして人の中枢に通じる現象が起ころとして、その現象の功績はおれにはない。

すべて、その呼び込まれた魂が体験されるだけだ。

そういう方法と現象があると、おれは唱えるのだが、仮にあなたがこのことを知つていつたとしても、あなたは途中で疑義を覚えて立ち止まるだろう。

「自分の功績じやないのだつたら、意味なくないですか？」

おれが冗談じやなく、百回訊かれてきたことだ。

あなたの望みは何か。

あなたの望みは、あなたの「本氣」が、人に刺さり、世界に刺さる、といふようなことだ。

あなたの望みは、「ナルシシストのわたしを愛してほしい」ということにある。

ナルシシストのわたしを愛させたい。

ナルシシストのわたしのまま認めてほしい。

ナルシシズムを超克して、魂を呼び込むなどということは、あなたが望みではないのだ。

「だって、自分の功績じやないのだとすると、やつていてさびしくないですか？」

「へへ人にとつて、作品に向き合うということは、己のナルシシズムに向き合うということなのだ▽▽。

そして同時に、己の作品を「まとも」なものにするというアプローチは、己のナルシシズムを克服してゆくというアプローチに重なるのでもある。

あなたがいま読んでいるものは、ナルシシズムと作品の読本だ。

ナルシシズムを克服してゆくアプローチは次のとおりだつた。

- ① 「が」の発見／自分を特別だと思つてゐる
- ② 「我慢」の発見／快感原則と我慢激怒の往復
- ③ 「他者」の発見／他人の決めることは他人が決める
- ④ 「冷淡問題」の発見／ザコの振る舞いに逃避するべからず
- ⑤ 「愛」の発見／魂を呼び込め

他者を発見せよ。他者を発見しないかぎり、自分が特別という誤認からは逃れられない。

自分が特別という誤認にいるうちには、ありもしない我慢が積み重なる。他者、そもそも他者とは、「言うことをきかない存在」というのが定義だ。

他者とは何か。それは単純なことだ。他人の決めるることは他人が決め

るだけのことだ。

するところで、「しょせん他人ですもんね」という安っぽい冷淡ぶりが現れて来る。

それは、「他人」という存在を前にして怯えて引っ込もうとしているだけのザコの挙動だ。

魂を呼び込め。

他者の中核へ直接通じる現象があるなら、他者を侵略して支配するなどという発想も行為も必要なくなる。

このようなことに本当に取り組むと、ほんどの人はたちまち精神的なパニックを起こすということも、わたしはよくよく知つてゐる。

とはいへ、それは感情が未分化だから起こつてることだ。

感情が未分化だと、感情に振り回され、不明の感情に振り回されるから、それはパニックの様相になる。

パニックの当事者はそのとき、自分こそが誰よりも「ここにある」と思つてゐるものだけれど、それも単純に誤りだ。

心理的成長・感情の分化を得ていった人が「ここにある」人になるのであって、未分化の感情に振り回される人が「ここにある」人なのではない。

ここにある人は感情に振り回されない。

ちょっとでも本気で作品に向き合うと、しだいに、ひとつのことにつき始める。

自分の持つていた「自負」が、その「作品」という當為に対しては、まったく何の役にも立たないのではないかということだ。

胸に「キュー」と来る、あのときめきさえ具えていた、自我の中央とさえ言いたくなるほどの自負。

あれがまさか、わたしの秘めたる「自信」ではなかつたというのか。

わたしは、ナルシシズムを克服したかどうかについて、「克服しました」

という報告を受けつけるつもりはない。

克服できていません、という話を受けつけるつもりもないし、「どうなんでしょうね」というあいまいに濁した話も受けつけるつもりがない。

おれは、おれ自身がそうしてきたように、実作・実演・実物をもつてのみ、ナルシシズム克服の如何を看取る。

三十年前、知人の体内には「ナルシシズム」という語が深く反響さえしているように見えたが、だからといってどうなのだ。

そうではない、おれはおれの体外に「作品」を響かせることに向かったからこそ、ナルシシズムの克服へと進めたのだと思う。

作品レベルで、実作レベルで、実演レベルで、ナルシシズムが出現しない人というのは、現実的にはきわめて少ない。

あなたがそのきわめて少数の例外に当たるという可能性も、ないではないが、何もそのような無理のある仮定にわざわざ立たなくともいいのではないか。

あなたがよほど自分のことを特別だと思っているのであれば、話はわかるけれど。

あなたの作品を、誰かが「ふつう」と評したら、あなたは落胆する。

けれども、いまのあなたでは想像がつかないかもしれない話、おれはいまここに示している自分の書き物について、正直に言えば「ふつう」に書いているつもりでいる。

特別な何かを現わそうとはしていない。

おれは「ふつう」だ。

おれは「ふつう」で、ここに示している文章はどちらかというと、乱雑できつたねえけれども、だらしないおれだから、まあいいじやん、と思っている。

おれはこの、ていどの低いおれを許し、愛しているのだ。

愛しているといつても、「まあこれでいいでしょ」と思っているだけだ

が。

なぜ「これでいい」のかというと、呼び込むべきものを呼び込めているからだ。

呼び込むべきものを呼び込めているのなら、おれの文章なんて「ふつう」でいいし、それ以下のヘツタクソでもかまわない。

ナルシシズムを克服すると言つたって、そんなもの、自分の実作と、実演と、実物、それをみずからに突きつけながら進むのでなかつたら。

克服なんてうそっぱちにしかならなかつただろう。

かなぐり捨てて駆け抜けようとしていた日々がなつかしい。

恐ろしい日々だつたけれど。

あのころの自分に後れを取らないようでありたい。

さいわい、あの日々を思い出しても、おれはキューンとなるわけではない。

じやあきつとあのときのつづきを生きられているのだろう。

そうして連続性があるのも、主題と作品性の特徴だ。

「ナルシシズムと作品の読本／了」